大学教育再生加速プログラム

比治山大学・比治山大学短期大学部

大学教育再生加速プログラム（AP）

テーマⅠ・Ⅱ複合型

事業成果報告書

令和 2(2020)年　2 月　21 日　現在

比治山大学 比治山大学短期大学部

報告書　目次

Ⅰ　事業の概要

1）選定取組の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

2）具体的な事業内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

3）年度ごとの重点事業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

Ⅱ　AP 事業取組報告

1）実施体制及び各組織等の活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

2）「比治山型アクティブ・ラーニング」の構築と実践（テーマⅠ）・・・・・・・20

3）評価指標モデルの構築と学修成果の可視化の実施（テーマⅡ）・・・・・・・・30

4）事業に関する FD・SD 活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73

5）事業に関する自己点検評価と外部評価の実施・・・・・・・・・・・・・・・・・92

6）事業に関する情報発信と提供、他大学・他教育機関等との連携・・・・・・・99

Ⅲ　取組の成果と課題

1）成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・104

2）課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・106

3）高大接続・入試改革・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・110

エビデンス一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・117

別冊　エビデンス集

「『比治山型アクティブ・ラーニング』の構築と実践」と

「評価指標モデルの構築と学修成果の可視化」

Ⅰ　事業の概要

1）選定取組の概要

本事業は、学生の生涯学び続ける学修意欲の向上と知識・技能の定着、及び地域社会に貢献する力を育むことを目的として、「『比治山型アクティブ・ラーニング』の構築と実践」（テーマⅠ）と「評価指標モデルの構築と学修成果の可視化」（テーマⅡ）とを複合的に行うものである。そのねらいは、学生に学びの充実感・成就感を実感させることにある。

両者の複合・融合によって、可視化される学修成果を学生自身に活用させることにより、「自分は何を学び、何を身につけ、どのような力を持つのか」という自身の強みを意識化させ、自己理解・肯定感を高めて社会に接続させる。また本学にとっては、さらなる教育改善の一階梯と位置づけ、今まで積み重ねてきた教育改革の経験と実績を、教職員・学生・地域が一体となった連携の中で再編・再構築し、地方の私立大学・短期大学併設型の小規模学園の教育システムの最適モデルとして実践・提供することを目指している。

平成 26(2014)年度の準備段階、平成 27(2015)年度の実施第一段階、平成 28(2016)年度の本格的運用段階、平成 29(2017)年度の発展的運用段階、平成 30(2018)年度の検証・改善段階を経て、平成 31・令和元(2019)年度は上記の目標に向けてこれまで実施してきた事業を完成・発展させる段階と位置付けている。

【「比治山型アクティブ・ラーニング」の構築と実践（テーマⅠ）】

「比治山型アクティブ・ラーニング」とは、学生の学ぶ意欲を引き出すため、体験や参加によって主体的に考えるきっかけをつくる授業展開であり、一方的な知識伝達型の授業を聞くような受動的な学習を乗り越え、学生自身による主体的・能動的で対話的な学修を通して「深い学び（ディープ・ラーニング）」へと導くものと定義して、アクティブ・ラーニング型授業の全学的な推進を図っている。

この、学生の“learning by doing”の全学的な推進を通して育成したい力を、本学の建学の精神「悠久不滅の生命の理想に向かって精進する」にもとづき、「自立」「想像」「共生」「創造」（４つのキーコンピテンシー）として抽出し、さらにこれらを、学生の学修アクティブ・ラーニングスキルの段階として捉え、各キーコンピテンシーを３つのスキルに編成・具現化した。これが本学において全学的に育成する汎用的能力であり、「４×３の比治山力」と呼んでいる。

本事業以前には、教員はそれぞれに学修支援的な「アクティブ・ラーニング」を実践してきた実績がある。それらを「４×３の比治山力」を到達目標とする「比治山型アクティブ・ラーニング」として再編成し、授業参観やレッスンスタディ、ワークショップといった全学 FD・SD による授業改善を行うことにより、本学のさらなる教育改善・改革に資する。

この「４×３の比治山力」を到達目標として設定し、共通教育科目や各学科専門科目の中で、これらのスキルの育成を目指す科目群を「コア・アクティブ・ラーニング（コア AL）科目群」とし、これらによる学修が、全体への学修意欲の向上と知識・技能の定着、汎用的能力の育成に効果を及ぼすよう、系統的・体系的な教育課程として編成し、これを「比治山型アクティブ・ラーニング」として全学的に再生加速していく。

「比治山型アクティブ・ラーニング」の特徴は、キーコンピテンシーの基礎となる導入部分「学びの主体者としての自分の実感」を重視し、学生を一人ひとり丁寧に学びに誘うところにある。まずは初年次教育、専門基礎教育から始め、学年を重ねる毎に学生が自らの学びを能動的・主体的に加速化し、最終的には「リフレクティブ・ラーニング」による学びの振り返りやリファインを通して、自身の強みを意識して地域社会に貢献できる力を育む「比治山型アクティブ・ラーニング」を構築する。

【評価指標モデルの構築と学修成果の可視化（テーマⅡ）】

「コア AL 科目群」から上記の「４×３の比治山力」を到達目標とした「比治山型アクティブ・ラーニング」を全学的に波及させていくために、本事業では同時に「評価指標モデルの構築と学修成果の可視化」（テーマⅡ）にも取り組んでいる。

「評価指標モデルの構築」については、「比治山型アクティブ・ラーニング」の効果の検証のため、本学独自指標として「比治山力レポート」(学生対象)、「４×３の比治山力　リフレクションシート」(教員対象)、「新規採用者のスキルに関する調査」　(卒業生就職先対象)の開発を行い、従来からの「学生による授業に関するアンケート調査」　(学生対象)等とともに毎年度実施している。これらの指標を組み合わせモデル化することで、学生の学修状況や意欲を含めた包括的な学生の学びや、大学生活を通じていかに成長し、どのような能力やスキルを身につけたかという成長過程を数値化・グラフ化して全学的に検証・改善を行っている。

また、「学修成果の可視化」については、可視化によって、学生の能動的・自主的な学びへの意欲の向上を図っている。そのための手段として、学生情報システム「Hi!way(ハイウェイ)」に学生自身による学修活動の PDCA サイクルの確立を支援する仕組みを取り入れている。これによって、学生が常に web 上で自身の成果と課題を把握し、次の学びを計画していく力を育みつつ、自身の強みをより意識した自作ポートフォリオ(e ポートフォリオ)として可視化し、自らの学びに支えられた自己肯定感を育むことができる。また、教職員はこれらの可視化される情報を活用した学生ガイダンスを充実させ、丁寧に学生に向き合っていくことができる。

【二つのテーマの融合】

以上のように、本事業はテーマⅠ・Ⅱを複合・融合させることにより、最終的に「自分は何を学び、何を身につけ、どのような力を持つのか」といった自身の強みを意識化させて自己肯定感を高め、学生の生涯学び続ける強い学修意欲の向上と知識・技能の定着、生きる力としての汎用的能力「４×３の比治山力」をもって、地域社会に貢献する力を育む。

2) 具体的な事業内容

「平成 31・令和元(2019)年度大学改革推進等補助金（大学改革推進事業）調書」に記した具体的な事業内容は以下の通りである。

①本事業推進のための全学的組織「質的転換加速化本部」を置き、APWG を中心に部会等を設けながら、運営戦略本部・各種委員会やセンターと連携して活動、教学委員会各専門委員長および大学・短期大学部の各学科・コースの教学委員を「ファカルティ・ディベロッパー」(FDer) に任命し養成

②「コア AL 科目」を中心として「比治山型アクティブ・ラーニング」を実践、「コア AL 科目」以外への「比治山型アクティブ・ラーニング」の波及

③「比治山型アクティブ・ラーニング」および学修成果の可視化についてのガイダンス資料「４×３の比治山力　学修の手引き」を学生に配付、「比治山型アクティブ・ラーニング」実践マニュアル「アクティブ・ラーニング実践事例集」を全教職員に配付、「コア AL 科目」担当教員を対象に「４×３の比治山力　リフレクションシート」による調査を実施

④「比治山型アクティブ・ラーニング」授業支援のための教職員プラットフォーム「アクティブ・ラーニング推進室」を活用、専従スタッフ２名を継続配置

⑤「比治山型アクティブ・ラーニング」授業実践のために、タブレット端末（iPad）活用型授業の手法等について調査・実践

⑥e-learning システム「Hi!space（ハイスペース)」等（LMS［Learning Management System］）の運用、授業コンテンツを制作・編集して機能や効果を検証
⑦「大学生基礎力レポート」（ベネッセ i-キャリア）の実施、本学独自開発指標「比治山力レポート」の実施、「学生による授業に関するアンケート調査」と関連付けた効果の測定、「AP 学生モニターに対する聞き取り調査」による「比治山型アクティブ・ラーニング」と「４×３の比治山力」（汎用的能力）に関する意見聴取の実施
⑧卒業生の就職先を対象とした「４×３の比治山力」（汎用的能力）に関する「新規採用者のスキルに関する調査」の実施・分析
⑨「比治山型アクティブ・ラーニング」を通じて育成を目指す「４×３の比治山力」（汎用的能力）の各スキルについて再構築したルーブリックに関する検証
⑩成績評価に関する基準の厳格化と平準化の運用・検証
⑪本学学生情報システム「Hi!way」に構築した e ポートフォリオシステム「Hi!check（ハイチェック)」「Hi!step（ハイステップ)」の運用、利用のためのガイダンス資料「４×３の比治山力　学修の手引き」を学生に配付
⑫学期毎のオリエンテーション等を利用して学生ガイダンスを実施、チューターやゼミ担当教員等によるフォローアップを実施
⑬「Hi!check・Hi!step アンケート」および「AP 学生モニターに対する聞き取り調査」を実施
⑭「比治山型ディプロマ・サプリメント」の公開・運用
⑮本事業に関わる FD・SD 活動の一環として、外部講師等による研修会・ワークショップ・セミナーの開催（年間 2 回)、授業公開・教職員間授業参観の推進、FDer 養成研修会の実施、レッスンスタディ（年間 7 授業程度）の開催
⑯アクティブ・ラーニング、ラーニング・コモンズ、学修成果の可視化、入試改革、高大接続、卒業時の質保証等に関するフォーラム・セミナーへの参加および先進モデル校の視察、参加後の示唆報告書の提出
⑰本事業に関する情報の学内向け周知、理解の促進、検証したデータのフィードバック、年間活動報告等のため、教職員合同研修会を開催
⑱本事業に関する自己点検評価（高等教育研究所）の実施、外部評価委員会の開催、事業継続に向けた体制案作成
⑲本事業の進捗状況や関連情報の発信（本学 HP)、他大学等からの視察への対応、他大学等への講師派遣依頼への対応、他大学等との連携（ジョイントフォーラム、セミナーの開催)
⑳最終報告会の開催、最終報告書の作成

3）年度ごとの重点事業

平成 26(2014)年度　準備段階
・「質的転換加速化本部」をはじめとした実施体制の整備
・「アクティブ・ラーニング」の基礎的知識の理解と学内共有
・「４×３の比治山力」の設定
・「Hi!way」の再構築による可視化システムの構想

平成 27(2015)年度　実施第一段階

・「比治山型アクティブ・ラーニング」の構築と実践
・「Hi!way」の再構築による可視化システムの運用

平成 28(2016)年度　本格的運用段階

・「比治山型アクティブ・ラーニング」の実践・検証
・「Hi!way」の再構築による可視化システムの運用・検証

平成 29(2017)年度　発展的運用段階

・「比治山型ディプロマ・サプリメント」の構築
・AP 事業による取組に関する学内外に向けた広報

平成 30(2018)年度　検証・改善段階

・「比治山型ディプロマ・サプリメント」の試験的公開・検証
・AP 事業による取組の成果把握の準備

平成 31・令和元(2019)年度　完成・発展段階

・「比治山型ディプロマ・サプリメント」の運用
・AP 事業による取組の成果把握
・AP 事業による取組の総括と継続に関する検討

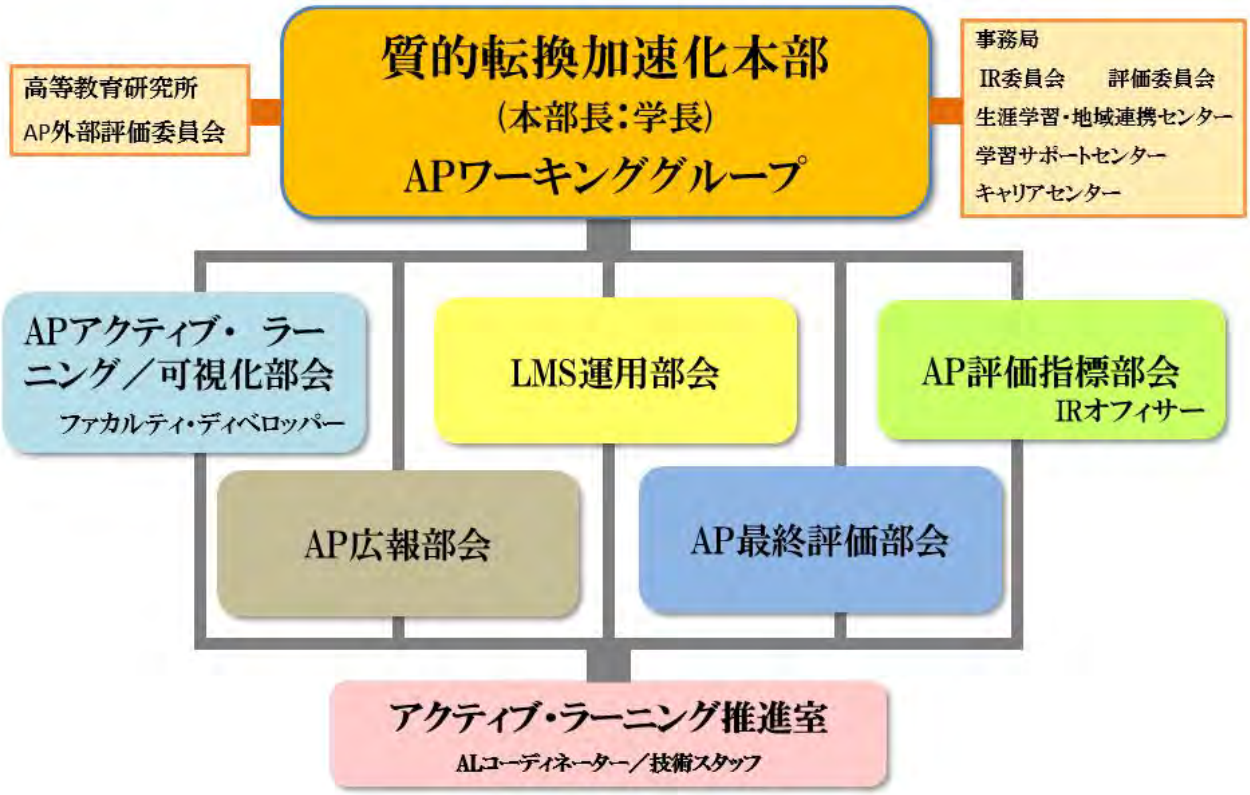
Ⅱ AP 事業取組報告

1）実施体制及び各組織等の活動

平成 26(2014)年度に、学長のリーダーシップのもと、本事業推進のための全学的な組織として比治山大学・比治山大学短期大学部合同の「質的転換加速化本部」（本部長：学長）を設置し、本事業に関わる既存の委員会やセンター等の業務を一部集約するなど、体制の整備と構築を行った。これにより、本事業の運営実施体制を確実なものとするとともに、これまで各教員が個々に行ってきた教育上の様々な工夫や取り組みを、全学的に組織的かつ効率的に継続して実行していくこととした。

この本部のもとに、中核的な推進組織として「AP ワーキンググループ」を置き、教学委員会等と連携しながら全学的に組織的かつ効率的に推進することができる本事業の堅実な運営実施体制を構築した。また「AP ワーキンググループ」の下部組織として部会を設け、本事業の進捗状況に即して適宜組織の変更を行った。さらに「アクティブ・ラーニング推進室」を設置し、日常的なアクティブ・ラーニング実践を支援する拠点としたほか、外部評価を受けるための外部組織として「AP 外部評価委員会」を設置した。各部会等の主な活動は以下の通りである。

【学内の実施体制図】



〇AP アクティブ・ラーニング／可視化部会

平成 26(2014)年度は、アクティブ・ラーニングの理念や技法の共有化を図り、アクティブ・ラーニングの授業モデルの開発とその評価指標の開発を行うため、比治山大学・比治山大学短期大学部合同の教職員からなる「AP アクティブ・ラーニング部会」「AP 指標開発可視化部会」を置き、「比治山型アクティブ・ラーニング」の構築、本学の建学の精神に基づく「４つのキーコンピテンシー（自立・想像・共生・創造）」とそこから導き出される「３つずつのスキル」を組み合わせた「４×３の比治山力」の編成・具現化を進めた。

平成 27(2015)年度は、「AP アクティブ・ラーニング部会」、「AP 可視化部会」を置き、アクティブ・ラーニングの推進、ファカルティ・ディベロッパー（FDer）の養成、および学修成果の可視化を図る学生情報システム「Hi!way」の再構築を行った。

平成 27(2015)年度までの取組によって e ポートフォリオシステム「Hi!step」「Hi!check」を中心とした「Hi!way」の再構築が完了し、システムの利用促進などの運用面に関する検討が中心となったため、平成 28(2016)年度以降は「AP アクティブ・ラーニング部会」と「AP 可視化部会」を合併して、「AP アクティブ・ラーニング／可視化部会」とした。

〇AP 評価指標部会

平成 26(2014)年度に、本学独自の指標開発と学修成果の可視化を推進するために、教授学と心理学の専門教員および IR オフィサーを中心にした「AP 指標開発可視化部会」を編成した。この部会の中に「指標開発ワーキンググループ」を立ち上げ、本事業全体の評価指標の検討と、「比治山型アクティブ・ラーニング」の到達度評価の検討を行い、本学独自指標「比治山力レポート」を作成した。また「可視化ワーキンググループ」を立ち上げ、本学の学生情報システム「Hi!way」の再構築を行う中で、本学独自の機能「Hi!check」部分として、1）各セメスターの GPA の推移を可視化する「成績の推移」、2）学生の成長度を「コア AL 科目」の GPA を利用して４つのクローバーに模して可視化する「４×３の比治山力」、3）免許・資格のポートフォリオ機能を持つ「免許・資格」の 3 機能の開発を行った。

平成 27(2015)年度は「AP 指標開発評価部会」を置いて、引き続き本学独自の評価指標モデルの構築を行った。平成 28(2016)年度より「AP 評価指標部会」という名称に変更し、アクティブ・ラーニング及び可視化に係わるデータ集計及び分析を主たる業務とした。

〇LMS 運用部会

学生情報システム「Hi!way」に新たに加えた e-learning システム「Hi!space」（LMS）の運用準備・検証のため、平成 28(2016)年度に「LMS 運用準備部会」を設置した。

平成 29(2017)年度以降は、「LMS 運用部会」として学内での利用が活発化するための取組を行ったほか、本学ポータルサイトに導入された G Suite 教育版機能の活用についても協議した。

〇AP 広報部会

平成 29(2017)年度の自己点検評価・外部評価での指摘をふまえ、本事業に関する取組の学外（高校生および保護者、企業・地域社会、他大学等）向け広報の充実を図るため、平成 30(2018)年度に「AP 広報部会」を設置した。

〇AP 最終評価部会

本事業の最終年度における取組成果の把握・発信と、補助期間終了後を見据えた対応を行うため、平成 30(2018)年度に「AP 最終評価部会」を設置した。

〇アクティブ・ラーニング推進室

平成 26(2014)年度に、「比治山型アクティブ・ラーニング」の構築と実践のため、アクティブ・ラーニングに関わる専従のコーディネーターと、授業録画や授業コンテンツの作成・編集業務にあたる専従の技術助手の計 2 名を配置し、質的転換加速化本部執務室を通称「AP オフィス」と命名して AP に関する業務を行った。

平成 27(2015)年度以降もコーディネーター・技術助手の計 2 名を継続して雇用し、平成 27(2015)年度より開設した「アクティブ・ラーニング推進室」に常駐することで、アクティブ・ラーニング授業実践の交流のためのプラットフォーム機能を果たした。

〇外部組織　AP 外部評価委員会

本事業全体及びアクティブ・ラーニングと学修成果の可視化の実施状況や成果に関する客観的、総体的かつ継続的な評価を受けられる体制を構築することにより、堅実な PDCA サイクルに基づいた本事業の推進を行うため、高等教育に関わる有識者と、広島県内の商工会議所の会頭、広島経済同友会の代表幹事、本学の保護者代表として後援会会長、広島県教育委員会事務局からの推薦者からなる AP 外部評価委員会を平成 26(2014)年度より設置した。特に、学識経験者に加えて地域の教育・産業を代表する外部評価委員からの忌憚のない意見を取り入れることにより、人材育成と研究成果の還元との両面から、地域社会の要望に応え、地域との連携を強化していくこととした。

平成 27(2015)年度からは高等教育に関わる有識者を 2 名に増員した。また、平成 29(2017)年度の中間評価結果および平成 30(2018)年度のフォローアップ報告書での指摘をふまえ、外部評価委員会の機能強化を図ることを目的として、平成 30(2018)年度からキャリアコンサルタントを外部評価委員に加えた。

【平成 26(2014)年度　実施体制】

本部　質的転換加速化本部	
本部長	学長
副本部長	教育学生担当副学長
本部委員	地域連携・研究担当副学長/現代文化学部長/健康栄養学部長/短大部長/キャリアセンター長/教学副委員長(2名)/IR委員長/事務局長/事務局次長/学長室長/総務室長(2名)/入試広報室長/学生支援室長/キャリア支援室長/情報システム室長/図書課長
APワーキンググループ	座長・教学副委員長(土居)/教学副委員長(斉藤)/ IR委員長(杉田)/鹿江/谷川/情報システム室長(藤井)/学生支援室長(竹迫)
連携	評価委員会/高等教育研究所/学習サポートセンター/IR委員会/キャリアセンター
APワーキンググループ下部組織	
APアクティブ・ラーニング(APAL)部会	部会長(土居)/APワーキンググループ(7名)/大学教学委員(山﨑真/佐々木淳/村上/谷渕/鹿江/上村)/短大教学委員(久保田/山﨑初/斉藤)/施設・研究担当(片山)/ALコーディネーター(中村)/技術スタッフ(中尾)
AP指標開発可視化部会	部会長(斉藤)/APワーキンググループ(7名)/伊藤/塚脇/寺岡/土井/前田/学生支援室(広瀬)/IRオフィサー(酒井)
外部組織	
AP外部評価委員会	学識経験者/企業採用担当者/保護者/商工会議所/教育委員会

【平成 26(2014)年度　各組織等の活動】

各組織名	開催日	開催回数	主な協議内容
質的転換加速化本部	9月1日 11月10日 1月19日 3月25日	4回	平成26(2014)年度実施体制 外部評価委員の委嘱 AP第1回セミナーの開催 「アクティブ・ラーニング推進室(仮称)」の開設
APワーキンググループ	毎月2～3回	51回	事業の推進全般
APアクティブ・ ラーニング部会	9月12日 9月30日 10月6日 10月21日 11月25日 12月24日	6回	比治山型アクティブ・ラーニングの定義及び手法 12のスキルとルーブリック コアAL科目の選定 GAKUENバージョンアップに関わる機能説明
AP指標開発可視化部会	9月12日 9月24日 10月1日 10月6日 10月15日 10月29日 11月12日 1月21日	8回	比治山型　学修成果・指標モデル(学修成果の可視化＝学修ポートフォリオ) GAKUENバージョンアップに関わる機能説明 指標開発 社会人基礎力調査＆比治山力調査(仮称)の実施日時

【平成 27(2015)年度　実施体制】

本部　質的転換加速化本部	
本部長	学長
副本部長	教育学生担当副学長
本部委員	地域連携・研究担当副学長/現代文化学部長/健康栄養学部長/短大部長/キャリアセンター長/教学副委員長(2名)/IR委員長/事務局長/事務局次長/学長室長/総務室長(2名)/入試広報室長/学生支援室長/キャリア支援室長/情報システム室長/図書課長
APワーキンググループ	座長(斉藤)/教学副委員長(山﨑真)/教学副委員長(寺田)/ AL推進室長(鹿江)/谷川/塚脇/情報システム室長(藤井)/学生支援室長(定岡)/キャリア支援室長(竹迫)
連携	評価委員会/高等教育研究所/学習サポートセンター/IR委員会/キャリアセンター
APワーキンググループ下部組織	
APアクティブ・ラーニング(APAL)部会	部会長(山﨑真)/副部会長(寺田)/APワーキンググループ(9名)/大学教学委員(安間/佐々木淳/山本/谷渕/鹿江/上村)/短大教学委員(久保田/森田/斉藤)/施設・研究担当(片山)/ALコーディネーター(中村/池島)/技術スタッフ(中尾)
AP可視化部会	部会長(斉藤)/副部会長(谷川)/APワーキンググループ(9名)/寺岡/土井/芦谷/学生支援室(來山→太田*)/キャリア支援室(金岡)
AP指標開発評価部会	部会長(寺田)/副部会長(山﨑真)/APワーキンググループ(9名)/伊藤/塚脇/前田/学生支援室(広瀬)/IRオフィサー(酒井→松村さ*)
アクティブ・ラーニング推進室	
アクティブ・ラーニング推進室	室長(鹿江)/APワーキンググループ(9名)/ALコーディネーター(中村/池島)/技術スタッフ(中尾)
外部組織	
AP外部評価委員会	学識経験者(1名→2名*)/企業採用担当者/保護者/商工会議所/教育委員会

＊事務局の人事異動に伴い担当職員が変更となった。また、外部評価委員の学識経験者を１名から２名に増員した。

【平成 27(2015)年度　各組織等の活動】

各組織名	開催日	開催回数	主な協議内容
質的転換加速化本部	7月30日 3月8日 3月25日	3回	Hi!wayによる学修成果の可視化 学生による授業に関するアンケート調査 APセミナー(第1・2回)の開催 予算申請
APワーキンググループ	毎月2～3回 前期火曜16:30～ 後期水曜14:40～	39回	事業の推進全般
APアクティブ・ ラーニング部会	毎月1回 (月曜18:00～)	11回	FDer養成研修 Hi!wayシステムの新機能 4×3の比治山力　リフレクションシート
AP可視化部会	12月9日	1回	学修成果の可視化の取組 Hi!wayシステムの新機能
AP指標開発評価部会	5月12日 6月2日 6月16日	3回	4×3の比治山力　リフレクションシート 新規採用者のスキルに関する調査(卒業生就職先対象)

上記の活動に加えて、必要に応じ「LMS ワーキンググループ」「Hi!step ワーキンググループ」「指標開発ワーキンググループ」等の小ワーキンググループを設定して協議を重ねた。

【平成 28(2016)年度　実施体制】

質的転換加速化本部	
本部長	学長
副本部長	教育学生担当副学長
本部委員	地域連携・研究担当副学長/現代文化学部長/健康栄養学部長/短大部長/キャリアセンター長/教学副委員長(2名)/IR委員長/事務局長/事務局次長/学長室長/総務室長(2名)/入試広報室長/学生支援室長/キャリア支援室長/情報システム室長/図書課長
APワーキンググループ	座長(斉藤)/教学副委員長(山﨑真)/教学副委員長(寺田)/ AL推進室長(鹿江)/谷川/寺岡/塚脇/情報システム室長(藤井)/学生支援室長(定岡)
連携	評価委員会/高等教育研究所/生涯学習・地域連携センター/学習サポートセンター/IR委員会/キャリアセンター
APワーキンググループ下部組織	
APアクティブ・ラーニング/ 可視化部会	部会長(斉藤)/副部会長(山﨑真/寺田)/教学専門委員長(佐々木淳/芦谷/九内/金野/谷川)/大学教学委員(安間/大牛/山本/塚脇/鹿江/沖本)/短大教学委員(森田/馬杉/斉藤)/寺岡/学生支援室長(定岡)/学生支援室(広瀬/太田)
LMS運用準備部会	部会長(鹿江)/副部会長(斉藤)/APワーキンググループ(山﨑真/寺田/寺岡/塚脇/藤井)/山田耕/佐々木淳/難波/学生支援室(猫本)/ALコーディネーター(池島)　/技術スタッフ(中尾)
AP評価指標部会	部会長(寺田)/副部会長(鹿江/塚脇)/IR委員会(谷川/松村さ)/伊藤/前田/学生支援室(中島)
アクティブ・ラーニング推進室	
アクティブ・ラーニング推進室	室長(鹿江)/APワーキンググループ(9名)/ALコーディネーター(池島)/技術スタッフ(中尾)
自己点検評価	
自己点検評価	高等教育研究所
外部組織	
AP外部評価委員会	学識経験者(2名)/企業採用担当者/保護者/商工会議所/教育委員会

【平成 28（2016）年度　各組織等の活動】

各組織名	開催日	開催回数	主な協議内容
質的転換加速化本部	4月26日 8月9日 3月10日	3回	平成28(2016)年度大学教育再生戦略推進費 大学教育再生加速プログラム（AP）「高大接続改革推進事業」の計画調書 平成27(2015)年度の外部評価委員会・自己点検評価の結果を受けた改善案 APセミナー（第1・2回）の開催 平成28(2016)年度実施報告書
APワーキンググループ	毎月2～3回	32回	事業の推進全般
APアクティブ・ラーニング/可視化部会	毎月1回 （月曜18:00～）	12回	FDer養成研修 4×3の比治山力 リフレクションシート レッスンスタディ開催
LMS運用準備部会	毎月1回程度	9回	iPadの活用 授業収録機器 LMSの活用方法
AP評価指標部会	4月13日 5月17日 7月28日 11月25日	4回	成績評価の厳格化等 AP学生モニター 授業アンケートの内容（学習意欲・授業外学修時間・全体的満足度等）と関連づけた効果の測定 比治山力レポート等の分析

【平成 29（2017）年度　実施体制】

質的転換加速化本部	
本部長	学長
副本部長	教育学生担当副学長
本部委員	地域連携・研究担当副学長/現代文化学部長/健康栄養学部長/短大部長/キャリアセンター長/教学副委員長（2名）/IR委員長/事務局長/学長室長/総務室長（3名）/入試広報室長/学生支援室長/キャリア支援室長/情報システム室長/図書課長
APワーキンググループ	座長・教学副委員長（斉藤）/副座長（山﨑真）/教学副委員長（佐々木淳）/鹿江/谷川/川人/情報システム室長（新井）/学生支援室長（定岡）
連携	評価委員会/高等教育研究所/生涯学習・地域連携センター/学習サポートセンター/IR委員会/キャリアセンター
APワーキンググループ下部組織	
APアクティブ・ラーニング/可視化部会	部会長（佐々木淳）/副部会長（山﨑真）/教学専門委員長（山﨑真/芦谷/九内/金野/谷川）/大学教学委員（安間/大牛/山本/塚脇/鹿江/沖本）/短大教学委員（前田和/馬杉/斉藤）/川人/学生支援室長（定岡）/学生支援室（広瀬/太田）
LMS運用部会	部会長（鹿江）/副部会長（斉藤）/APワーキンググループ（山﨑真/佐々木淳/川人/新井）/山田耕/難波/学生支援室（猫本）/ALコーディネーター（大年）　/技術スタッフ（酒井）
AP評価指標部会	部会長（谷川）/副部会長（前田和）/IRオフィサー（松村さ）/学生支援室（中島）
アクティブ・ラーニング推進室	
アクティブ・ラーニング推進室	APワーキンググループ（8名）/学生支援室（野村）/ALコーディネーター（大年）/技術スタッフ（酒井）
自己点検評価	
自己点検評価	高等教育研究所
外部組織	
AP外部評価委員会	学識経験者（2名）/保護者/商工会議所/経済同友会/教育委員会

【平成 29（2017）年度　各組織等の活動】

各組織名	開催日	開催回数	主な協議内容
質的転換加速化本部	4月26日 8月7日 3月12日	3回	平成29(2017)年度年間工程表 平成28(2016)年度外部評価・自己点検結果と改善案 平成28(2016)年度実績報告書 中間評価調書 APセミナー（第1・2回）の開催 「比治山型ディプロマ・サプリメント」の構築 「4×3の比治山力」ルーブリック 平成30(2018)年度調書
APワーキンググループ	毎月2～4回	36回	事業の推進全般 「比治山型ディプロマ・サプリメント」の構築 中間評価調書 APセミナー（第1・2回）の開催 「4×3の比治山力」ルーブリック 平成30(2018)年度調書
APアクティブ・ラーニング/可視化部会	毎月1回	11回	FDer養成研修 教育課程改正等にともなうコアAL科目の修正 Googleの活用方法 「比治山型ディプロマ・サプリメント」の構築 「4×3の比治山力」ルーブリック
LMS運用部会	毎月1～2回	12回	iPadの活用 授業収録機器 LMSの活用方法 Googleの活用方法
AP評価指標部会	6月22日 9月13日 10月24日 1月30日 2月27日	5回	AP学生モニター 新規採用者のスキルに関する調査 比治山力レポート等の結果 指標モデル

【平成 30（2018）年度　実施体制】

質的転換加速化本部	
本部長	学長
副本部長	教育学生担当副学長
本部委員	地域連携・研究担当副学長/現代文化学部長/健康栄養学部長/短大部長/キャリアセンター長/教学副委員長（2名）/IR委員長/事務局長/学長室長/総務室長（3名）/入試広報室長/学生支援室長/キャリア支援室長/情報システム室長/図書課長
APワーキンググループ	座長（山﨑真・斉藤）/副座長・教学副委員長（鹿江）/副座長（佐々木淳）/教学副委員長（荒木）/谷川/寺岡/情報システム室長（新井）/学生支援室長（定岡）
連携	評価委員会/高等教育研究所/生涯学習・地域連携センター/学習サポートセンター/IR委員会/キャリアセンター
APワーキンググループ下部組織	
APアクティブ・ラーニング/可視化部会	部会長（斉藤）/副部会長（鹿江・荒木）/教学専門委員長（福伊/芦谷/小林/重迫/谷川）/大学教学委員（九内/佐々木淳/山田耕/谷渕/森川/宮原）/短大教学委員（迫垣内/楠本/宮﨑）/寺岡/山﨑真/学生支援室長（定岡）/学生支援室（広瀬/太田）
LMS運用部会	部会長（鹿江）/副部会長（佐々木淳）/APワーキンググループ（斉藤/寺岡/山﨑真/新井）/山田耕/九内/難波/学生支援室（猫本）/ALコーディネーター（澤本）/技術スタッフ（酒井）

AP評価指標部会	部会長（谷川）/副部会長（山本敏）/IRオフィサー（松村さ）/学生支援室（中島）
AP広報部会	部会長（佐々木淳）/副部会長（久保田）/APワーキンググループ（荒木/斉藤/寺岡/山﨑真）
AP最終評価部会	部会長（山﨑真）/副部会長（斉藤）/APワーキンググループ（鹿江/佐々木淳/谷川）
アクティブ・ラーニング推進室	
アクティブ・ラーニング推進室	APワーキンググループ（9名）/学生支援室（野村）/ALコーディネーター（澤本）/技術スタッフ（酒井）
自己点検評価	
自己点検評価	高等教育研究所
外部組織	
AP外部評価委員会	学識経験者（2名）/保護者/経済同友会/教育委員会/キャリアコンサルタント

【平成 30（2018）年度　各組織等の活動】

各組織名	開催日	開催回数	主な協議内容
質的転換加速化本部	4月17日 7月3日 3月11日	3回	平成29(2017)年度外部評価・自己点検結果と改善案 平成30(2018)年度年間工程表 平成30(2018)年度の重点目標 平成29(2017)年度実績報告書 平成29(2017)年度実施状況報告書 APセミナー（第1・2回）の開催 「比治山型ディプロマ・サプリメント」の検証 平成31(2019)年度調書
APワーキンググループ	毎月2～4回	28回	事業の推進全般 「比治山型ディプロマ・サプリメント」の検証 平成29(2017)年度実施状況報告書 APセミナー（第1・2回）の開催 平成31(2019)年度調書
APアクティブ・ラーニング/可視化部会	毎月1回	11回	FDer養成研修 教育課程改正等に伴うコアAL科目の修正 Googleの活用方法 「比治山型ディプロマ・サプリメント」の検証
LMS運用部会	12月6日 12月20日 1月17日 2月14日 2月28日 3月14日	6回	iPadの活用 LMSの活用方法 Google Classroomの活用方法 学内ミニ・ワークショップ
AP評価指標部会	7月10日 9月24日 1月11日 2月7日 2月26日	5回	AP学生モニター 新規採用者のスキルに関する調査 比治山力レポート等の結果 AP事業開始前後の授業アンケートの回答結果 評価指標モデルの構築
AP広報部会	5月22日 6月12日 7月17日 8月27日 10月12日 11月30日	6回	HPにおけるAP関連活動報告 AL・可視化等関連セミナーの学内配信 オープンキャンパス等でのAP広報 高校生向けAPチラシ作成 比治山祭でのAP事業展示 APパンフレット（文部科学省作成）
AP最終評価部会	7月24日 2月28日	2回	最終報告書作成に向けた準備 補助期間終了後の体制の原案作り

【平成 31・令和元(2019)年度　実施体制】

質的転換加速化本部	
本部長	学長
副本部長	大学・教育改革担当副学長
本部委員	研究・地域連携・広報戦略担当副学長/教育・学生担当副学長/現代文化学部長/健康栄養学部長/短大部長/キャリアセンター長/教学副委員長(2名)/IR委員長/事務局長/学長室長/総務室長(3名)/入試広報室長/学生支援室長/キャリア支援室長/情報システム室長/図書課長
APワーキンググループ	座長(山﨑真・斉藤)/副座長(鹿江・佐々木淳)/教学副委員長(伊藤克)/教学副委員長(楠本)/谷川/寺岡/情報システム室長(新井)/学生支援室長(定岡)
連携	評価委員会/高等教育研究所/生涯学習・地域連携センター/学習サポートセンター/IR委員会/キャリアセンター
APワーキンググループ下部組織	
APアクティブ・ラーニング/可視化部会	部会長(佐々木淳)/副部会長(伊藤克・楠本)/教学専門委員長(福伊/芦谷/小林/貝嶋/後藤)/大学教学委員(九内/大里/山田耕/谷渕/森川/宮原)/短大教学委員(西村/楠本/宮﨑)/斉藤/学生支援室長(定岡)/学生支援室(広瀬/太田)
LMS運用部会	部会長(鹿江)/副部会長(佐々木淳)/APワーキンググループ(新井)/山田耕/九内/宮原/後藤/難波/学生支援室(猫本)/ALコーディネーター(澤本)/技術スタッフ(酒井)
AP評価指標部会	部会長(谷川)/副部会長(山本敏)/IRオフィサー(松村さ)/学生支援室(中島)
AP広報部会	部会長(寺岡)/副部会長(斉藤)/APワーキンググループ(楠本/山﨑真)
AP最終評価部会	部会長(鹿江)/副部会長(斉藤・山﨑真)
アクティブ・ラーニング推進室	
アクティブ・ラーニング推進室	APワーキンググループ(10名)/学生支援室(野村)/ALコーディネーター(澤本)/技術スタッフ(酒井)
自己点検評価	
自己点検評価	高等教育研究所
外部組織	
AP外部評価委員会	学識経験者(2名)/保護者/経済同友会/教育委員会/キャリアコンサルタント

【平成 31・令和元(2019)年度　各組織等の活動】

各組織名	開催日	開催回数	主な協議内容
質的転換加速化本部	4月17日 8月30日 2月5日	3回	平成31(2019)年度実施体制 平成30(2018)年度実績報告書 平成30(2018)年度実施状況報告書 APセミナー(第1回)の開催 AP事業成果報告書 AP事業成果報告会
APワーキンググループ	毎月2～3回	19回	事業の推進全般 「比治山型ディプロマ・サプリメント」の検証 平成30(2018)年度実施状況報告書 APセミナー(第1回)の開催 AP事業成果報告書の作成 AP事業成果報告会の実施
APアクティブ・ラーニング/可視化部会	毎月1回	9回	FDer養成研修 教育課程改正等に伴うコアAL科目の修正 「比治山型ディプロマ・サプリメント」の検証
LMS運用部会	6月21日 8月30日	2回	iPadの活用 LMSの活用方法 Google Classroom・Google Formsの活用方法 電子書籍・電子教科書配信サービス説明会

AP評価指標部会	7月12日 9月13日 10月31日 1月9日	4回	AP学生モニター 新規採用者のスキルに関する調査 比治山力レポート等の結果 評価指標モデルの構築
AP広報部会	5月24日 9月27日 10月18日 1月9日	4回	HPにおけるAP関連活動報告 AL・可視化等関連セミナーの学内配信 高校教員対象進学説明会でのAP成果報告 中国新聞記事広告原稿 オープンキャンパス・比治山祭等でのAP広報 高校生向けAPチラシ配布 学生便覧AP関連ページの校正
AP最終評価部会	4月25日 10月29日 11月12日 12月17日	4回	補助期間終了後の体制の原案作り AP事業成果報告書作成 AP事業成果報告会の実施

2) 「比治山型アクティブ・ラーニング」の構築と実践（テーマⅠ）

2-1 「比治山型アクティブ・ラーニング」の実践（テーマⅠ）

平成 26(2014)年度は、「比治山型アクティブ・ラーニング」の準備期間とし、 AP アクティブ・ラーニング部会を編成して、アクティブ・ラーニングの技術向上や、教職員による学修支援の充実を図ることとした。特に、本学の建学の精神から導き出された「４つのキーコンピテンシー（自立・想像・共生・創造)」と「１２のスキル（４×３の比治山力)」の編成・具現化を推進することにより、アクティブ・ラーニングが単なるスキル育成にとどまることなく、学生に学びの充実感・成就感を実感させながら地域社会に貢献できる自立性を向上させることを目的として、組織的・効果的な「比治山型アクティブ・ラーニング」の構築を開始した。また、アクティブ・ラーニングに関わるコーディネーターと、授業録画及び授業作成業務にあたる技術助手、各 1 名を配置し、「アクティブ・ラーニング推進室」の開設準備を始めた。

平成 27(2015)年度は、「比治山型アクティブ・ラーニング」の試験的運用段階とし、本学で開講している全授業科目のうち、学科・コースごとに選定した「コア AL 科目」を中心に、「比治山型アクティブ・ラーニング」の実践を開始した。次に、年度当初に学生・教職員に「比治山型アクティブ・ラーニング」に関する実施マニュアルやガイダンス資料を配付し、周知・徹底を図った。特に、「比治山型アクティブ・ラーニング」で育成し可視化していく「４×３の比治山力」については、申請時に策定した「４つのキーコンピテンシー」(建学の精神から導き出された自立・想像・共生・創造)」と、アクティブ・ラーニングにより伸長が期待される汎用的能力として定義した「１２のスキル」(情報収集力、論理的思考力、課題設定力／発想力、企画・計画力、傾聴・受信力／コミュニケーション力、チームワーク力、自己省察力／創造・表現力、プレゼンテーション力、イノベーション力) をもとに、学生の主体的・能動的な学びの実現に向けて取組を開始した。

平成 28(2016)年度からは、「比治山型アクティブ・ラーニング」の本格的運用段階（平成 28(2016)年度)、「比治山型アクティブ・ラーニング」の発展的運用段階（平成 29(2017)年度)、「比治山型アクティブ・ラーニング」の検証・改善段階（平成 30(2018)年度)、「比治山型アクティブ・ラーニング」の完成・発展段階（平成 31・令和元(2019)年度)、とそれぞれ位置づけ、平成 27(2015)年度から全学生に配付している「４×３の比治山力　学修の手引き」や、全教職員に配付している「アクティブ・ラーニング実践事例集」により、「比治山型アクティブ・ラーニング」や建学の精神から導き出された４つのキーコンピテンシー「自立・想像・共生・創造」と「１２のスキル」、および学生の主体的・能動的な学びについて学生・教職員の理解を深め、その実現に向けて取り組んでいる。

平成 29(2017)年度からは、さらに進んだアクティブ・ラーニング技法の実践として、e-learning システム（授業録画配信機能 LMS）を利用した授業や、授業の撮影記録・編集・配信、及びタブレット端末（iPad）を利用した授業方法の実践・検証を開始している。また、各学科・コースに１名ずつ任命する「FDer」を中心に、授業公開・参観やレッスンスタディの推進を図ることで、「比治山型アクティブ・ラーニング」についての全学的な共通理解・共通認識を深める取組を充実させ、日常的な FD・SD 活動を推進している。

【実施状況】

① コア AL 科目の選定（平成 26(2014)年度）

平成 26(2014)年度に、AP アクティブ・ラーニング部会により、大学と短期大学部の全授業科目から、各学科・コースのコアになる科目「コア AL 科目群」(各学科の教育目標から考えて、柱となる科目）を選定し、科目内でのアクティブ・ラーニングの実施に向けて準備を開始した。なお、コア AL 科目については、教育課程の改訂とともに平成 27(2015)年度以降も毎年確認と修正作業を実施している。また、これらの科目は学修成果の可視化にも活用している。

② 比治山型アクティブ・ラーニング実施状況（平成 26(2014)年度～現在）

平成 26(2014)年度は、AP アクティブ・ラーニング部会により、アクティブ・ラーニングの手法の共有化を図るとともに、授業モデルの開発とその評価指標の策定を開始した。また、本学の「４つのキーコンピテンシー（自立・想像・共生・創造)」と「１２のスキル（４×３の比治山力)」の編成・具現化を進めた。次に、本学でいう「アクティブ・ラーニング」について、どのように学生の学ぶ意欲を引き出すかについて議論を重ねた結果、「アクティブ・ラーニング」を PBL やグループディスカッション、フィールドワークや体験学習などの手法を中心に「体験や参加によって主体的に考えるきっかけをつくる授業展開」であると広く捉え、これを 15 回のうち 3 回以上取り入れた授業を「比治山型アクティブ・ラーニング」と規定した。

平成 27(2015)年 4 月より、すべての「コア AL 科目」において、授業担当教員を中心にアクティブ・ラーニングを導入した授業改善を図り、「比治山型アクティブ・ラーニング」を実践している。また、シラバスの表記方法を改善し、各授業が「コア AL 科目」であるか否か、また、「コア AL 科目」である場合には、「４×３の比治山力」のどのスキルの向上を目指すかなど、導入するアクティブ・ラーニングの内容や、その結果として伸長が期待されるスキルを明記し、全学的に実践している。平成 28(2016)年度には、全科目のシラバスにおいて、導入するアクティブ・ラーニングを授業計画欄の直後に配置するなど、様式を修正した。これらの取組の結果、「コア AL 科目」以外の科目へ「比治山型アクティブ・ラーニング」が波及することとなり、平成 30(2018)年度では、アクティブ・ラーニングを導入した授業科目数の割合が、大学：97.7%、短大：99.1%、アクティブ・ラーニングを受講する学生の割合が、大学：98.6%、短大：98.7%となっている。

また、平成 28(2016)年度より「比治山型アクティブ・ラーニング」授業への助成として、本学に従来あった「借り上げバス制度」を拡充し、座学の授業に現地での実体験を加えるような利用促進を図った結果、平成 31・令和元(2019)年までに共通教育 9 件、大学 23 件、短大 24 件、計 56 件の利用がある。

４つのキーコンピテンシー（自立・想像・共生・創造）と１２のスキル（４×３の比治山力）

時間割番号	2H5016	科目名	理科教育法	単位数	2
担当者	[redacted]				
開講学期	2019年度前期	開講年次	3	授業方法	講義
ナンバリング	2H5-4010				

コア・アクティブ・ラーニング科目群	○
コア・アクティブ・ラーニングのキーワード	論理的思考力、企画・計画力、創造・表現力

学生便覧(学科コア科目指定ページ)を参考に、4×3の比布山力の中から、スキル番号に対応するキーワードを入力
スキル番号・キーワードは、サイボウズ → ファイル管理 → 学生支援室 → コアAL科目一覧スキル配当(各学科・コース)

概要	小学校学習指導要領をもとに、小学校における理科教育の目標・内容・指導計画の作成などについて、理論と実践の両面から概説し、小学校理科の授業を計画し実践していくための資質や能力を高める。また、理科授業の構成要素である導入、発問、観察・実験、結果の整理、考察などの場面や、板書、発問、教材の提示、机間指導などの具体的な指導法について、アクティブ・ラーニングを通した考察により、小学校理科の目標に迫る授業設計や具体的方法を身に付ける。 【実務経験】○ 理科教員として公立学校や国立大学附属校に勤務し、社会教育、実習指導などの経験も有する教員が、その経験を活かして学習者のつまずきや実習生の失敗例をふまえ、授業デザインの構築や具体的な指導法を指導する。
関連するディプロマ・ポリシー	子ども発達教育学科のディプロマ・ポリシー 1 子どもの健全な発達を支援するにふさわしい豊かなコミュニケーション力と創造力・表現力を身に付けている。 2 子どもの発達を把握し、学習指導や各種の支援を行うために必要な専門的知識と技術を習得し、子どもの表現力、思考力、判断力を育成できる実践力を身に付けている。 3 学校、幼稚園、保育所をはじめ広く地域社会において子育てや教育など次世代の育成支援に積極的に寄与しようとする態度を身に付けている。
到達目標	小学校の理科授業における目標や各学年の目標及び内容を理解している。また、理科授業における導入や観察・実験を中心とした展開、まとめなどの場面において、そのねらいと指導法を理解するとともに、単元設定の理由や指導計画、学習指導過程、評価計画など学習指導案の作成を通して授業をデザインすることができる。
評価方法	学習指導案提出(6回)・模擬授業(42%)、定期試験(58%)
備考	この科目は、教育実習における指導案作成や教材研究、授業づくりも想定しています。毎回レポートや指導案などの課題も出ますが、後期に履修する「教育実習」のつもりで取り組んでください。 提出された課題に関しては、授業で個別に解説をします。疑問に思うことがあれば、質問してください。
テキスト・経費・教材等	小学校学習指導要領(平成29年3月告示 文部科学省) 小学校学習指導要領解説 理科編(平成29年6月 文部科学省) 参考資料:文部科学省検定済教科書(小学校理科) そのほか、web教材としてgacco「アクティブで深い学びのデザイン」、本学科ホームページで公開している動画など

授業計画	第1回	小学校理科の目標と内容
	第2回	各学年の目標と内容
	第3回	指導計画の作成と内容の取扱い
	第4回	理科の指導計画と学習指導案の作成(1)単元設定と授業デザイン*(教材:gacco「アクティブで深い学びのデザイン」)
	第5回	理科の指導計画と学習指導案の作成(2)評価の観点
	第6回	理科の指導計画と学習指導案の作成(3)本時の指導過程
	第7回	理科授業の実践(1)本時の目標と評価*
	第8回	理科授業の実践(2)児童の実態と教材選択及び教材研究*
	第9回	理科授業の実践(3)導入と発問*
	第10回	理科授業の実践(4)板書とワークシート*
	第11回	理科授業の実践(5)観察・実験と机間指導*
	第12回	理科授業の実践(6)小集団の指導、情報機器の活用* (教材:本学科ホー
	第13回	理科授業の実践(7)薬品の管理と理科室経営*
	第14回	模擬授業と分析
	第15回	省察とまとめ
	定期試験	*のある授業回は、ICTを活用した双方向型授業です。PC(またはタブレット、スマートフォン)を使用しますので、各自用意してください。
アクティブ・ラーニングの授業形態	コメント・ペーパー/ペア・ワーク/グループ学習/課題発見学習/自己省察	
準備学修(予習・復習)	【4回】自分が設定した単元について、学習指導要領解説をよく読み、該当する単元の要点を授業までにまとめてください。 【5~10回】設定した単元について、授業で指示した項目まで作成し、次回の授業開始前までに所定の場所へ提出してください。 【7~13回】授業演習に向けて、模擬指導を行っておきましょう。 授業では、「Hi!way」や「LMS」を用いた課題を出しますので、指示に注意してください。 自学自習総時間60時間	

コメント・ペーパー、ペア・ワーク、グループ学習、調査・実習、課題発見学習、課題解決学習、プレゼンテーション、自己省察、その他(具体的内容)の9項目の中から、授業でアクティブ・ラーニングを3回以上取り入れている場合、すべて記入。空欄にならないよう、授業計画を検討してください。
(例) コメント・ペーパー、グループ学習、プレゼンテーションを1回ずつ

シラバス表記方法の改善
(令和2(2020)年度版)

AL を導入した授業科目数の割合(%)

	H26	H27	H28	H29	H30	H31/R1
短大	未測定	38	90.0	99.6	99.1	
大学	未測定	47	88.0	99.1	97.7	

AL を受講する学生の割合(%)

	H26	H27	H28	H29	H30	H31/R1
短大	未測定	98.6	97.7	97.3	98.7	
大学	未測定	98.2	95.7	97.0	98.6	

③「４×３の比治山力」や「比治山型アクティブ・ラーニング」の学内周知・調査等（平成 27(2015)年度～現在）

○学生への周知

平成 27(2015)年 4 月に、学生向けの「比治山型アクティブ・ラーニング」ガイダンス資料（「４×３の比治山力　学修の手引き 2015」）を作成・配付し、オリエンテーション期間や初年次教育の授業を通して、学生目線に立った、きめ細かいガイダンスを実施した。特に、建学の精神から導き出された「４つのキーコンピテンシー」や「１２のスキル」については、具体的な説明文やイラスト、漫画を用いることにより、学生が授業・正課外活動などの学生生活全般を通して意識し、主体的・能動的な学びとなるよう取組を開始した。また、平成 28(2016)年度には、「４×３の比治山力学修の手引き」を改訂するとともに、別冊子としていた「Hi!way システム　新機能の手引き」を増補し、「４×３の比治山力　学修の手引き 2016」へと合冊にすることにより、学生にとっての利便性の向上を図った。平成 29(2017)年度には、「４×３の比治山力　学修の手引き」にｅポートフォリオ機能（Hi!step、Hi!check）の解説を加えた改訂版を作成・配付し、以降、毎年 4 月のオリエンテーションを中心に、全学生に「４×３の比治山力　学修の手引き」を配付している。それと同時に、平成 29(2017)年度からは、本学の全学生及び教職員に配付している HIJIYAMA 手帳にも「４×３の比治山力」を掲載し、学内での共通理解や普及に努めている。

学修の手引き
（平成 31(2019)年）

HIJIYAMA 手帳
（平成 31(2019)年）

○教職員への周知

平成 27(2015)年度には、教職員を対象に「アクティブ・ラーニングの技法集」を作成・配付し、本学の学生の実態に合わせた「比治山型アクティブ・ラーニング」モデルの構築を目指して検討を開始した。平成 28(2016)年度には、「アクティブ・ラーニングの技法集」を改訂し、「アクティブ・ラーニング実践事例集」と名称を改めるとともに、平成 29(2017)年度には、さらに改訂を加え、「アクティブ・ラーニング実践事例集～ICT、LMS 関係～」を作成した。続いて平成 30(2018)年度には「アクティブ・ラーニング実践事例集～授業改善の現場から～」を、学外の教育機関等とも連携し意見収集を行いながら編集・作成した。これらの教職員用冊子は、平成 27(2015)年度より毎年 3 月の教職員合同研修会で全教職員に説明し配付している。なお、前年度に実施されたアクティブ・ラーニング授業のうち、顕著な事例をこの実践事例集に掲載し、学内における先進的な取組として公開・顕彰している。

実践事例集（平成 28 年度）

実践事例集（平成 30 年度）

○調査等

平成 27(2015)年度より、担当授業におけるアクティブ・ラーニングの実施状況を把握すべく、毎年、「コア AL 科目」を担当した全教員を対象として各学期末（7 月、1 月）に「４×３の比治山力リフレクションシート」による調査を実施し、本学のアクティブ・ラーニングの特徴や実施状況を整理している。この調査結果より、本学のアクティブ・ラーニングの特徴として「プレゼンテーション」や「グループ学習」などの形態が多く、例年、半数以上の科目で導入がみられる。また、学生の「４×３の比治山力」を測定するため、学生の自己評価による「比治山力レポート」を毎年各学期末に実施している。その調査結果からは、本学の学生が「傾聴・受信力」において、他の項目と比べて比較的高い傾向がみられる。

問1「4×3の比治山力」について

この科目で、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業を行うことによって、以下に示した12の能力（4×3の比治山力）について、学生はどの程度できるようになったと思いますか。
各能力について、最もよく当てはまると思う選択肢をひとつお選び下さい。

（選択肢）
0.変化なし
1.わずかにできるようになった
2.ややできるようになった
3.わりとできるようになった
4.非常にできるようになった

科目: 初年次セミナーⅡ
教員名:

		選択肢
1	他者との意見交換から、自分の意見の正しいところと間違っているところを振り返って把握することができる	2.ややできるようになった
2	チームに貢献できるような行動をとることができる	0.変化なし
3	自分で気づいて発見した社会や地域の課題について、解決に向けて取り組むことができる	2.ややできるようになった
4	自分とは異なる意見にも、耳を傾けることができる	2.ややできるようになった
5	課題解決に向けて、見通しを持った企画・計画を立てることができる	2.ややできるようになった
6	課題に取り組む際に、いろいろなアイディアを考え出すことができる	0.変化なし
7	課題に取り組むために、必要な情報を自分で集めることができる	3.わりとできるようになった
8	自分の興味関心に基づいて、課題やテーマを設定することができる	2.ややできるようになった
9	自分やチームのアイディアを、レポートや作品などの形として表現することができる	2.ややできるようになった
10	課題解決に向けて、まわりの人と意見をやりとりすることができる	2.ややできるようになった
11	集めた情報に基づいて、論理的に考えることができる	2.ややできるようになった

リフレクションシート（一部を抜粋）

問2　実施したアクティブ・ラーニングの形態について

(1)実施について
この科目で、以下に示した8つのアクティブ・ラーニングの形態を実施しましたか。
それぞれのアクティブ・ラーニングの形態について、「はい」か「いいえ」でお答えください。

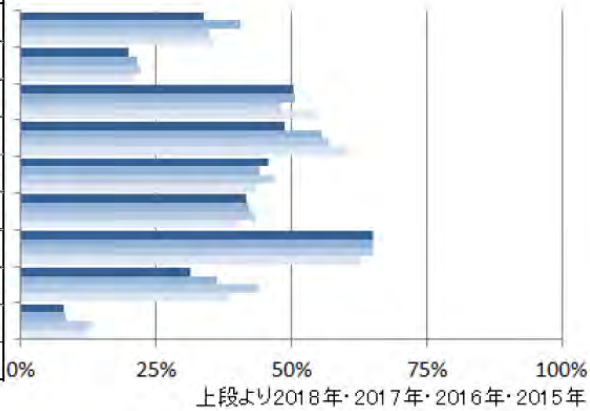
(2)内容などについて
「はい」と回答した項目については、①その具体的な内容、②そのアクティブ・ラーニングの形態を用いて良かった点、③そのアクティブ・ラーニングの形態を用いたことによる問題点について自由にお書き下さい。

(3)その他のアクティブ・ラーニングの形態について
以下8つのアクティブ・ラーニングの形態以外で実施したものがある場合は、最後にある「その他」の欄にお書き下さい。

科目: 初年次セミナーⅡ
教員名: [redacted]

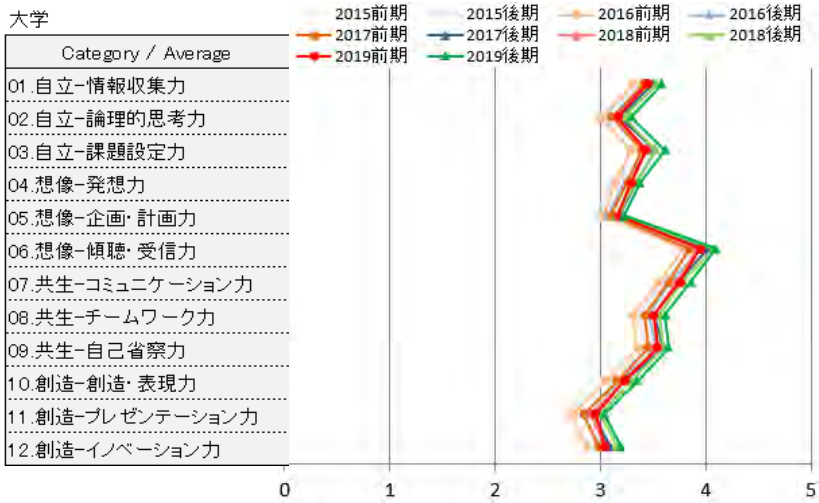
1	コメントペーパー	いいえ	
	具体的な内容	[redacted]	
	良かった点	[redacted]	
	問題点	[redacted]	
2	ペア・ワーク	いいえ	
	具体的な内容	[redacted]	
	良かった点	[redacted]	
	問題点	[redacted]	
3	グループ学習	はい	
	具体的な内容	課題図書についてディスカッション	←入力してください
	良かった点	本の内容を深めることができた	←入力してください
	問題点	ファシリテーターが必要	←入力してください
4	調査、実習	いいえ	
	具体的な内容	[redacted]	
	良かった点	[redacted]	
	問題点	[redacted]	
5	課題発見学習	はい	
	具体的な内容	課題図書の中から自分の課題を発見する	←入力してください

Category / Rate	2018	2017	2016	2015
01.コメントペーパー	33.8%	40.7%	34.9%	35.9%
02.ペア・ワーク	20.1%	21.5%	22.1%	20.9%
03.グループ学習	50.4%	50.8%	48.3%	54.7%
04.調査，実習	48.7%	55.6%	57.0%	60.6%
05.課題発見学習	45.9%	44.1%	47.0%	43.6%
06.課題解決学習	41.7%	42.2%	43.3%	40.1%
07.プレゼンテーション	65.1%	65.2%	65.1%	63.1%
08.自己省察	31.4%	36.2%	44.0%	39.0%
09.その他	7.9%	8.3%	12.8%	12.2%
Total	38.3%	40.5%	41.6%	41.1%



実施したアクティブ・ラーニングの形態（大学の場合）

比治山力レポートによる「４×３の比治山力」の経年変化（大学の場合）



④ アクティブ・ラーニング推進室、アクティブ・ラーニング用具等（平成 27(2015)年度～現在）

平成 27(2015)年 4 月より、本学のアクティブ・ラーニングの推進拠点として、「アクティブ・ラーニング推進室」を設置し運用を開始した。この推進室は、アクティブ・ラーニング授業実践を推進するための教職員プラットフォーム機能を有し、アクティブ・ラーニングコーディネーターと技術助手の専従スタッフ 2 名が常駐して、教職員がアクティブ・ラーニングを実践しやすい環境を維持するとともに、アクティブ・ラーニング用具・タブレット端末（iPad）等「比治山型アクティブ・ラーニング」授業に必要な道具類の保管・管理・貸し出しを行っている（平成 30(2018)年からは、9 号館に小道具分室を設置し、学内全域での利便性の向上を図っている）。また、アクティブ・ラーニング推進室を、授業に関するミーティングや少人数の研修に活用するとともに、アクティブ・ラーニングや学修成果の可視化に関する情報の蓄積・整理、メール等による学内配信を行っている。なお、「アクティブ・ラーニング推進室」内の貸し出し用具利用状況の点検と整備充実も行っており、平成 31・令和元(2019)年度の調査では、アクティブ・ラーニング推進室での用具利用者は年間延べ 360 名（教員）である。

アクティブ・ラーニング推進室の他には、可動式の机・椅子・ホワイトボード・電子黒板等の機器・備品を整備したアクティブ・ラーニング活用型教室や、図書館ラーニング・コモンズ「Me+Library（みらいぶらりぃ）」を設置しており、これらの活用を通じて、アクティブ・ラーニング授業実践の推進や学生の授業外学修時間の拡充を促進している。

アクティブ・ラーニング推進室と
貸出物品（文具）

Me+Library（みらいぶらりぃ）

2-2　e-learning システムによる授業方法の実践・検証（テーマⅠ）

「比治山型アクティブ・ラーニング」について、平成 27(2015)年度よりデジタル端末、及び「Hi！space」を中心とした LMS による e-learning システムについて検討を開始するとともに、平成 28(2016)年度からは環境整備や試験的な運用を開始した。また、本学の授業にとって、より効果的な活用方法を研究すべく、試行的な取組や研究的な実践も推進している。

平成 27(2015)年度では、学内で学生が情報端末を活用できる環境を整えるため、無線 LAN のアクセスポイントを増設するとともに、e-learning システムを導入し、年度末に iPad を 50 台購入した。

平成 28(2016)・29(2017)年度では、デジタル端末を用いた「比治山型アクティブ・ラーニング」にふさわしいアプリケーションや機能の調査と試用・実践を行ってきた。特に、導入した e-learning システムのうち、授業録画配信機能を中心とした LMS の試験的運用を開始するとともに、授業録画機器の整備や、授業録画・授業コンテンツの制作・録画を行い、本格的な運用に向けて機能や効果を検証してきた。

平成 30(2018)年度からは、より進んだアクティブ・ラーニング手法の実践として、e-learning システムを利用した授業や、授業コンテンツ編集要員による授業の撮影記録・編集・配信、および 130 台のタブレット端末（iPad）を利用した授業方法の実践・検証を毎年進めている。

【実施状況】

① タブレット端末（iPad）の活用、LMS の運用　（平成 27(2015)年度～現在）

平成 27(2015)年 6 月に、「LMS ワーキンググループ」を編成し、平成 28(2016)年度より e-learning システムを全学で試行開始することを目標に活動を開始した。具体的には、このグループを中心として AP ワーキンググループ内で研修会を開催し、環境設定と構築を推進すべく開発業者等と意見交換を実施した。また、学内で学生が情報端末を活用できるよう、無線 LAN のアクセスポイントを増設するとともに、情報端末を用いた双方向授業を導入すべく、クリッカー等双方向コミュニケーション機能を備えたアプリの試用とその調査・検討を開始した。さらに、後期授業ではタブレットを用いた導入試験授業の実施や、授業録画コンテンツの試作などを通して、活用方法や課題の検討を開始するとともに、年度末には iPad を 50 台購入した。

平成 28(2016)年度には、iPad を 50 台追加購入し計 100 台を活用可能な状態にするとともに、4 月には「LMS 運用準備部会」を編成し、iPad の活用に関するミニ・ワークショップを計 6 回開催した。また、そのワークショップにおいて、導入するアプリケーションについて教員の希望を収集するとともに、準備部会で検討した「ロイロノート」などのアプリをインストールし、授業での活用を開始した。加えて、クリッカー機能を備えているアプリ「PingPong」を iPad に導入し、ミニ・ワークショップで特徴や使い方を参加教員に案内するとともに、8 月の FDer 養成研修会や 9 月の教職員合同研修会でマニュアルを配付し説明するなど、広く本学の教職員に周知を図った。なお、構築した本学の LMS について教職員・学生への周知と活用を図るため、これまでポータルとして定着している「Hi!way」の名称に合わせて、「Hi!space」と命名した。

LMS「Hi!space」のポータル画面

平成 29(2017)年度では、「LMS 運用準備部会」を「LMS 運用部会」に再編成し、「比治山型アクティブ・ラーニング」の授業実践におけるタブレット端末（iPad）活用型授業の手法等について調査・実践を進めた。具体的には、部会を計 12 回実施し、その間でいくつかの授業モデルを検討するとともに、汎用的な授業モデルについては、学内でミニ・ワークショップを 5 月から 1 月にかけて計 7 回開催した。その内容としては、8 月に本学に導入された G Suite の機能について、「Google Forms」や「Google Classroom」の授業への導入方法を検討し試験的に授業に活用するとともに、検証された授業モデルについては、ミニ・ワークショップで教員に紹介した。また、3 月の教職員合同研修会では、e-learning システムの操作マニュアルを含んだ「アクティブ・ラーニング実践事例集～ICT、LMS 関係～」を配付し説明するなど、広く本学の教職員に周知を図った。

平成 30(2018)年度では、平成 27(2015)年度より整備を進めている 100 台のタブレット端末(iPad)に加え、さらに 30 台のタブレット端末（iPad）を購入し、計 130 台を常時活用可能な状態にするとともに、無線 LAN 環境のさらなる改善を図る取組（学内予算）を実施した。まず、LMS 運用部会を中心に、「比治山型アクティブ・ラーニング」にふさわしいアプリケーションや、双方向授業が展開できるクリッカー機能の調査・実践など、タブレット端末（iPad）活用型授業の手法等について調査・研究をさらに進めた。具体的には、部会を計 6 回実施し、その間でいくつかの授業モデルを検討するとともに、研究結果より汎用的な授業モデルについては、学内でミニ・ワークショップを 12 月から 2 月にかけて計 3 回開催した。特に、平成 29(2017)年 8 月に本学に導入された G Suite の機能をもとに、1)「Google Forms」や 2)「Google Classroom」の授業への導入方法を検討した。1）については、いくつかの授業で複数の教員が導入を開始し、実践を積み重ねている。2）については、試験的に授業に導入し、ネットワークにおける課題や、学生が使用する上で操作手続きが難しい点などを検証した。これらの研究から得られた知見は、ミニ・ワークショップの内容に反映し、回を重ねるごとに内容の改訂を進めている。また、3 月の教職員合同研修会では、「アクティブ・ラーニング実践事例集～授業改善の現場から～」を配付し説明するなど、広く本学の教職員に周知を図った。

学内で実施しているミニ・ワークショップの様子

平成 31・令和元(2019)年度からは、これまでに得られた知見をもとに、デジタル端末を用いた「比治山型アクティブ・ラーニング」の授業モデルとして、1)「Google Classroom」を活用した学生・教員の双方向による授業実践モデルの構築、2)「Google Forms」によるアンケート集計・クリッカー機能を用いた授業活用、3)LMS による授業録画配信機能を活用した授業モデルの構築(実習系科目を中心に)、4)LMS による授業録画配信機能を活用した公開講座や教員研修講座の視聴、などの整理を進めている。

なお、平成 31・令和元(2019)年度の調査では、授業でのタブレット端末（iPad）利用台数が年間 1439 台となり、学内でのタブレットの利活用が着実に定着しつつある。

② LMS 機能の効果検証（平成 28(2016)年度～現在）

平成 28(2016)年度では、4 月に「LMS 運用準備部会」を編成し、導入した e-learning システムのうち、授業録画配信機能を中心とした LMS の試験的運用を開始するとともに、授業録画機器の整備や、授業録画・授業コンテンツの制作・録画を行い、本格的な運用に向けて機能や効果を検証した。具体的には、LMS 運用準備部会において、授業録画・授業コンテンツの制作・録画の活用についての検証や意見交換を計 5 回実施した。次に、これらの活動を通して授業録画・授業コンテンツの製作に必要な機器を選定し、購入するとともに、その使用方法の検討を実施した。機器の選定については、年度当初に授業録画装置として「GETRecorder」の購入を予定していたが、試用期間中に検討した結果、操作手順の複雑さ、設置の困難さ、価格等を考慮し、より安価で機動力があり、操作が易しい「PowerRecSS」、「Cbox」を複数台購入することで、授業者が授業中に単独で授業収録できる環境を整備することとした。

授業録画システム　「PowerRecSS」（左）と「Cbox」（右）

また、計 100 台の iPad を用いて容易に双方向授業が可能となるような MDM（Mobile Device Management）として、既に小・中・高等学校、大学などの教育現場で活用実績がある「みらいスクール　クラスパック」を導入することにより、ネットワーク環境に依存しない授業支援 ICT 環境を整備した。これらの結果については、9 月と 3 月の FDer 養成研修会や教職員合同研修会で LMS 活用の実践例を配付するとともに、LMS 機能の「試験問題データベース」などを含めた本格的な運用に向けた機能紹介マニュアルを作成し、3 月の FDer 養成研修会や教職員合同研修会で実践事例の研修を行った。年度末には、LMS を活用する授業において、教員が学生にガイダンスができるよう簡易版活用マニュアルを作成した。

平成 29(2017)・30(2018)年度では、「Hi!space」を中心とした LMS の運用、及び授業コンテンツを制作・編集し、その機能や効果を検証した。具体的には、模擬授業など学生による実習型の授業を録画し学生に視聴させる授業モデルや、「Hi!space」の「プロジェクト管理」機能を用いたサービス・ラーニングの授業モデルを「アクティブ・ラーニング実践事例集」に記載し、教職員合同研修会で配付・説明することにより、LMS を活用した授業を教員がデザインできるようにした。また、実践事例の効果についても、学生からフィードバックを得ながら検証を進めた。さらに、教職員合同研修会で外部講師を招聘し開催した公開講座については、整備を進めてきた授業録画機器を用いて撮影し、その動画を「Hi!space」内の「公開講座」にアップロードし、いつでも視聴可能にするなど、学内の動画コンテンツの集約と整備を進めた。

平成 31・令和元(2019)年度では、これまでの調査や検討、授業での試行などをもとに、本学の状況（授業クラスの規模、通信環境、デバイス保有・利用率、教員のニーズ）を考慮しながら、得られた知見をもとに授業モデルを整理し共有化することを進めている。また、LMS 機能の効果検証の方法の一つとして、平成 29(2017)年度より独自指標「学生一人あたりの授業録画、コンテンツのアーカイブ利用時間数」の測定を開始している。その結果、平成 29(2017)年度では一週間あたり 1.4 時間（目標値 3 時間）、平成 31・令和元(2019)年度では 1.4 時間（目標値 5 時間）の結果が得られている。また、学生の自由記述からも、おおむね授業者の意図をとらえた肯定的な回答が得られていることから、今後も授業録画やコンテンツのアーカイブ利用による学修効果が期待できると考えている。

3）評価指標モデルの構築と学修成果の可視化の実施（テーマⅡ）

3-1　各種指標による学修成果の可視化（テーマⅡ）

【平成 26(2014)年度】

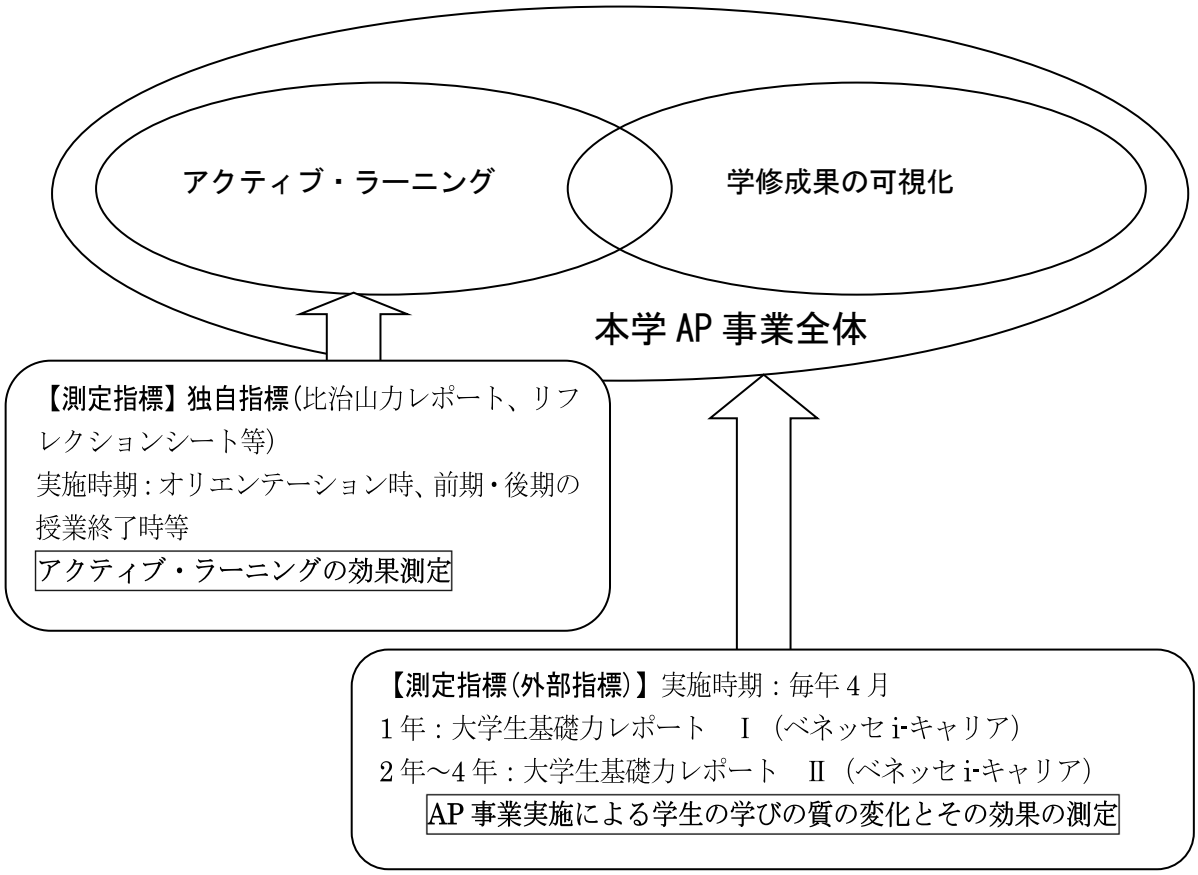
「本学 AP 事業全体」の観点から評価する指標と、「アクティブ・ラーニング」の成果に関する指標の開発及び「学修成果の可視化」を、下図のような概要に基づいて検討した。

○ AP 事業全体の指標

アクティブ・ラーニングと学修成果の可視化の複合型の実施による学生の学びの質の保証を図るとともに、アウトカムとして AP 事業の実施期間である 5 年間（実際は 1 年延長され 6 年間）の学生の学びの質の変化を正確に捉えることが重要であり、そのための外部指標として、毎年 4 月にベネッセ i-キャリア（当時は「ベネッセコーポレーション」）の「大学生基礎力レポートⅠ（1 年生)」と「大学生基礎力レポートⅡ（2 年生以上)」(当時はいずれも「レポート」ではなく「調査」）を実施し、大学・短期大学部、学科ごとと個々の学生の「学びの質」の量的測定を行う。

「大学生基礎力レポート」を利用する理由は次のようなメリットがある。

- 大学で力を入れたこと、社会的強み、成長感、授業の役立ち感が、AP 事業の効果測定に使用できる。
- AP 事業全体の評価だけでなく、大学教育の全体の効果測定も可能であり、この結果を用いて PDCA サイクルとして、本学の課題を抽出し、改善につなげることができる。
- 個人のデータを経年変化で捉えることができる。



○ アクティブ・ラーニングの指標

平成 27(2015)年度から実施するコア AL 科目の効果測定の指標として、独自指標（学生向けの「比治山力レポート」、教員向けの「４×３の比治山力　リフレクションシート」等）を開発し検証することとした。当該学期の終わりまたは次学期の初めに実施し、アクティブ・ラーニング科目によって学生に身に付けさせたい「４×３の比治山力」の１２のスキルの測定を行うことにした。

・調査時期：原則として、当該学期の終わりまたは次学期の初めに実施
・調査対象：コア AL 科目
・調査内容：「４×３の比治山力」の４つのキーコンピテンシーからなる１２のスキルについて授業を振り返って、そのスキルがどの程度身に付いたかを自身で確認する質問項目を設定する。
・調査方法：スキルがどの程度身に付いたかについて、5 件法による回答を分析する。

○ 学修評価指標の分析・検証

IR 委員会及び IR オフィサーによって、本事業に関わる学修評価指標のデータ分析・検証を行う。IR 委員会と連携することにより、本学の教学上の様々なデータが一元的に管理・分析でき、授業改善・可視化や FD・SD などで効果的に説明できるようにする。

《AP 事業全期間での調査等について》

平成 27(2015)年度以降、AP 事業の効果測定の基礎資料とするため、「大学生基礎力レポート」（ベネッセ i-キャリア）や本学独自開発指標「比治山力レポート」等、様々な評価指標を作成または導入して実施し、学生の基礎的な学修スキルや「４×３の比治山力」がどの程度身に付いているかを多面的に検証した。

また、GPA を用いた様々な指標の精度を確保するためにも、すべての授業について成績評価の厳格化・平準化を引き続き行っている。

下の表はこれらを検証・評価するために、平成 31・令和元(2019)年度(実施時期によっては平成 30(2018)年度)までに行った調査の概要であり、これらはすべて開始年度から継続して実施している。

これら以外にも、「４×３の比治山力」（汎用的能力）の１２のスキルのそれぞれについて、授業ごとの効果を検証するために、ルーブリックの構築・活用も進めている。

《本事業の効果を測定するための調査》（※ AL = 比治山型アクティブ・ラーニング）

調査名称	開始年度	調査時期	調査対象	調査内容	分析方法
大学生基礎力レポート（ベネッセi-キャリア）	平成27(2015)年度	4月	全学年の学生	1年次は基礎学力、2年次以上は批判的思考力に関連する質問	学生・教職員向けにフォローアップ
比治山力レポート	平成27(2015)年度	4月、9月	全学生(卒業年次生のみ翌年1月も調査)	アンケート方式による１２のスキルの自己評価	１２のスキルの修得について、学科・コースごとの平均を表示
4×3の比治山力リフレクションシート	平成27(2015)年度	7月、1月	ALコア科目を担当する教員	アンケート方式による１２のスキルについて授業の寄与とAL技法の採用状況調査	得点平均(全体、大学、短大、共通教育)と経年変化の表示
授業に関するアンケート調査	平成28(2016)年度(AP関連部分)	各学期末	すべての授業科目の受講者	「学修意欲」「授業外学修時間」「全体的満足度」について質問	ALと学生の学びに対する態度やスキルについての検証

AP学生モニターに対する聞き取り調査	平成28(2016)年度	9～10月	学科ごと・学年ごとに学生を1名選出	AL、Hi!check、Hi!step等の活用について懇談会方式で意見聴取	発言を匿名化した後に集約
新規採用者のスキルに関する調査	平成27(2015)年度	12～1月	今年度に本学卒業生を採用した企業等(大学：100社、短大：100社 教育機関も含む)	１２のスキルについて、企業が求めるもの、企業から見た卒業生の評価	スキルごとに平均と標準偏差のグラフ化と経年変化の表示
成績評価の厳格化・平準化に関する調査	平成28(2016)年度	3月	年度のすべての授業科目	IR委員会と連携してすべての授業科目の成績を集約	学科・コースごとに成績評価分布を表示
Hi!check・Hi!step に関するアンケート	平成27(2015)年度	10月	全学年の学生	Hi!check、Hi!stepの利用についてHi!wayによるアンケート調査	集計・グラフ化と自由記述のまとめ
その他、「授業改善学生モニター意見交換会」(7月・1月)等で得られたデータも参考にしている。					

以下、各評価指標について年度ごとに説明する。

① 本学学生の特徴を表す外部指標の活用

・大学生基礎力レポートⅠ・Ⅱ

【平成 27(2015)年度以降毎年度】

本事業を推進するにあたり、本学学生の特徴をできるだけ客観的に把握する必要があるため、外部指標と位置付けて、株式会社ベネッセ i-キャリアが提供した「大学生基礎力レポートⅠ（1 年生)」、「大学生基礎力レポートⅡ（2 年生以上)」を 4 月に実施し、学生の基礎学力、批判的思考力、勉学や将来の進路に対する意識などの測定をするとともに、他大学との比較検証や本事業の効果測定における基礎資料とした。また、その結果に基づいたベネッセ i-キャリアによる学生向け及び教職員向けフォローアップを、5 月下旬以降に学科単位で実施した。

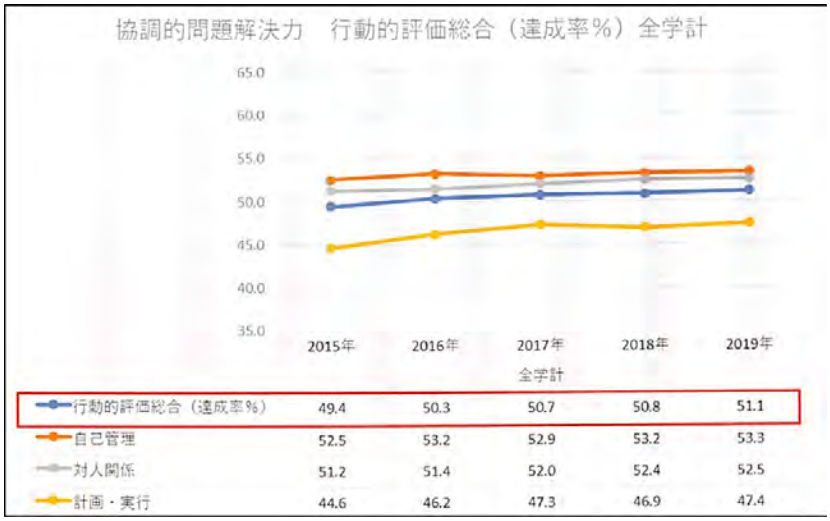
【平成 29(2017)年度以降毎年度】

「大学生基礎力レポート」の学生個人の結果を「Hi!way」の「Hi!step」「マイレポート」に載せて、各自が本学での学修活動や次の進路のために役立てるようにした。

【平成 30(2018)年度】

「大学生基礎力レポートⅡ（2 年生以上)」の結果と「４×３の比治山力」の関連性についての分析も進めた。

「大学生基礎力レポート」の分析結果の例（協調的問題解決力の推移分析（全学計))は下図のとおりである。



「大学生基礎力レポート」の分析結果の例

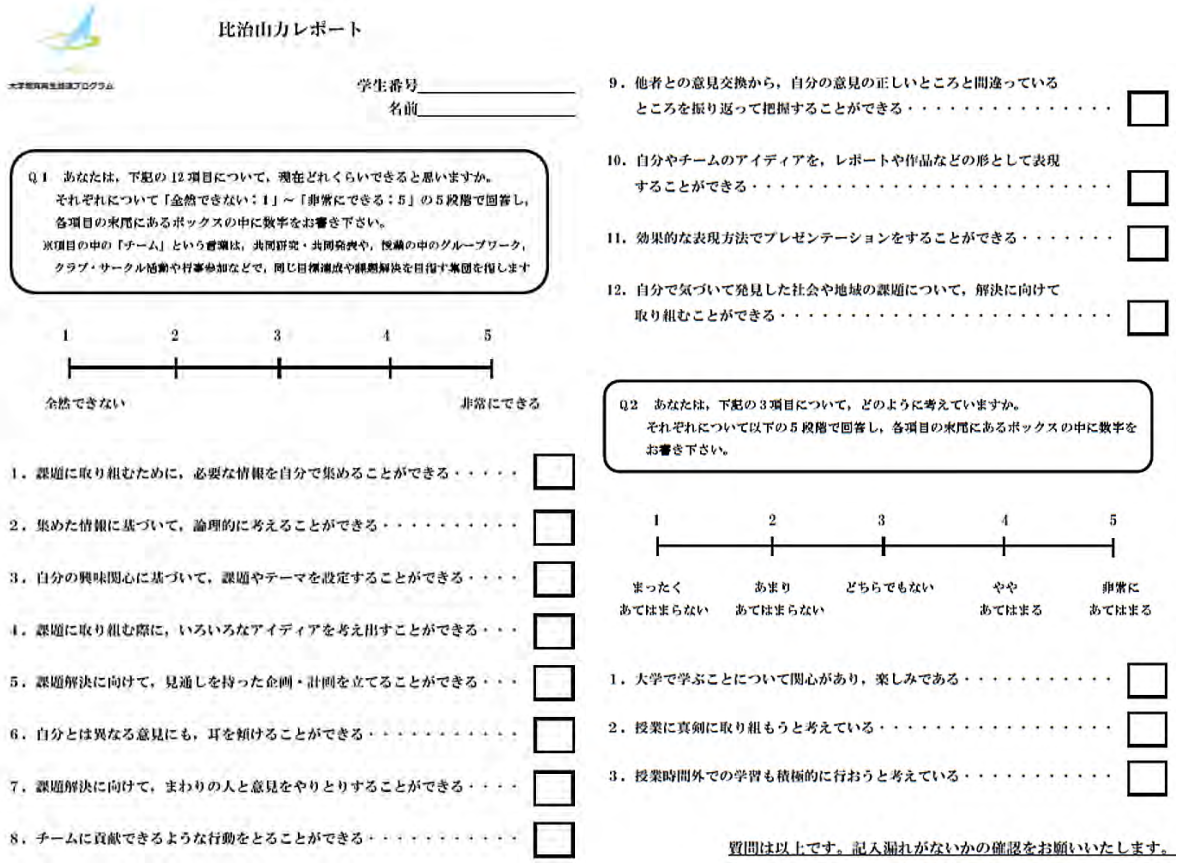
② 「比治山型アクティブ・ラーニング」の効果検証

・比治山力レポート

【平成 27(2015)年度以降毎年度】

「比治山型アクティブ・ラーニング」の効果測定を目的に、学生の自己評価に基づいて「４×３の比治山力」を測定するための「比治山力レポート」を、学生対象アンケートとして次学期開始時である４月・９月及び卒業時に実施している。

１２のスキルの得点が、年度または学期ごとにどのような推移を示しているのかを分析することで、「比治山型アクティブ・ラーニング」の効果検証の一つとした。平成 27(2015)年度から平成 31・令和元(2019)年度までの推移をみると、大学、短期大学部ともに徐々に「４×３の比治山力」が浸透していることが確認された。特に、「傾聴・受信力」は大学・短大において常に４ポイント程度「ややあてはまる」を維持している。



比治山力レポート

学生番号＿＿＿＿＿＿＿＿
名前＿＿＿＿＿＿＿＿

Q１　あなたは，下記の 12 項目について，現在どれくらいできると思いますか。
それぞれについて「全然できない：1」～「非常にできる：5」の５段階で回答し，各項目の末尾にあるボックスの中に数字をお書き下さい。
※項目の中の「チーム」という言葉は，共同研究・共同発表や，授業の中のグループワーク，クラブ・サークル活動や行事参加などで，同じ目標達成や課題解決を目指す集団を指します

1　2　3　4　5
全然できない　非常にできる

1．課題に取り組むために，必要な情報を自分で集めることができる・・・・・ □
2．集めた情報に基づいて，論理的に考えることができる・・・・・・・・・・ □
3．自分の興味関心に基づいて，課題やテーマを設定することができる・・・・ □
4．課題に取り組む際に，いろいろなアイディアを考え出すことができる・・・ □
5．課題解決に向けて，見通しを持った企画・計画を立てることができる・・・ □
6．自分とは異なる意見にも，耳を傾けることができる・・・・・・・・・・・ □
7．課題解決に向けて，まわりの人と意見をやりとりすることができる・・・・ □
8．チームに貢献できるような行動をとることができる・・・・・・・・・・・ □
9．他者との意見交換から，自分の意見の正しいところと間違っているところを振り返って把握することができる・・・・・・・・・・・・・・・ □
10．自分やチームのアイディアを，レポートや作品などの形として表現することができる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ □
11．効果的な表現方法でプレゼンテーションをすることができる・・・・・・・ □
12．自分で気づいて発見した社会や地域の課題について，解決に向けて取り組むことができる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ □

Q２　あなたは，下記の３項目について，どのように考えていますか。
それぞれについて以下の５段階で回答し，各項目の末尾にあるボックスの中に数字をお書き下さい。

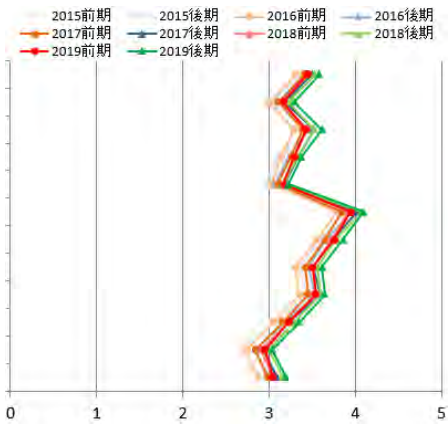
1　2　3　4　5
まったくあてはまらない　あまりあてはまらない　どちらでもない　ややあてはまる　非常にあてはまる

1．大学で学ぶことについて関心があり，楽しみである・・・・・・・・・・・ □
2．授業に真剣に取り組もうと考えている・・・・・・・・・・・・・・・・・ □
3．授業時間外での学習も積極的に行おうと考えている・・・・・・・・・・・ □

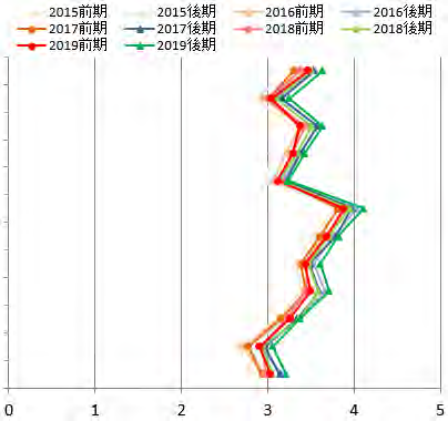
質問は以上です。記入漏れがないかの確認をお願いいたします。

比治山力レポート　質問用紙

大学 Category / Average	2019 後期	2019 前期	2018 後期	2018 前期	2017 後期	2017 前期	2016 後期	2016 前期	2015 後期	2015 前期
01.自立-情報収集力	3.58	3.44	3.53	3.44	3.50	3.41	3.43	3.31	3.36	3.31
02.自立-論理的思考力	3.29	3.17	3.23	3.15	3.19	3.11	3.12	3.00	3.02	2.97
03.自立-課題設定力	3.61	3.43	3.53	3.43	3.52	3.39	3.45	3.29	3.44	3.30
04.想像-発想力	3.38	3.29	3.34	3.30	3.34	3.25	3.23	3.14	3.10	3.11
05.想像-企画・計画力	3.22	3.17	3.15	3.17	3.17	3.10	3.07	3.03	2.96	3.02
06.想像-傾聴・受信力	4.10	3.95	4.07	3.92	4.02	3.85	3.96	3.79	3.89	3.89
07.共生-コミュニケーション力	3.86	3.76	3.78	3.72	3.74	3.65	3.66	3.55	3.60	3.57
08.共生-チームワーク力	3.61	3.51	3.56	3.51	3.51	3.42	3.45	3.30	3.35	3.31
09.共生-自己省察力	3.65	3.54	3.60	3.53	3.60	3.45	3.53	3.36	3.50	3.44
10.創造-創造・表現力	3.35	3.23	3.29	3.22	3.23	3.16	3.18	3.05	3.06	3.02
11.創造-プレゼンテーション力	3.04	2.95	2.99	2.90	2.93	2.84	2.83	2.74	2.70	2.64
12.創造-イノベーション力	3.19	3.04	3.16	3.04	3.09	2.98	3.00	2.87	2.89	2.86
Total	3.49	3.37	3.43	3.36	3.40	3.29	3.33	3.20	3.24	3.20



短大 Category / Average	2019 後期	2019 前期	2018 後期	2018 前期	2017 後期	2017 前期	2016 後期	2016 前期	2015 後期	2015 前期
01.自立-情報収集力	3.63	3.47	3.50	3.37	3.53	3.31	3.56	3.46	3.44	3.27
02.自立-論理的思考力	3.24	3.04	3.10	3.02	3.16	3.01	3.15	2.95	3.02	2.85
03.自立-課題設定力	3.63	3.37	3.50	3.43	3.57	3.38	3.58	3.37	3.41	3.29
04.想像-発想力	3.42	3.29	3.34	3.29	3.38	3.28	3.38	3.22	3.21	3.05
05.想像-企画・計画力	3.23	3.11	3.14	3.17	3.21	3.14	3.18	3.08	3.04	2.99
06.想像-傾聴・受信力	4.11	3.87	3.94	3.91	3.97	3.81	4.03	3.95	3.83	3.78
07.共生-コミュニケーション力	3.82	3.69	3.71	3.67	3.79	3.61	3.76	3.65	3.58	3.52
08.共生-チームワーク力	3.61	3.43	3.46	3.46	3.48	3.38	3.53	3.42	3.40	3.32
09.共生-自己省察力	3.71	3.49	3.58	3.44	3.59	3.44	3.67	3.50	3.53	3.39
10.創造-創造・表現力	3.37	3.25	3.37	3.21	3.33	3.15	3.35	3.14	3.20	3.11
11.創造-プレゼンテーション力	3.05	2.90	2.93	2.93	2.96	2.77	2.91	2.72	2.79	2.65
12.創造-イノベーション力	3.21	3.03	3.06	2.98	3.14	2.93	3.15	2.95	2.97	2.81
Total	3.50	3.33	3.39	3.32	3.43	3.27	3.44	3.28	3.29	3.17



比治山力レポートによる「４×３の比治山力」の経年変化

・４×３の比治山力 リフレクションシート

【平成 27(2015)年度以降毎年度】

「比治山型アクティブ・ラーニング」の実施状況を把握すべく「コア AL 科目」担当教員に対して、各学期の授業終了後、「４×３の比治山力」への授業の寄与、 １２のスキルについて授業後の学生への効果、実施したアクティブ・ラーニング形態等を問うリフレクションシートによる調査を実施した。この分析によって本事業推進にあたっての課題を発見し、改善につなげている。

全体的に１２のスキルの寄与にさほど偏りはなく「ややできるようになった」のレベルが多い。ただし、「自立・課題設定力」はそれ以外と比較して少ない。形態については、大学で「プレゼンテーション」が多く、半数以上で使われている。続いて、「グループ学習」「調査・実習」が多い。短大では、「調査・実習」と「プレゼンテーション」が多く、半数以上で使われている。続いて、「グループ学習」「課題発見学習」が半数程度となっている。

問1「4×3の比治山力」について

この科目で、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業を行うことによって、以下に示した12の能力(4×3の比治山力)について、学生はどの程度できるようになったと思いますか。
各能力について、最もよく当てはまると思う選択肢をひとつお選び下さい。

(選択肢)
0.変化なし
1.わずかにできるようになった
2.ややできるようになった
3.わりとできるようになった
4.非常にできるようになった

科目:
教員名

		選択肢
1	他者との意見交換から、自分の意見の正しいところと間違っているところを振り返って把握することができる	クリックして選択してください
2	チームに貢献できるような行動をとることができる	クリックして選択してください
3	自分で気づいて発見した社会や地域の課題について、解決に向けて取り組むことができる	クリックして選択してください
4	自分とは異なる意見にも、耳を傾けることができる	クリックして選択してください
5	課題解決に向けて、見通しを持った企画・計画を立てることができる	クリックして選択してください
6	課題に取り組む際に、いろいろなアイディアを考え出すことができる	クリックして選択してください
7	課題に取り組むために、必要な情報を自分で集めることができる	クリックして選択してください
8	自分の興味関心に基づいて、課題やテーマを設定することができる	クリックして選択してください
9	自分やチームのアイディアを、レポートや作品などの形として表現することができる	クリックして選択してください
10	課題解決に向けて、まわりの人と意見をやりとりすることができる	クリックして選択してください
11	集めた情報に基づいて、論理的に考えることができる	クリックして選択してください
12	効果的な表現方法でプレゼンテーションをすることができる	クリックして選択してください

問2 実施したアクティブ・ラーニングの形態について

(1)実施について
この科目で、以下に示した8つのアクティブ・ラーニングの形態を実施しましたか。
それぞれのアクティブ・ラーニングの形態について、「はい」か「いいえ」でお答えください。

(2)内容などについて
「はい」と回答した項目については、①その具体的な内容、②そのアクティブ・ラーニングの形態を用いて良かった点、③そのアクティブ・ラーニングの形態を用いたことによる問題点について自由にお書き下さい。

(3)その他のアクティブ・ラーニングの形態について
以下8つのアクティブ・ラーニングの形態以外で実施したものがある場合は、最後にある「その他」の欄にお書き下さい。

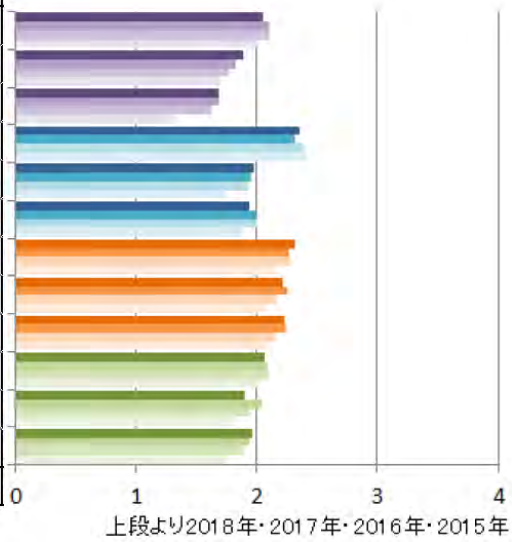
科目:
教員名:

1	コメントペーパー	クリックして選択してください
	具体的な内容	
	良かった点	
	問題点	
2	ペア・ワーク	クリックして選択してください
	具体的な内容	
	良かった点	
	問題点	
3	グループ学習	クリックして選択してください
	具体的な内容	
	良かった点	
	問題点	
4	調査，実習	クリックして選択してください
	具体的な内容	
	良かった点	
	問題点	
5	課題発見学習	クリックして選択してください
	具体的な内容	
	良かった点	
	問題点	
6	課題解決学習	クリックして選択してください
	具体的な内容	
	良かった点	
	問題点	
7	プレゼンテーション	クリックして選択してください
	具体的な内容	
	良かった点	
	問題点	
8	自己省察	クリックして選択してください
	具体的な内容	
	良かった点	
	問題点	
9	その他	クリックして選択してください
	具体的な内容	
	良かった点	
	問題点	

リフレクションシート（一部を抜粋）

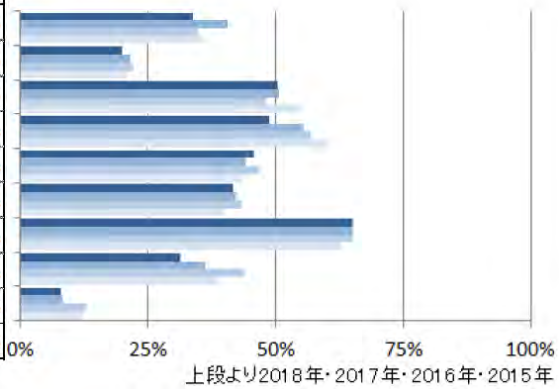
【4×3 の比治山力への授業の寄与】 **大学**

Category / Average	2018	2017	2016	2015
01.自立・情報収集力	2.05	2.11	2.11	2.02
02.自立・論理的思考力	1.88	1.83	1.77	1.70
03.自立・課題設定力	1.69	1.69	1.62	1.31
04.想像・発想力	2.35	2.31	2.39	2.42
05.想像-企画・計画力	1.97	1.96	1.93	1.75
06.想像-傾聴・受信力	1.94	1.98	2.01	1.89
07.共生-コミュニケーション力	2.32	2.27	2.28	2.18
08.共生-チームワーク力	2.21	2.26	2.16	2.07
09.共生-自己省察力	2.23	2.24	2.15	2.11
10.創造-創造・表現力	2.06	2.10	2.10	2.01
11.創造-プレゼンテーション力	1.90	2.04	1.94	1.82
12.創造-イノベーション力	1.96	1.94	1.88	1.74
Total	2.05	2.06	2.03	1.92



【実施したアクティブ・ラーニングの形態】 **大学**

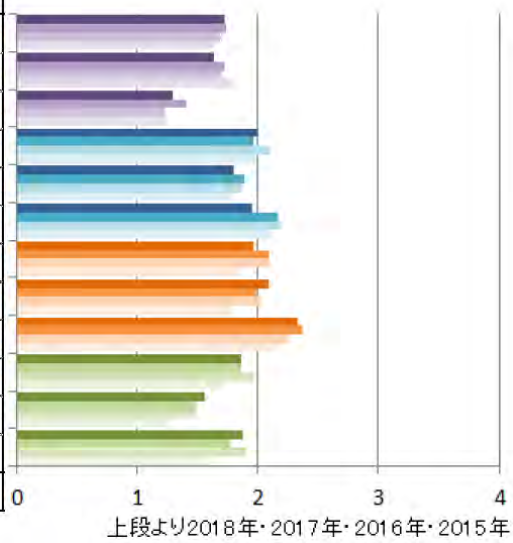
Category / Rate	2018	2017	2016	2015
01.コメントペーパー	33.8%	40.7%	34.9%	35.9%
02.ペア・ワーク	20.1%	21.5%	22.1%	20.9%
03.グループ学習	50.4%	50.8%	48.3%	54.7%
04.調査, 実習	48.7%	55.6%	57.0%	60.6%
05.課題発見学習	45.9%	44.1%	47.0%	43.6%
06.課題解決学習	41.7%	42.2%	43.3%	40.1%
07.プレゼンテーション	65.1%	65.2%	65.1%	63.1%
08.自己省察	31.4%	36.2%	44.0%	39.0%
09.その他	7.9%	8.3%	12.8%	12.2%
Total	38.3%	40.5%	41.6%	41.1%



リフレクションシートによる４×３の比治山力への寄与度と実施したアクティブ・ラーニングの形態（大学）

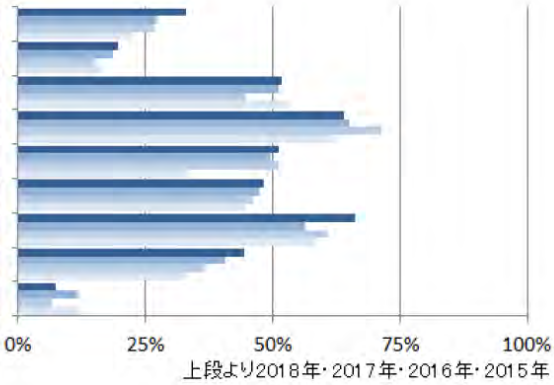
【4×3 の比治山力への授業の寄与】 **短大**

Category / Average	2018	2017	2016	2015
01.自立・情報収集力	1.73	1.74	1.68	1.63
02.自立・論理的思考力	1.64	1.73	1.69	1.80
03.自立・課題設定力	1.30	1.41	1.23	1.24
04.想像・発想力	2.01	1.97	2.10	1.97
05.想像-企画・計画力	1.80	1.89	1.87	1.78
06.想像-傾聴・受信力	1.95	2.16	2.19	2.12
07.共生-コミュニケーション力	1.97	2.10	2.10	1.87
08.共生-チームワーク力	2.09	1.99	2.03	1.78
09.共生-自己省察力	2.33	2.36	2.26	2.15
10.創造-創造・表現力	1.86	1.87	1.97	1.73
11.創造-プレゼンテーション力	1.56	1.49	1.48	1.24
12.創造-イノベーション力	1.88	1.77	1.91	1.61
Total	1.84	1.87	1.88	1.74



【実施したアクティブ・ラーニングの形態】 **短大**

Category / Rate	2018	2017	2016	2015
01.コメントペーパー	33.1%	27.4%	26.7%	22.1%
02.ペア・ワーク	19.5%	18.5%	15.3%	16.6%
03.グループ学習	51.9%	51.1%	44.7%	53.1%
04.調査，実習	63.9%	65.2%	71.3%	62.1%
05.課題発見学習	51.1%	49.6%	51.3%	33.8%
06.課題解決学習	48.1%	47.4%	46.0%	44.8%
07.プレゼンテーション	66.2%	56.3%	60.7%	58.6%
08.自己省察	44.4%	40.7%	36.7%	33.1%
09.その他	7.5%	11.9%	6.7%	12.4%
Total	42.9%	40.9%	39.9%	37.4%



リフレクションシートによる４×３の比治山力への寄与度と実施したアクティブ・ラーニングの形態（短大）

・授業に関するアンケート調査（AP 事業関連部分）

【平成 27(2015)年度】

アクティブ・ラーニングの学修成果の研究及び授業評価の検証を推進するために、これまで「授業に関するアンケート調査」の対象としていなかった履修者 10 名以下の授業についても平成 28(2016)年度より調査対象にするために、本学の全授業担当者に調査を依頼することについて、評価委員会で承諾を得た。

【平成 28(2016)年度以降毎年度】

IR 委員会と連携して、学期末に授業ごとに実施している「授業に関するアンケート調査」の質問項目に含めて効果の検証を行っている。具体的には、平成 28(2016)年度より全授業科目に対象を広げて実施した「授業に関するアンケート調査」から、「比治山型アクティブ・ラーニング」を含めた AP 事業の効果を検証し得る 3 項目「授業に対する積極性に関する項目」（質問 a)、「授業外学修時間に関する項目」（質問 b)、「授業に対する満足度に関する項目」（質問 c)を抽出し、前期については、本事業が本格実施される前段階である平成 26(2014)年度前期と本事業開始後の前期(平成 28(2016)～平成 31・令和元(2019)年度)の得点を、後期については、平成 25(2013)年度後期と本事業開始後の後期(平成 27(2015)～30(2018)年度)の得点を比較している。

その結果を全体的に見れば、「受講態度の積極性」（質問 a）と「全体的に満足度」（質問 c）はやや増加傾向にあることがわかるが、「授業外学修時間」（質問 b）は平均的に「1 時間未満」であり、なお低迷状態にある。ただし、平成 31・令和元（2019）年度前期と平成 30（2018）年度後期の平均では、1 時間を超えているように見える。

AP事業開始前後における授業アンケートの回答結果（抜粋）の比較調査

（IR委員会）
2020.1

授業アンケート項目のうち，以下の3つの質問について，前期科目は平成26年度，28～令和元年度，後期科目は平成25年度，27～31年度について平均値と標準偏差を算出した。

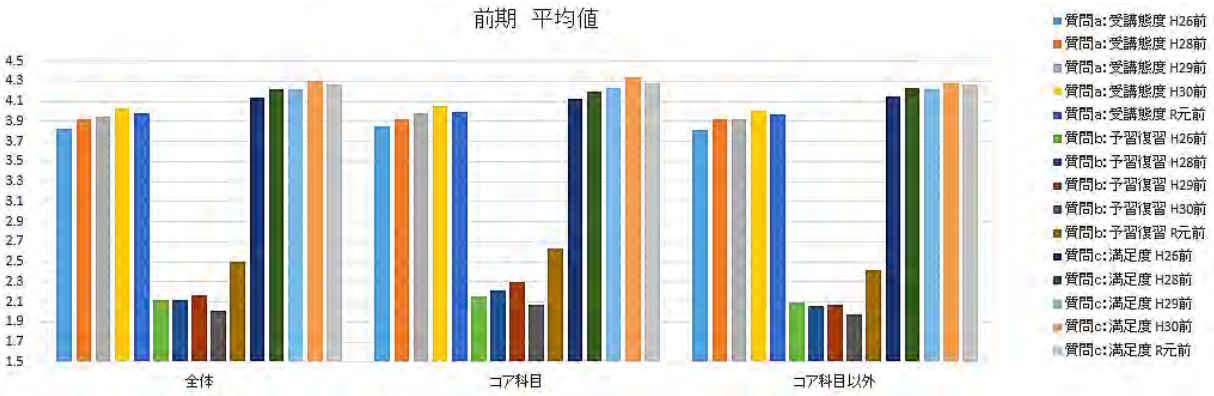
数値の算出区分は，全体,コア科目,コア科目以外としている。対象は大学・短大の共通教育科目，専門科目。

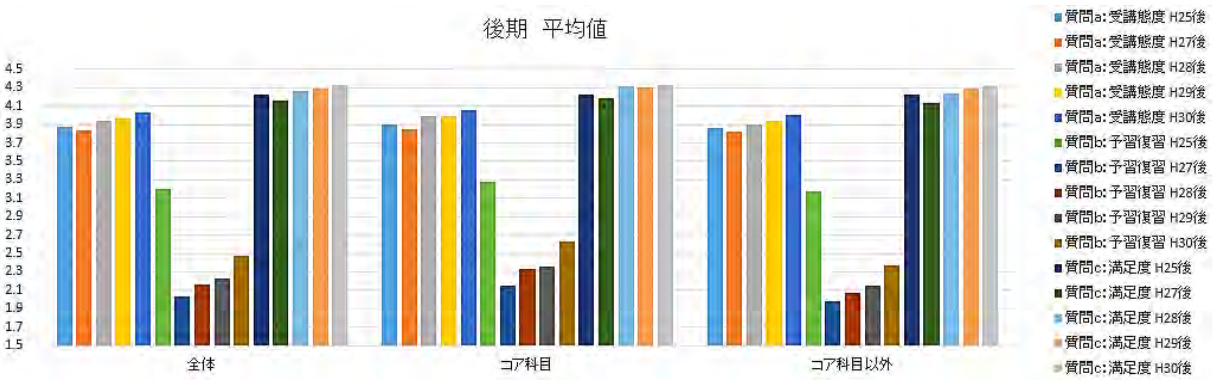
【授業アンケート項目】

質問a
受講態度：この授業に対するあなたの受講態度は積極的でしたか。
5：積極的だった，4：やや積極的，3：どちらとも言えない，2：やや消極的，1：消極的だった

質問b
予習復習：この授業1回につき，予習・復習など時間外の学習をどのくらいしましたか。
（平成25年度）5：たくさんした，4：ある程度はした，3：少しだけした，2：ほとんどしなかった，1：まったくしなかった
（平成26年度以降）5：3時間以上，4：2－3時間，3：1－2時間，2：1時間未満，1：全くしていない

質問c
満足度：全体的に満足している。
5：強くそう思う，4：そう思う，3：どちらとも言えない，2：あまりそう思わない，1：全くそう思わない





AP 事業開始前後における授業アンケートの回答結果（抜粋）の比較調査

・AP 学生モニターに対する聞き取り調査(座談会方式)

【平成 28(2016)年度以降毎年度】

質問用紙を用いて学生が自己評定を行う「比治山力レポート」は、一度に多量のデータを収集することで、全体的な効果検証が可能となる反面、学生がどのような学びの実感を得ているのか、また、どのような改善を求めているのかといった深い情報を得ることができない。AP 外部評価委員会(平成 28(2016)年 3 月)からこのような指摘を受けて、各学科・コースの各学年からそれぞれ 1 名ずつの学生を AP 学生モニターとして選出し、毎年 10 月の 4 日間にわたり、座談会方式で聞き取り調査を行い、「比治山型アクティブ・ラーニング」「４×３の比治山力」を含めた AP 事業全体の効果検証及び改善点について意見聴取を行った。

基本的な質問への回答によると、平成 28(2016)年度では、「アクティブ・ラーニング」については浸透しつつあるが、「４×３の比治山力」についての理解は、その「４×３の比治山力　学修の手引き」があまり見られていないということもあり、熟知というところまでには至っていないようである。

しかし、平成 31・令和元(2019)年度では、「周りの学生もアクティブ・ラーニング型授業は主体的で対話的だったので、深い学びができた点がよかったと思っている」のように積極性が現れるようになった。また、「４×３の比治山力　学修の手引き」も見ている人が多くなる。

【平成 29(2017)年度以降毎年度】

この聞き取り調査での意見をテキスト・マイニングで分析すると、「４×３の比治山力」には、「授業」「プレゼンテーション」「意見」「力(チカラ)」「チームワーク」「コミュニケーション」という言葉が比較的関連付けられていた。

平成 30(2018)年度についてテキスト・マイニングで分析すると、グループワーク等の成果を発表することをアクティブ・ラーニングとみなしており、「４×３の比治山力」についてはコミュニケーション力やチームワーク力が強く意識され、「汎用的能力」との結びつきがやや弱い。

しかし、「まだ現地調査しか行ったことがないが、自分たちの足で行き見聞することで、新しい発見が得られる。大学の中で教員から話を聞くだけではなく、自分で『そこに行く』というのが生のものが見えるしすごく役に立った」という意見のように、社会との接続を期待する意見も少なからずあった。平成 31・令和元(2019)年度の分析結果を以下に示す。

AP 学生モニターに対する聞き取り調査の様子

「ＡＰ学生モニター座談会」質問事項

Ⅰ．アクティブ・ラーニング科目について

アクティブ・ラーニングを知っていますか？　Yes ・ No

①あなたにとってためになったアクティブ・ラーニング科目はどのような科目ですか。

②どんなところが役に立ったと思いますか。

③周りの学生はどのように思っていますか。

Ⅱ．「４×３の比治山力」等について

①「４×３の比治山力」は自立、想像、共生、創造の4つのキーコンピテンシーのもと、12のスキルを伸ばし汎用的能力を育成することを目的にしていますが、それは知っていますか？　Yes ・ No

②12のスキルについて、どれが役に立つと思いますか。

③「４×３の比治山力 学修の手引き」は分かりやすかったですか？　Yes ・ No

Ⅲ．Hi!check, Hi!stepについて

①Hi!checkには（「４×３の比治山力（自分の成長）」「成績の推移」「免許・資格」）がありますが、使っていますか？　Yes ・ No

特に使っているもの、役に立っているものは何ですか。

②Hi!stepには（マイストーリー、マイチャレンジ、マイアプローチ、マイアルバム、マイレポート）がありますが、使っていますか？　Yes ・ No

特に使っているもの、役に立っているものは何ですか。

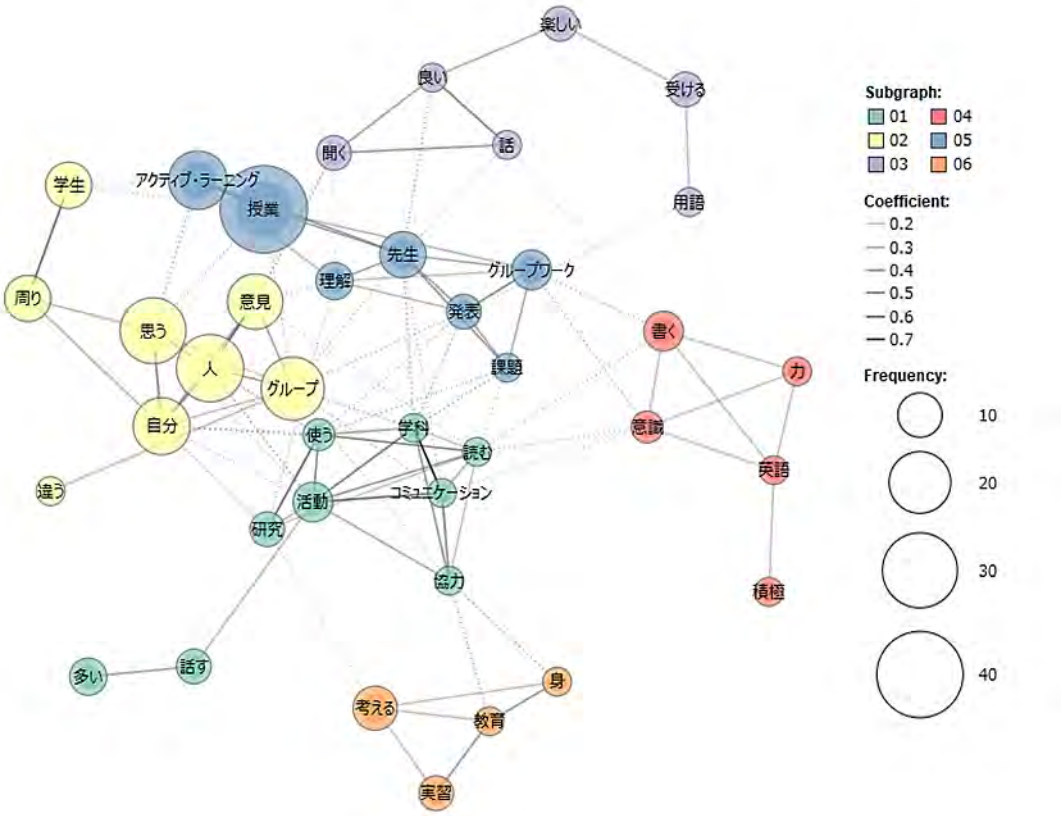
③教員はコメント入力してくれますか、どのように思いますか。

④利用するにあたってもっとこうしたらいいのにと思うところはありますか。

※時間があればHi!space等についても尋ねてください。

Ⅳ．全体的な感想を聞かせてください。

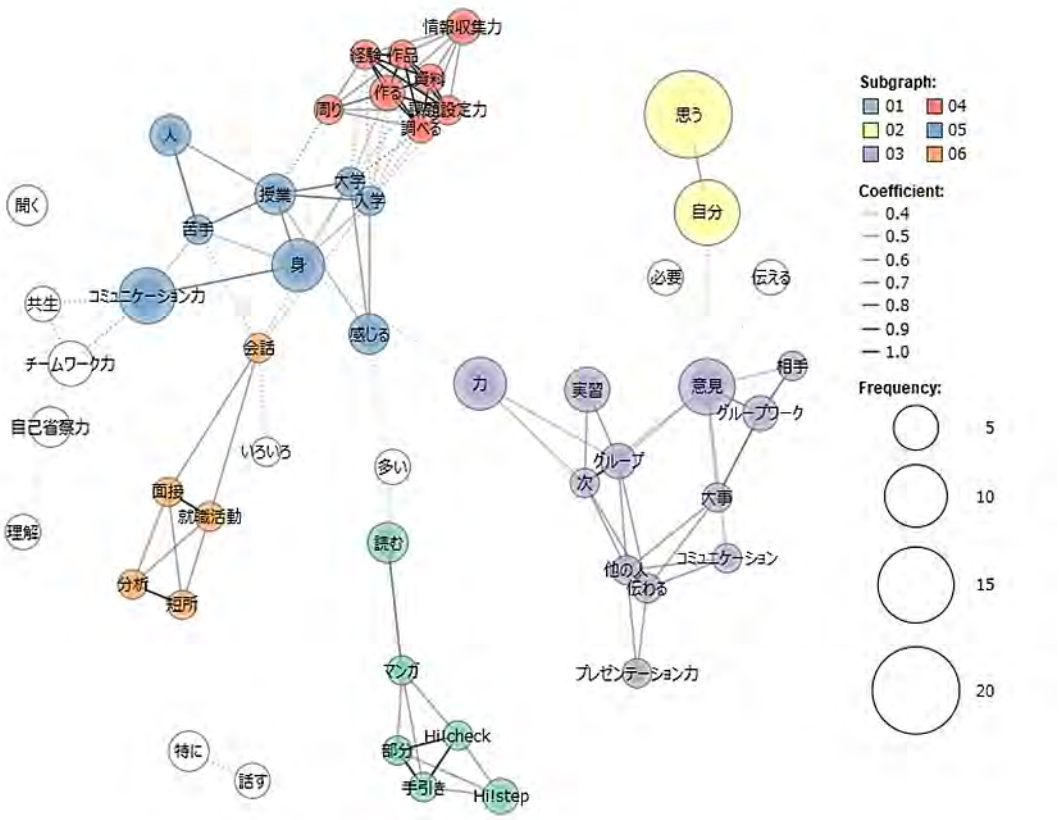
I. アクティブ・ラーニング科目について



アクティブ・ラーニング科目についての共起ネットワーク

- グループワークや実習のなかで他者の意見を聞いたり、自ら発言したりすることをアクティブ・ラーニングとして認識している。
- グループワーク中の他者の発言や共同作業から新しい発見をしたり、学習したりしている。
- 積極的な姿勢が取材や語学の学修成果につながっていると感じている。
- 英語学習では文法を意識するよりも、実際に話す訓練を取りいれてほしい。
- 周りの学生が自分の意見を理解してくれているか気になる。また理解してもらうことを意識して表現するようになった。

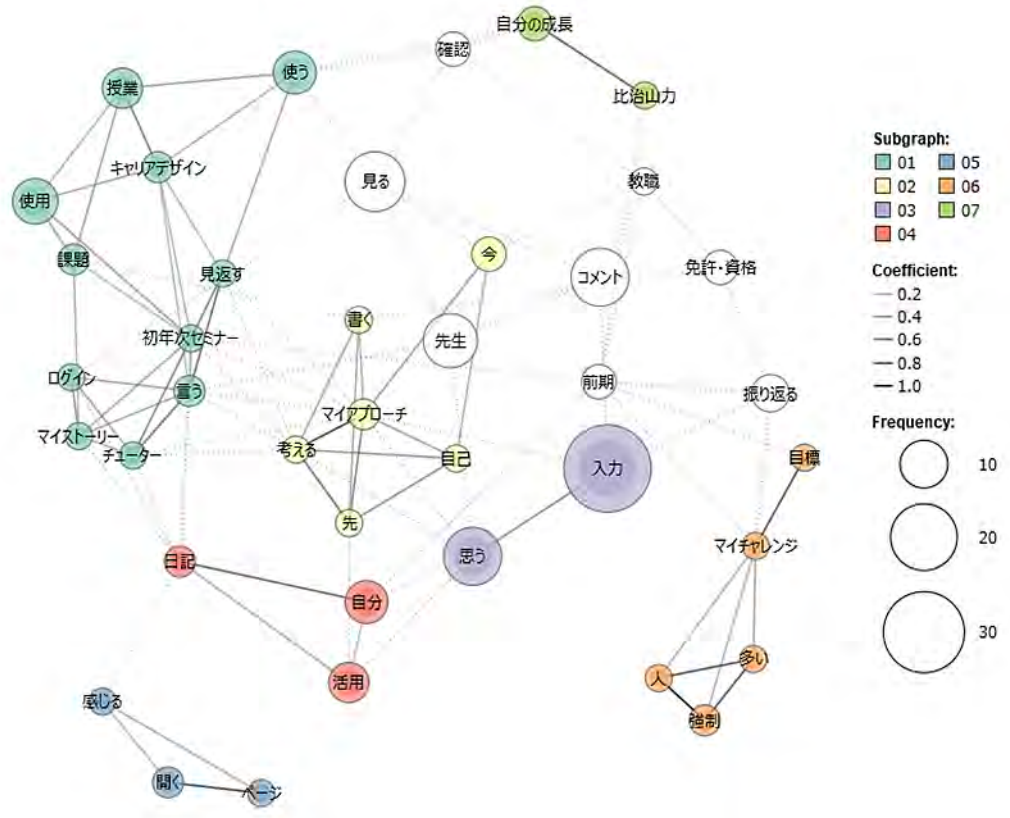
Ⅱ.「４×３の比治山力」等について



「４×３の比治山力」等についての共起ネットワーク

- コミュニケーション力についての話題が多く、苦手意識を持つ学生もいる反面、身に付いたと感じている学生も多い。
- コミュニケーションや自分の意見をいうこと、他人の意見を聞くこと、プレゼンテーションすることがグループワークをする上で重要だと感じている。
- 就職活動やアルバイトの面接のためにも自己省察力が必要だと感じている。
- 学修の手引きの漫画はわかりやすいが、それ以外の文字情報は多くて見る気がしない。
- 作品を作る上で課題設定力や情報収集力が必要と感じている。見本や資料を調べる経験が、作品作りに役立っている。

Ⅲ. Hi!check・Hi!step について



Hi!check・Hi!step についての共起ネットワーク

- ログインが面倒、やり方が難しい。自動ログイン機能がほしい。
- 以前のセメスター分の振り返りを入力できない。
- 免許・資格やマイアルバム、成績の推移がよく活用されている。
- 入力は教員の指示によって授業内（初年次セミナーやキャリアデザイン）で行われていることが多い。
- 授業以外では入力していない、見返していないという意見が大半だが、一部しておけばよかったという意見も見られる。
- 教員からのコメントはおおむね返っているようで、コメントが返ってくると学生はしっかり見てもらっているという実感を得ている。一方で、先生に直接聞けばいいことをなぜ入力するのかという意見もあった。

・「新規採用者のスキルに関する調査」の実施

【平成 27(2015)年度】

平成 27(2015)年 11 月に、過去 5 年間の内定者数の多い就職先企業等(教育機関も含む。以下同じ)を対象として、本学卒業生のスキルや就業状況に関する調査を実施し、本事業開始後の本学卒業生のスキルや就業状況との比較を可能とするための基礎資料を作成した。あわせて、就職先企業が新規採用者に求めるスキルを把握し、今後の取組の改善を図る基礎資料とした。

【平成 28(2016)年度】

平成 29(2017)年 1 月に、本学キャリアセンターと連携して、平成 27(2015)年度に卒業した学生の就職者数が多い企業を選出し、その企業の人事担当者に、平成 28(2016)年度から働いている本学卒業生が「４×３の比治山力」をどの程度身につけていたのかを評価してもらう「新規採用者のスキルに関する調査―2016 年度―」を実施した。このデータと本事業開始前の卒業生について同様の方法で評価を求めた「新規採用者のスキルに関する調査―2015 年度―」との比較をすることで、「比治山型アクティブ・ラーニング」の効果検証を行った。

【平成 29(2017)年度】

平成 30(2018)年 1 月に、本学キャリアセンターと連携して、過去 5 年以内に本学卒業生を採用した企業等（大学：100 社、短大：100 社　教育機関も含む）の人事担当者に、平成 29(2017)年度から働いている本学卒業生が「４×３の比治山力」をどの程度身につけていたのかを評価してもらう「新規採用者のスキルに関する調査―2017 年度―」を実施した。このデータと本事業開始前の卒業生について同様の方法で評価を求めた「新規採用者のスキルに関する調査―2015 年度―」との比較や 2016 年度の調査も含めた比較を行うことで、「比治山型アクティブ・ラーニング」の効果検証を行った。

その結果、企業等は「傾聴・受信力」「コミュニケーション力」「チームワーク力」「自己省察力」を強く求めており、本学卒業生にもいっそう期待されている。

【平成 30(2018)年度以降】

平成 30(2018)年 12 月に、本学キャリアセンターと連携して、前年度に本学卒業生を採用した企業等（大学：100 社、短大：100 社　教育機関も含む）の人事担当者に、本学卒業生が「４×３の比治山力」をどの程度身につけていたのかを評価してもらう「新規採用者のスキルに関する調査」を実施した。このデータと本事業開始前の卒業生について同様の方法で評価を求めた「新規採用者のスキルに関する調査―2015 年度―」との比較や平成 28(2016)年度以降の調査も含めた比較を行うことで、「比治山型アクティブ・ラーニング」の効果検証を行った。

その結果、企業等が求める力については、１２のスキルに強弱があるが、この 4 年間ほぼ一定しており、「傾聴・受信力」「コミュニケーション力」「チームワーク力」「自己省察力」を強く求めている。本学卒業生については特に「傾聴・受信力」が評価されているようである。

46 ページのグラフから明らかなように、本学卒業生の特徴は、「傾聴・受信力」「コミュニケーション力」「チームワーク力」が比較的高く評価されていることである。平成 31・令和元(2019)年度の調査においても同様である。この年度の調査結果の特徴は、大学において、「プレゼンテーション力」が他の年度に比べて顕著に評価されていることである。

問 1-1

貴社・貴機関の求める人材についてお聞きします。
貴社・貴機関では、新規採用者に対して、以下に示した 12 項目のスキルをどの程度求めていますか？それぞれの項目について、最も当てはまると思う数字に○を付けてください。

		非常に求めている	やや求めている	どちらでもない	あまり求めていない	全く求めていない
例.	上手にハサミを使うことができる	1	(2)	3	4	5
1.	課題に取り組むために、必要な情報を自分で集めることができる	1	2	3	4	5
2.	集めた情報に基づいて、論理的に考えることができる	1	2	3	4	5
3.	自分の興味関心に基づいて、課題やテーマを設定することができる	1	2	3	4	5
4.	課題に取り組む際に、いろいろなアイディアを考え出すことができる	1	2	3	4	5
5.	課題解決に向けて、見通しを持った企画・計画を立てることができる	1	2	3	4	5
6.	自分とは異なる意見にも、耳を傾けることができる	1	2	3	4	5
7.	課題解決に向けて、まわりの人と意見をやりとりすることができる	1	2	3	4	5
8.	チームに貢献できるような行動をとることができる	1	2	3	4	5
9.	他者との意見交換から、自分の意見の正しいところと間違っているところを振り返って把握することができる	1	2	3	4	5
10.	自分やチームのアイディアを、レポートや作品などの形として表現することができる	1	2	3	4	5
11.	効果的な表現方法でプレゼンテーションをすることができる	1	2	3	4	5
12.	自分で気づいて発見した社会や地域の課題について、解決に向けて取り組むことができる	1	2	3	4	5

問 1－2

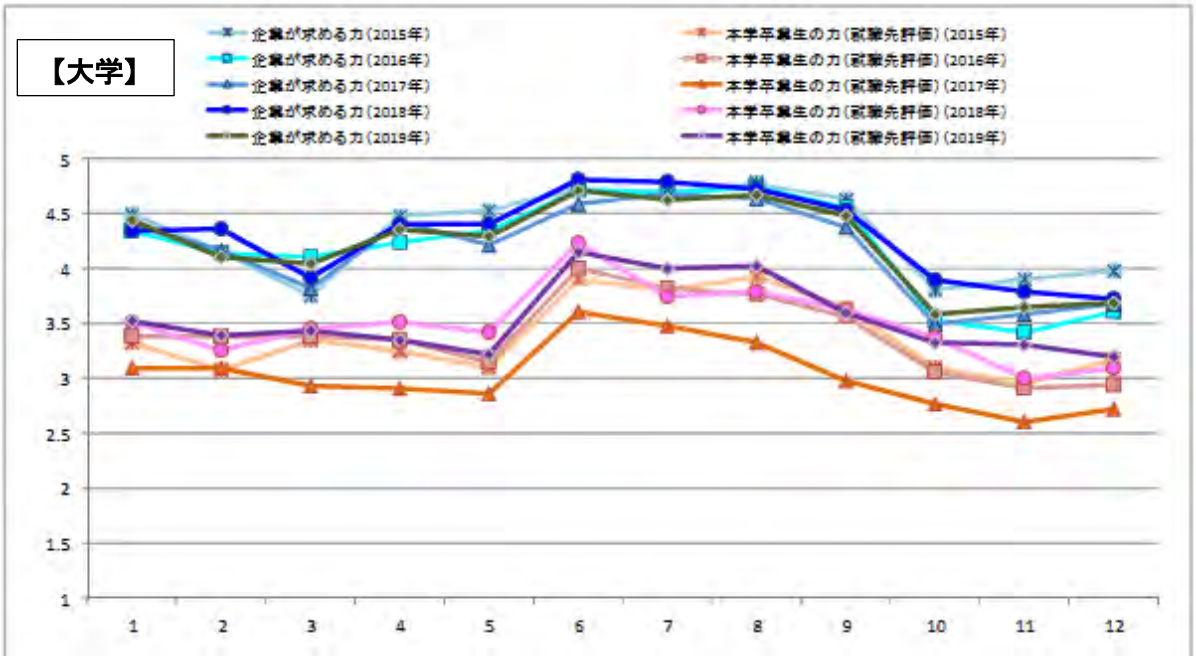
問 1-1 でご回答いただいた 12 のスキル以外で、貴社・貴機関が新規採用者に求めるスキルがあれば、下欄にご自由にお書きください。

問 2

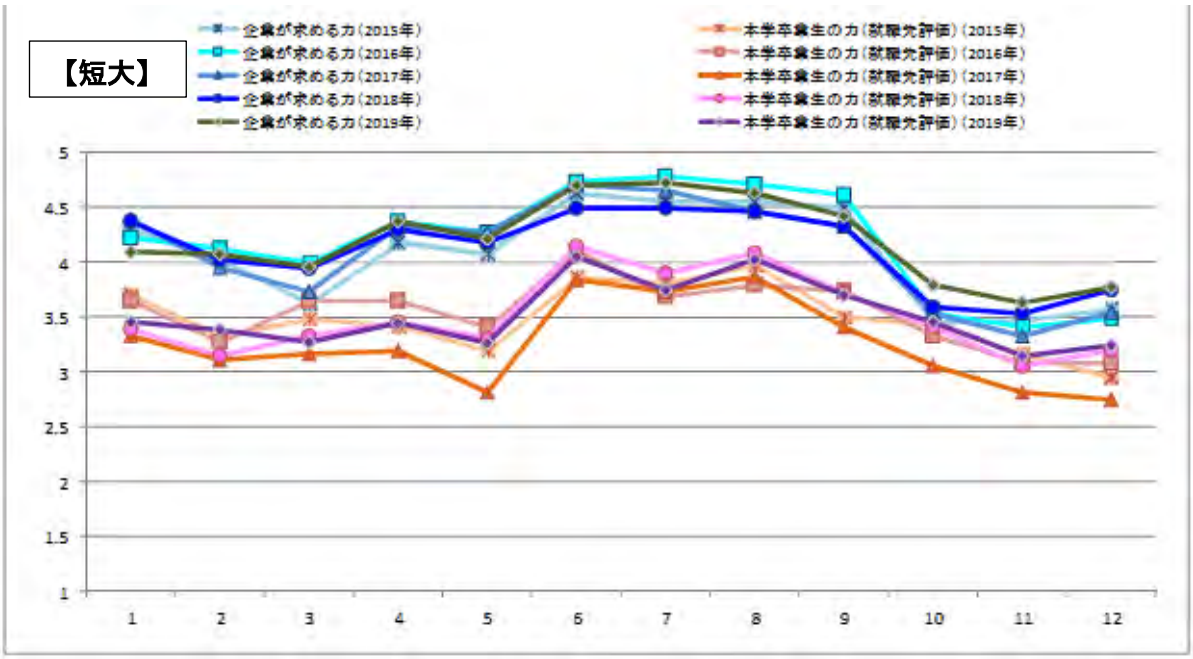
貴社・貴機関に就職した本学の 2018 年度卒業生についてお聞きします。
本学 2018 年度卒業生は、入社時に以下に示した 12 項目のスキルをどの程度身に付けていましたか？それぞれの項目について、最も当てはまる数字に○を付けてください。なお、就職した卒業生が複数いる場合は、それらの卒業生を総合的にみてご回答ください。

		非常に身につけていた	やや身につけていた	どちらとも言えない	あまり身につけていなかった	全く身につけていなかった
1.	課題に取り組むために、必要な情報を自分で集めることができる	1	2	3	4	5
2.	集めた情報に基づいて、論理的に考えることができる	1	2	3	4	5
3.	自分の興味関心に基づいて、課題やテーマを設定することができる	1	2	3	4	5
4.	課題に取り組む際に、いろいろなアイディアを考え出すことができる	1	2	3	4	5
5.	課題解決に向けて、見通しを持った企画・計画を立てることができる	1	2	3	4	5
6.	自分とは異なる意見にも、耳を傾けることができる	1	2	3	4	5
7.	課題解決に向けて、まわりの人と意見をやりとりすることができる	1	2	3	4	5
8.	チームに貢献できるような行動をとることができる	1	2	3	4	5
9.	他者との意見交換から、自分の意見の正しいところと間違っているところを振り返って把握することができる	1	2	3	4	5
10.	自分やチームのアイディアを、レポートや作品などの形として表現することができる	1	2	3	4	5
11.	効果的な表現方法でプレゼンテーションをすることができる	1	2	3	4	5
12.	自分で気づいて発見した社会や地域の課題について、解決に向けて取り組むことができる	1	2	3	4	5

新規採用者のスキルに関する調査　質問用紙



1 情報収集力
2 論理的思考力
3 課題設定力
4 発想力
5 企画・計画力
6 傾聴・受信力
7 コミュニケーション力
8 チームワーク力
9 自己省察力
10 創造・表現力
11 プレゼンテーション力
12 イノベーション力



新規採用者のスキルに関する企業等への調査

・ルーブリックの構築と検証

「成績評価の信頼性を確保することは、大学教育の質保証の根幹であり、学修成果の可視化を適切に行う上での前提である。厳格な成績評価を行うためにも、各授業科目の到達目標に照らした達成状況を『ルーブリック』等を用いて適切に判断することが重要」（中央教育審議会大学分科会教学マネジメント特別委員会(第 2 回資料 3)）とあるように、ルーブリックによる学修の質保証が注目されている。

本事業でのルーブリック作成の目的は、学生に向けたメッセージとして、比治山型アクティブ・ラーニングを通して身に付けさせたい汎用的能力としての「４×３の比治山力」について、より具体的・段階的に内容を把握し、目標設定を行いやすくすることで教員と学生の目標を共通化することである。また、「４×３の比治山力　学修の手引き」での説明をさらに補完する役割を果たす。また、教員の授業改善の指標として、「コア AL 科目」担当者を対象として行う「４×３の比治山力　リフレクションシート」によって受講生の状況を的確に把握するとともに、各科目を通して重点的に伸ばす「４×３の比治山力」の選定をより妥当性のあるものへと見直したり、授業内容や形態の改善を進める指標としたりすることである。

【平成 28(2016)年度】

前期に、「比治山型アクティブ・ラーニング」を通して育成を目指す「４×３の比治山力」（汎用的能力）の各スキルについて、申請時に作成したルーブリックの再構築を実施している。具体的には、平成 27(2015)年度末に本学の「子ども発達教育学科」卒業年次生を対象に、各スキルを 6 段階の一次評定尺度で調査した結果を参考にし、「４×３の比治山力」の各スキルを 4 段階に整理し、「４×３の比治山力」ルーブリックの原案を作成した。また、この尺度の妥当性について、後期に子ども発達教育学科の科目において授業中に学生に示すとともに、評価において導入する等の検証を開始した。

【平成 29(2017)年度】

平成 28(2016)年度までに整理した「４×３の比治山力」（汎用的能力）の各スキルについて、9 月の教職員合同研修会において各自の教育経験等に基づいて、4 段階の達成状況を具体化し「４×３の比治山力」ルーブリックとして試作した。このルーブリックは、「４×３の比治山力」について、具体的にどのようなことができるようになればそれぞれのスキルが身に付いたことになるかを、段階的に示したものである。

教職員合同研修会でのルーブリックの試作の様子

平成 29(2017)年度末に、言語文化学科の授業科目「対照言語学」で 79 名（4 年：4 名、3 年：11 名、2 年：64 名）の学生を対象に、作成した「４×３の比治山力」ルーブリックの文言や段階の設定に関する検証を行った。「４×３の比治山力」１２のスキルにつきそれぞれ 4 段階に設定した計 48 の項目（文末は「～できる」という文言）をランダムに並べ替え、3 段階評価（あてはまる：2、ややあてはまる：1、あてはまらない：0）を行った結果を集計し、項目ごとに確認した。

今後は、「４×３の比治山力」それぞれについて 4 段階の設定を行った項目について、再検証を行うとともに、最終調整を行った上で「４×３の比治山力　学修の手引き」に掲載して周知を図る。また、授業において目標とするルーブリックの段階設定について説明を行うとともに、「比治山力レポート」「４×３の比治山力　リフレクションシート」実施の際の参考とする。

【平成 30(2018)年度】

平成 29(2017)年 9 月の教職員合同研修会において、教職員の様々な観点から各スキルの段階について検証し再構築したものを AP ワーキンググループにてさらに調整した。

「４×３の比治山力」ルーブリックのオリジナル版を作成して、平成 30(2018)年 3 月の教職員合同研修会等で公表すると同時に、再度、ルーブリック作成の目的、活用方法等について説明した。さらに、AP セミナーの枠組の中で関田一彦氏（創価大学)による「ルーブリックの効果的な活用方法」と題した講演を実施することで、ルーブリックについて理解を深めた。
学生と教員が同じ目線で共通理解して授業に臨み、成果を測ることができるので、平成 30(2018)年度以降は、FDer 養成研修会で活用を促し、オリエンテーション等で全教員並びに全学生に配付した。

「４×３の比治山力」ルーブリック

	観点(「4×3の比治山力」)	尺度（ 易しい ⟷ 難しい ）			
		1	2	3	4
自立	① 情報収集力 （情報を集めて整理する力）	多様な情報源を活用し、情報収集することができる	目的に応じたキーワードを設定し、効果的に情報収集することができる	目的に応じて、集めた情報を区別・分類することができる	重要度に応じて、集めた情報を整理・順位付けすることができる
	② 論理的思考力 （いろいろな方向からものを捉えて考える力）	情報や知識、体験を、的確に理解することができる	情報や知識、体験を、要約したりグラフ化したりして、わかりやすくまとめることができる	情報や知識、体験を、比較・関連づけすることができる	情報や知識、体験を、根拠に基づき、筋道を立てて考えることができる
	③ 課題設定力 （興味・関心・疑問をもって課題を設定する力）	自分にとって興味・関心がある物事を示すことができる	自分の興味・関心・疑問を客観視し、自分が取り組むべき課題を考えることができる	自分が取り組むべき課題を、具体的な言葉で説明することができる	自分が取り組むべき課題について、仮説を立てたり、解決された状態(ゴール)をイメージしたりすることができる
想像	④ 発想力 （いろいろなアイディアを生み出す力）	目的に応じた様々なキーワードやアイデアを思いつくことができる	思いついたキーワードやアイデアを多面的に捉え、深く掘り下げることができる	新しいキーワードやアイデアを分類整理し、具体的にイメージ化することができる	異なるキーワードやアイデアを比較・関連づけすることができる
	⑤ 企画・計画力 （見通しをもって段どる力）	課題解決に向けて、やるべきことのリストを作ることができる	やるべきことの優先順位を決め、適切なスケジュールを立てることができる	企画・計画の進み具合に合わせて、やるべきことのリストを修正・再構築することができる	課題解決に向けて、企画・計画を適切にマネジメントすることができる
	⑥ 傾聴・受信力 （相手と相手の考え方を大切にする力）	相手の話を最後までしっかり聴くことができる	相手に寄り添いながら、話しやすい雰囲気を作り、話を聴くことができる	他者の考えを、的確に理解することができる	異なる意見・考え方を理解し、共感をもって受けとめることができる
共生	⑦ コミュニケーション力 （相手の考えと自分の考えをどちらも大切にする力）	相手を思いやり、ジェスチャーや表情を意識したコミュニケーションを行うことができる	話の構成・順序や声の大きさ・緩急などを意識して話すことができる	多角的視点に立ち、相手に合わせて話し合うことができる	相手やその場に応じて適切なコミュニケーションができる
	⑧ チームワーク力 （責任感をもって、自分のチームに貢献する力）	目標を理解して、チームの一員として参加することができる	自分の役割を見出し、チームに貢献することができる	チーム全体を把握し、目標(ゴール)に向かって、チームの推進力となることができる	チーム内で共動しながら、最後まで責任感を持って、最大の結果を生み出す努力をすることができる
	⑨ 自己省察力 （他者との関わりの中で自分を振り返り、成長した自分を捉える力）	協働している仲間からの指摘など、他者の視点を受け入れることができる	他者の視点を受け入れ、自分の考えなどを客観的に分析し、理解することができる	他者の視点を受け入れ自分を振り返り、自分の考えなどを改善に結びつけることができる	他者の視点を受け入れ、新しい思考や概念を構築することができる
創造	⑩ 創造・表現力 （専門的な学びを形にする力）	課題解決を図るために、適切な表現・手段・技術を身につけている	レポートや論文、作品などで表現する自分の考えを、明確に把握することができる	課題解決に向けて試行錯誤しながら、ねばり強く取り組むことができる	様々な状況に対応しながら課題解決し、レポートや論文、作品などの形として完成させることができる
	⑪ プレゼンテーション力 （適切な表現方法でプレゼンテーションをする力）	プレゼンテーションに必要な基本的な技術を身につけている(スライド等の準備、分かりやすい口調・身振り)	プレゼンテーションの要点を把握し、適切な構成を考えることができる	課題や場面・対象に最も適した表現方法を活用し、分かりやすくプレゼンテーションすることができる	その場の状況や対象の反応を観察し、臨機応変に対応することができる
	⑫ イノベーション力 （課題の本質を捉えて、問題解決にチャレンジする力）	他者と協働するなどして、地域・社会の課題解決に目を向けることができる	社会の中の既成概念に疑問をもち、新しい考えを模索することができる	地域・社会の中にある課題を指摘することができる	地域・社会の中にある課題を解決する方法を考えることができる

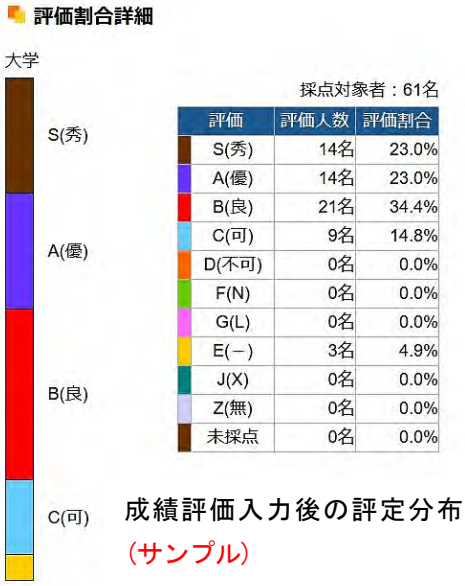
③ 成績評価基準の厳格化・平準化

【平成 27(2015)年度】

成績評価に関わる基準の厳格化と平準化の運用について検証すべく、本学が設定している教学マニュアル「教務の基本事項」の「五段階評価のガイドラインについて」に照らして適正な評価がなされているかどうかの現状把握を開始した。また、平成 26(2014)年度に実施した学生情報システム「Hi!way」のバージョンアップに伴い、教員の成績評価入力後に評定分布が即座に可視化される機能について、教学委員（FDer）を中心に全教職員に周知し、成績評価に関わる基準の厳格化と平準化に向けた点検・改善を求めた。

【平成 28(2016)年度以降】

成績評価基準については、大学・短期大学部それぞれの「学生便覧」に評価基準を掲載し、また「教務の基本事項」に成績評価に関するガイドラインを示すことにより、全教員による厳格な成績評価を行っている。IR 委員会と連携し、まずは現在の成績評価の全体像を把握するため、各年度のそれぞれ 1 年間に開講された大学・短期大学部すべての授業科目につき、どのような成績評価分布であったのかを図表でまとめた。その結果、学科・コースごとに見ると、「教務の基本事項」に示す成績評価に関するガイドラインに沿った分布であり、学科・コース単位では成績評価基準の厳格化・平準化が、概ね確保されている。

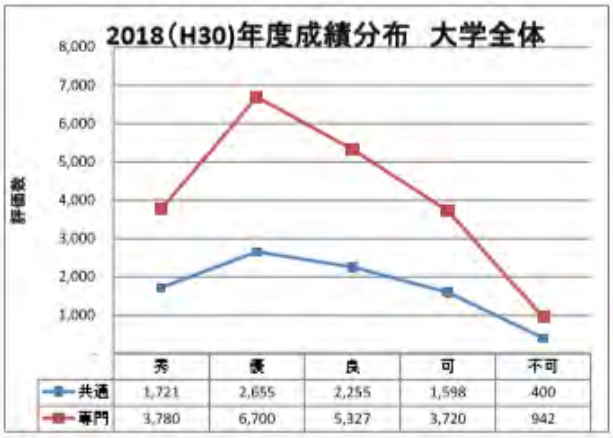


評価	評価人数	評価割合
S(秀)	14名	23.0%
A(優)	14名	23.0%
B(良)	21名	34.4%
C(可)	9名	14.8%
D(不可)	0名	0.0%
F(N)	0名	0.0%
G(L)	0名	0.0%
E(－)	3名	4.9%
J(X)	0名	0.0%
Z(無)	0名	0.0%
未採点	0名	0.0%

成績評価入力後の評定分布
（サンプル）

教員の成績評価入力後に評定分布が可視化される機能

この資料を基に、毎年 9 月の教職員合同研修会において、成績評価の状況について全教職員に現状を説明するとともに、成績評価入力時に評定分布が即座に可視化される「Hi!way」上の機能を改めて周知し、一層の成績評価の厳格化・平準化を図った。



3-2　情報システムによる学修成果の可視化

1. 情報システムの再構築

【平成 26(2014)年度】

平成 20(2008)年より導入している学生情報システム「Hi!way」の再構築と拡充を行い、学生が常に web 上で自身の成果と課題を把握し、自主的な学びへの意欲向上が図ることができるように、わかりやすく、見やすく、次へのステップへと導く学修活動の可視化を実現することにした。

「Hi!way」の再構築を行う中で、本学独自の機能「Hi!check」として、つぎの 3 機能の開発を行った。

- 「４×３の比治山力」 ： 学生の成長度を「コア AL 科目」の GPA を利用して４つのクローバーに模して可視化する。
- 成績の推移 ： 各セメスターの GPA の推移を可視化する。
- 免許・資格 ： 免許・資格のポートフォリオ機能を持つ。

※「Hi!check」のイメージ図や活用方法等の詳細については、「４×３の比治山力　学修の手引き　第 4 版」を参照してください。

【平成 27(2015)年度】

さらに、学生自身が学修成果を可視化することにより、自らの学修活動の PDCA サイクルの確立を支援することを目的として、「Hi!way」の再構築を行った。

平成 27(2015)年 7 月に、既存の「Hi!way」に、つぎの 3 項目で構成する e ポートフォリオ機能を実現する「Hi!step」を追加した。

- マイストーリー ： 入学時の思いや将来の自分を思い描き記録する
- マイチャレンジ ： 年度毎の目標を立て、実現に向かい、学期終了後には結果を振り返る
- マイアルバム ： 学修活動・課外活動・ボランティア・就職活動・作品等の活動記録をアルバム的に保存する

また、9 月には、後期開始前に教職員合同研修会で活用方法等について共有するとともに、後期オリエンテーションで学生にも周知することで、本格的な運用を全学的に開始した。

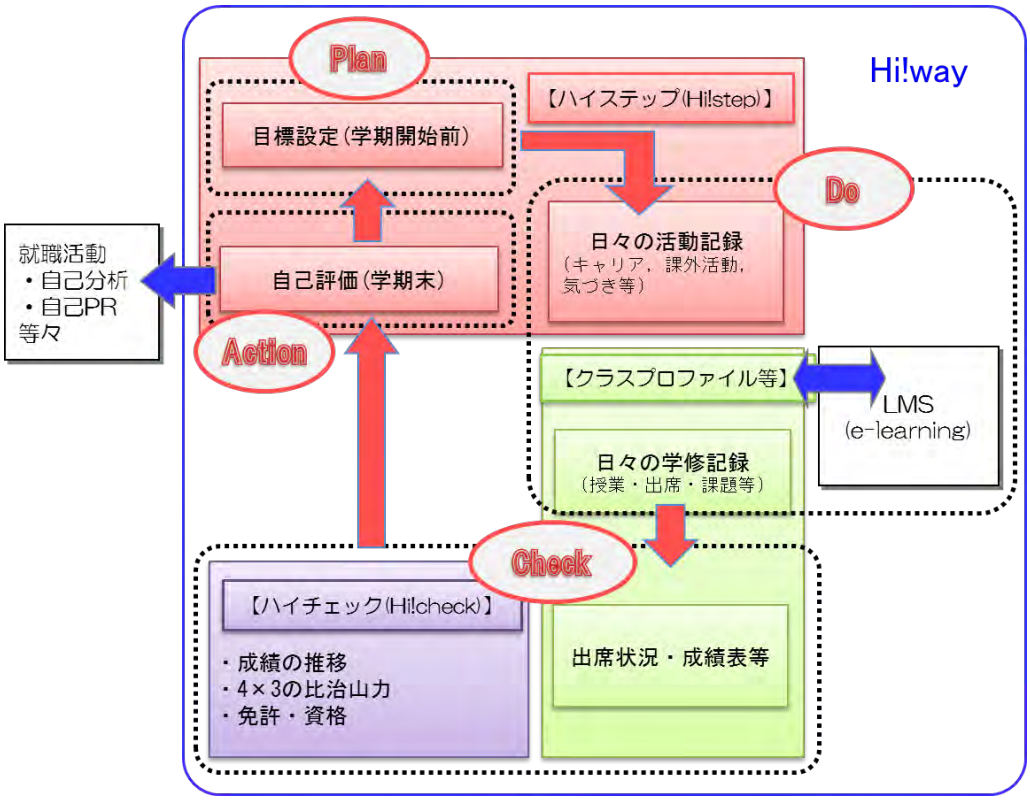
さらに、本学の学生の意識と成長度を測定することを目的とした「大学生基礎力レポートⅠ（1 年生)」、「大学生基礎力調査Ⅱ（2 年生以上)」（ベネッセ i-キャリア）の実施結果を、当該学生が常時「Hi!way」からダウンロードでき、かつ、学生自身がこの調査結果をもとに自己分析できるよう、「Hi!step」内に「マイレポート」「マイアプローチ」を構築し、キャリア支援と有機的に関連付けられるようにした。

※「Hi!step」のイメージ図や活用方法等の詳細については、「４×３の比治山力　学修の手引き　第 4 版」を参照してください。

これらの機能の追加により、「Hi!way」に学修活動の PDCA サイクルを確立し、つぎのことができることで学生が「自ら学ぶ」スタイルを身に付けることを支援できるようにした。

- 学修活動の PDCA サイクルは、「目標設定→振り返り→目標設定」を基本プロセスとしており、学生は、定期的に自身の学修活動を振り返ることで、学修の到達度と次に取り組むべき課題を認識することができる。
- 「Hi!way」でその学期の学修状況（免許・資格を含む）や「４×３の比治山力」の経年変化を可視化し、学生に気付きを促し、PDCA サイクルを回す手助けができる。
- また、蓄積された活動記録や自己成長に関する情報を進学･就職活動に活かすことができる。

これらの PDCA サイクルをイメージ化すると下図のように要約される。



また、「Hi!way」を利用した学修活動の PDCA サイクルの具体的なイメージは次のとおりである。

① Plan（目標設定（学期開始前））

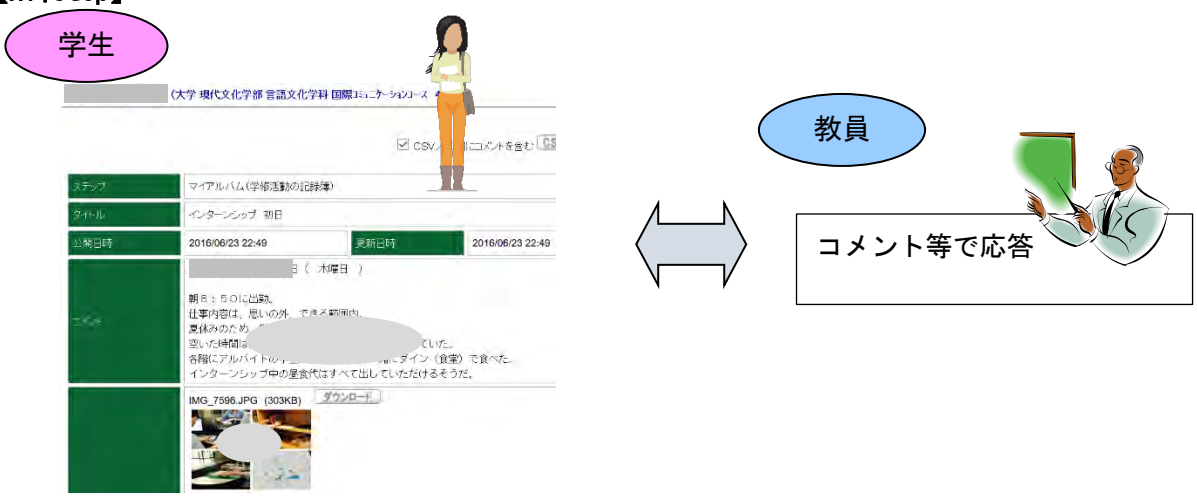
学生自身の自己実現に向けて、学期の始めに目標の設定とそれを達成する方法等を記録することで、その実現に向けた充実した学生生活を送ることができるようにする。初年次セミナー、キャリアデザイン、ゼミナール等でチューターと面談しながら行う。

【Hi!step】

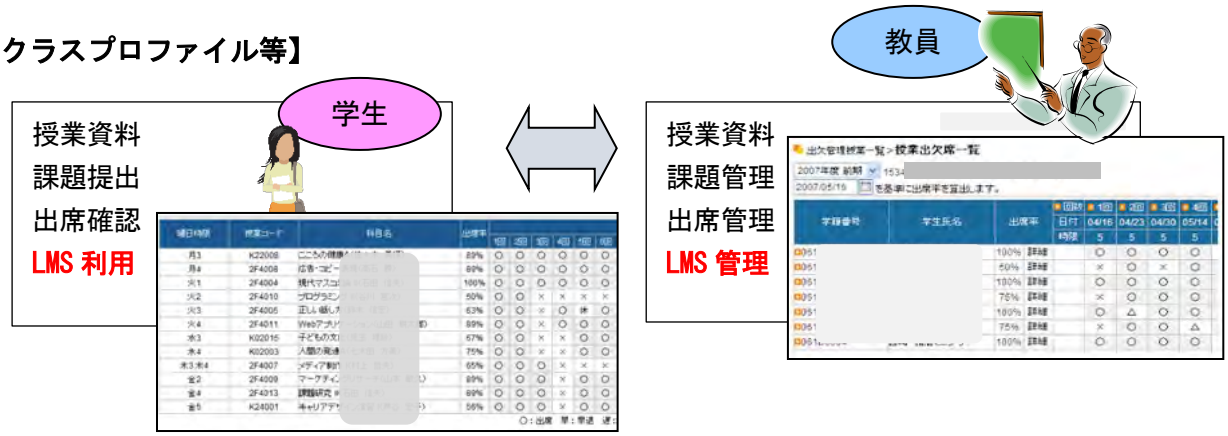
② Do（日々の学修活動等の記録）

学修活動、課外活動や就職活動等の状況を記録しておくことにより、現段階の活動状況の把握や事後に活動の振り返りを行うことができる。

【Hi!step】

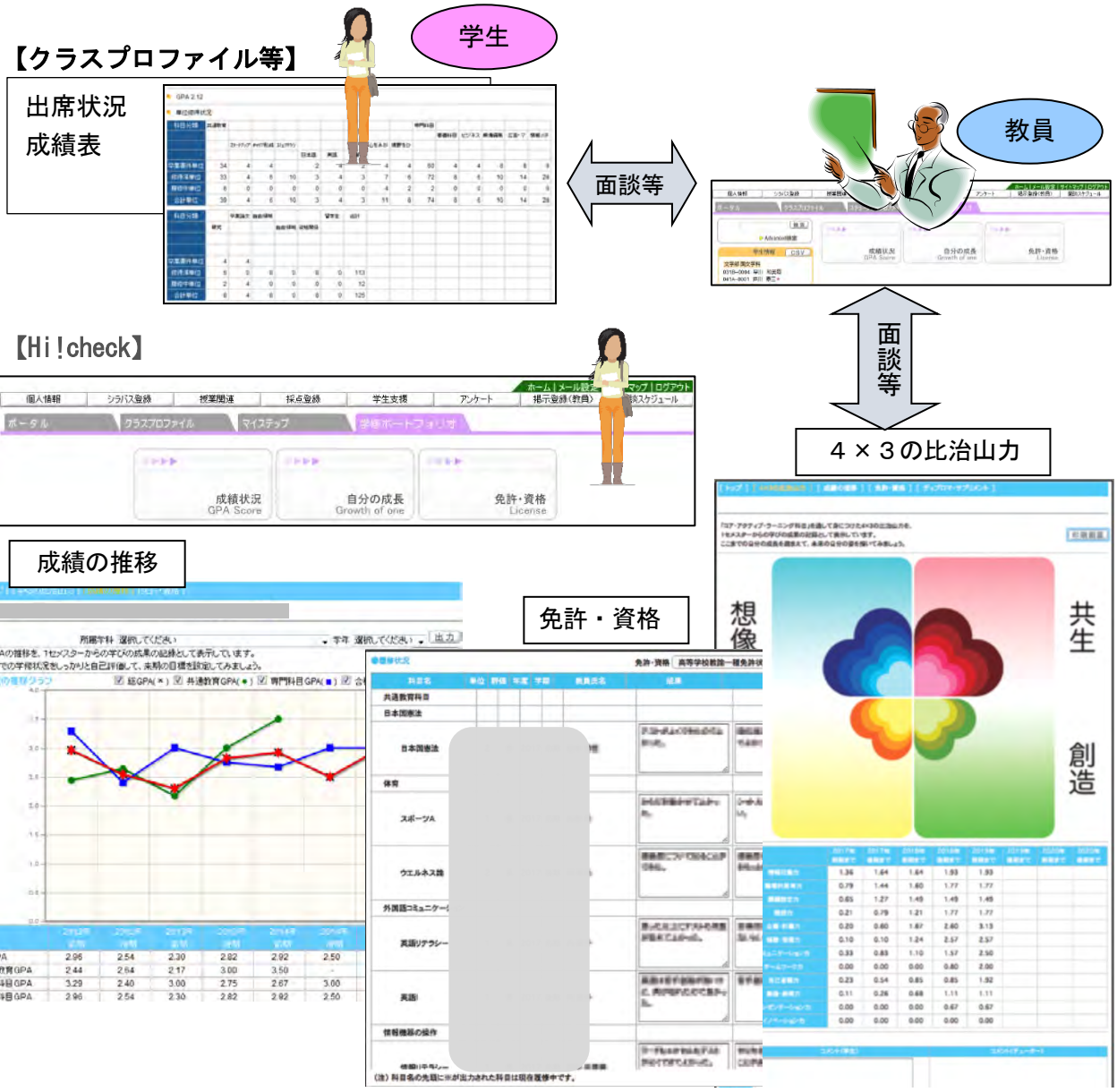


【クラスプロファイル等】



③ Check（検証）

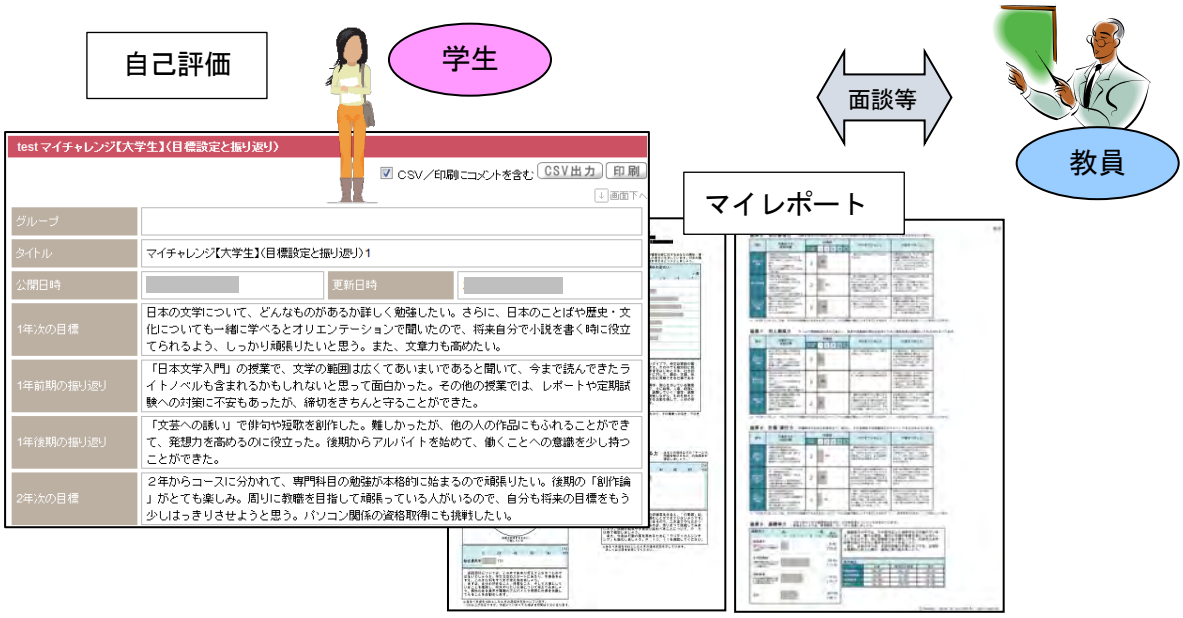
学期末に、当該学期の出席状況、成績表等、並びに「Hi!check」から得られる情報（４×３の比治山力、成績の推移、免許・資格）の経年変化を確認・検証する。これにより、学生自身の気づきや動機づけ（自己改善）を促すことができる。



④ Action（自己評価）

学期ごとに設定していた目標に対して、どのくらいその目標が達成できたかなどを総括的に自己評価し記録する。チューター等の指導を仰ぎながら学期末に行い、学生自身の自己実現を進めていく。

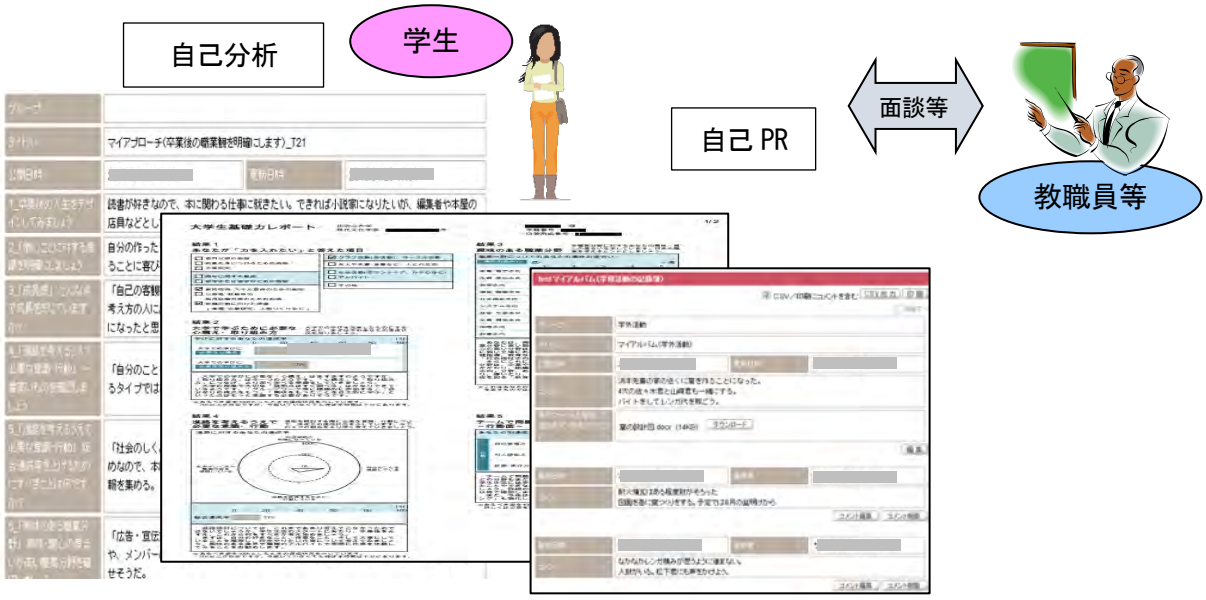
【Hi!step】



⑤ 進学・就職活動等に向けて

蓄積された活動記録や自己成長等の多くの情報から、学生は進路に必要とされる情報を取り出して進学・就職活動等に活かしていく。

【Hi!step】



【平成 28(2016)年度以降】

「Hi!check」「Hi!step」を含めた e ポートフォリオ機能の追加により、学修活動の PDCA サイクルの確立を支援する学修活動の可視化を一応完了し、平成 28(2016)年度から公開・運用を開始した。

これらの機能の利用促進のため、学期毎のオリエンテーション等を利用して学生向けガイダンスを行い周知徹底するとともに、チューターやゼミ担当教員等によるフォローアップも適宜行った。

また、「Hi!check」「Hi!step」の効果測定のために、平成 28(2016)年度以降毎年度、「Hi!check・Hi!step アンケート」及び「AP 学生モニターに対する聞き取り調査」を実施した。

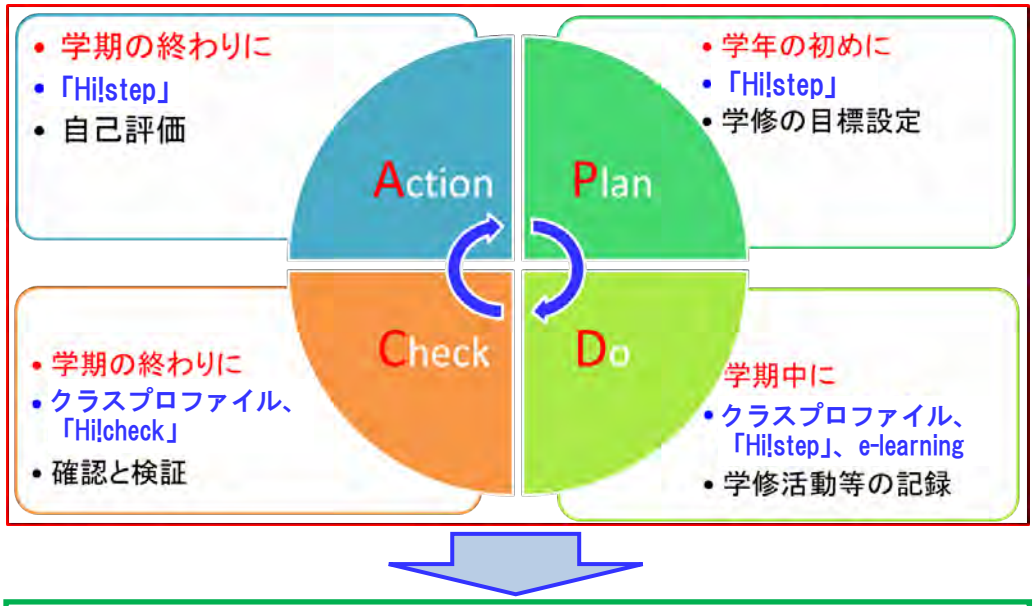
さらに、「Hi!way」には、「比治山型アクティブ・ラーニング」のより効果的な実践のために、平成28(2016)年度にe-learningシステム「Hi!space」、平成29(2017)年度にG Suite教育版を導入した。これらについては、「**2-2　e-learningシステムによる授業方法の実践・検証（テーマⅠ）**」で詳述している。

【平成 29(2017)年度以降】

卒業時の学修成果を目に見える形で社会に提供するツールとしての「比治山型ディプロマ・サプリメント」の設計・構築を行っている。これについては、後述の「**5. 比治山型ディプロマ・サプリメントの構築**」で詳述している。

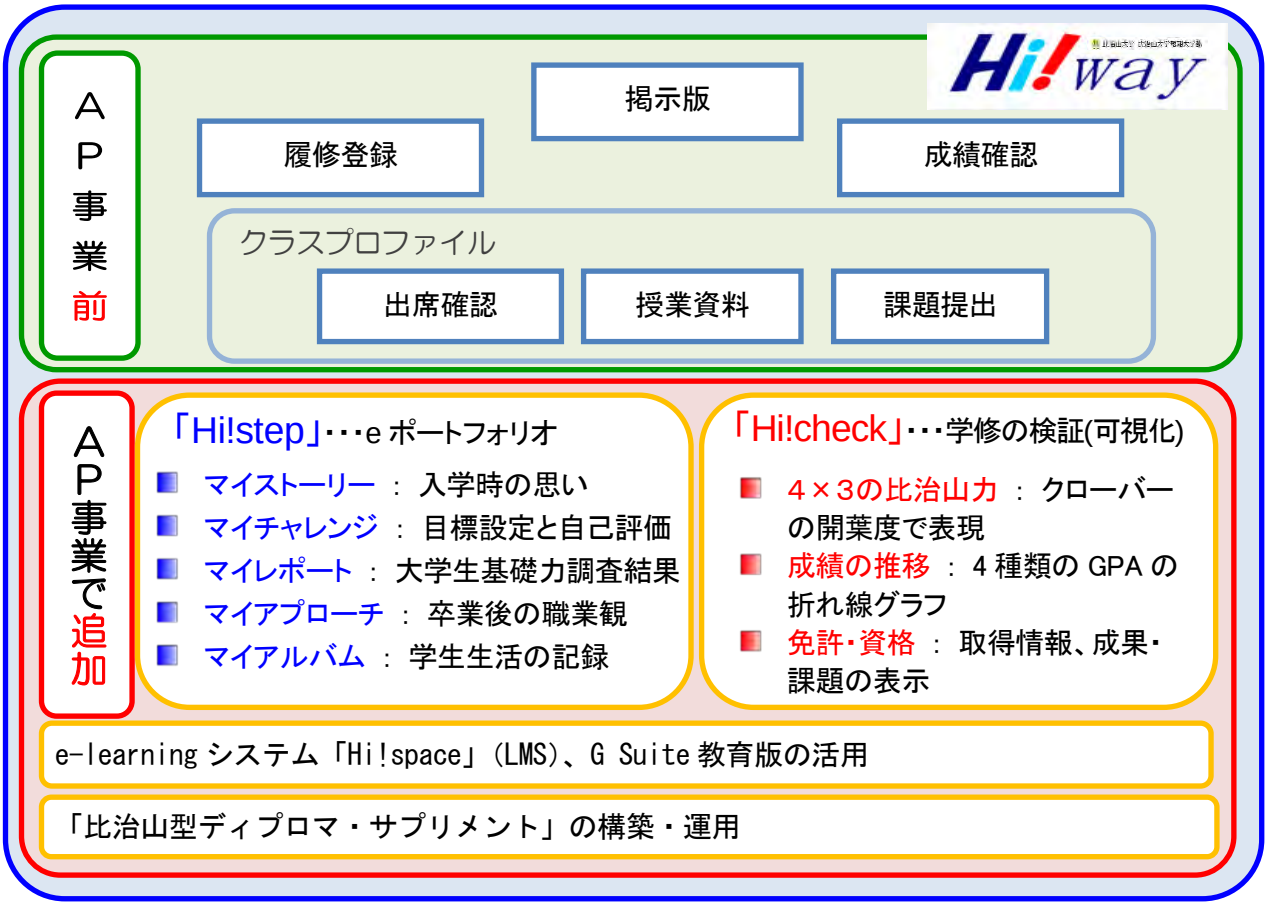
以上の活動を PDCA サイクルでまとめると下図のようになる。

《学修活動の PDCA サイクルへの適用》



これまでに構築・運用した「Hi!way」の諸機能をまとめると下図のようになる。

《学生情報システム「Hi!way」の諸機能》



2. 「Hi!check」「Hi!step」の運用

【平成 27(2015)年度】

① 4 月に、学生向けの「比治山型アクティブ・ラーニング」ガイダンス資料「4×3の比治山力 学修の手引き 2015」を作成・配付し、可視化することのねらいや期待される効果について学生に周知した。

② 7 月に、「Hi!way」に「Hi!step」、「Hi!check」を加えた学生情報システムの再構築を完了し、検証作業を開始した。特に、「Hi!check」における「4×3の比治山力（自分の成長)」では、サンプル学生を抽出し、モデルとしているクローバーの葉の成長と、実際の学生の成績との対応について整合性を図るべく、AP アクティブ・ラーニング部会を中心に 7 月～9 月にかけて閾値の調整を繰り返し実施し、学科単位で学生の到達度が適正にクローバーで表現できるよう設定した。同時に、教員用と学生用の「Hi!way システム新機能の手引き 2015」の作成を進めた。

③ 9 月の教職員合同研修会において、再構築した「Hi!way」の活用方法等を共有するとともに、後期オリエンテーションにおいて学生にも周知し、「Hi!step」、「Hi!check」を加えた学生情報システムの本格運用を全学で開始した。次に、AP アクティブ・ラーニング部会を中心に、学生自身が日常的に自己分析できるような利用促進に向けた「Hi!way」活用の取組を学科単位で開始した。

④ 9 月に、「大学生基礎力調査」の結果を学生が常時 web からダウンロード・閲覧でき（「マイレポート」)、この内容を学生自身のキャリア支援と有機的に関連付けられるよう、「Hi!step」内の「マイアプローチ」の構成について検討を開始し、次年度より運用が開始できるようにした。また、学生の入力に際して支援すべくマウスオン機能を付加するとともに、2 月より、次年度の運用準備として入力の手引きを作成し、3 月の教職員合同研修会で共有した。

【平成 28(2016)年度】

平成 27(2015)年度に、本学の学生情報システム「Hi!way」を再構築し、学修成果（到達度評価）の可視化及び学修活動の PDCA サイクル確立のための e ポートフォリオシステム「Hi!check」「Hi!step」の機能を公開・運用した。平成 28(2016)年度から「Hi!step」に新たに「マイレポート」「マイアプローチ」を追加することで、以上の機能の構築を完了した。

【平成 29(2017)年度】

平成 28(2016)年度から「Hi!step」に新たに「マイレポート」「マイアプローチ」を追加し、さらに、e-learning システム「Hi!space」を構築した。「Hi!space」については、平成 29(2017)年度から実践・検証している。

※「Hi!space」の詳細については、「Hi!space （LMS）機能マニュアル」を参照してください。

また、e ポートフォリオとして得られた学修活動の情報の一部は、平成 29(2017)年度に設計・構築した「比治山型ディプロマ・サプリメント」に反映される。

【平成 30(2018)年度】

平成 30(2018)年度から構築・実験している「比治山型ディプロマ・サプリメント」にも e ポートフォリオとして蓄積された学修活動情報を必要に応じて反映することができる。

《「Hi!check」と「Hi!step」の活用状況について》

「Hi!check」の学生入力状況

数字：80%以上の入力率　　数字：50%以上の入力率

2020/02/14　現在

	4×3の比治山力		成績の推移		免許資格成果課題		免許資格目標課題		在籍者数 2019/5/1 現在
	学生数	%	学生数	%	学生数	%	学生数	%	
1年生									
現代文化学部 言語文化	9	6.3%	9	6.3%	18	12.6%	20	14.0%	143
マスコミュニケーション	1	1.6%	1	1.6%	0	0.0%	0	0.0%	61
社会臨床心理	32	44.4%	24	33.3%	0	0.0%	0	0.0%	72
子ども発達教育	78	96.3%	78	96.3%	65	80.2%	80	98.8%	81
健康栄養学部 管理栄養	25	48.1%	28	53.8%	0	0.0%	33	63.5%	52
短期大学部 幼児教育	26	28.3%	34	37.0%	38	41.3%	67	72.8%	92
総合生活デザイン	13	17.8%	12	16.4%	0	0.0%	10	13.7%	73
美術	11	16.2%	5	7.4%	0	0.0%	3	4.4%	68
2年生									
現代文化学部 言語文化	29	22.3%	30	23.1%	31	23.8%	50	38.5%	130
マスコミュニケーション	50	79.4%	35	55.6%	0	0.0%	5	7.9%	63
社会臨床心理	54	63.5%	41	48.2%	0	0.0%	19	22.4%	85
子ども発達教育	70	100.0%	70	100.0%	60	85.7%	70	100.0%	70
健康栄養学部 管理栄養	53	98.1%	52	96.3%	1	1.9%	46	85.2%	54
短期大学部 幼児教育	59	71.1%	60	72.3%	49	59.0%	79	95.2%	83
総合生活デザイン	37	47.4%	27	34.6%	0	0.0%	17	21.8%	78
美術	40	76.9%	26	50.0%	0	0.0%	8	15.4%	52
3年生									
現代文化学部 言語文化	24	18.9%	15	11.8%	27	21.3%	35	27.6%	127
マスコミュニケーション	42	89.4%	42	89.4%	0	0.0%	4	8.5%	47
社会臨床心理	8	10.8%	8	10.8%	0	0.0%	3	4.1%	74
子ども発達教育	69	88.5%	65	83.3%	72	92.3%	76	97.4%	78
健康栄養学部 管理栄養	76	95.0%	76	95.0%	2	2.5%	71	88.8%	80
4年生									
現代文化学部 言語文化	42	37.2%	47	41.6%	24	21.2%	40	35.4%	113
マスコミュニケーシヨン	41	87.2%	40	85.1%	0	0.0%	21	44.7%	47
社会臨床心理	33	49.3%	21	31.3%	1	1.5%	4	6.0%	67
子ども発達教育	76	95.0%	70	87.5%	79	98.8%	79	98.8%	80
健康栄養学部 管理栄養	60	87.0%	51	73.9%	1	1.4%	40	58.0%	69

「Hi!step」の学生入力状況

数字：80%以上の入力率　　数字：50%以上の入力率

2020/02/14　現在

	マイアルバム（学修活動の記録簿）		マイストーリー（入学時等の思い）		マイチヤレンジ（目標設定と振り返り）		マイアプローチ（卒業後の職業観）		在籍者数 2019/5/1 現在
	学生数	%	学生数	%	学生数	%	学生数	%	
1年生									
現代文化学部 言語文化	12	8.4%	86	60.1%	25	17.5%	10	7.0%	143
マスコミュニケーション	0	0.0%	58	95.1%	39	63.9%	0	0.0%	61
社会臨床心理	0	0.0%	69	95.8%	66	91.7%	0	0.0%	72
子ども発達教育	4	4.9%	81	100.0%	81	100.0%	2	2.5%	81
健康栄養学部 管理栄養	14	26.9%	49	94.2%	44	84.6%	23	44.2%	52
短期大学部 幼児教育	1	1.1%	91	98.9%	89	96.7%	83	90.2%	92
総合生活デザイン	11	15.1%	44	60.3%	69	94.5%	65	89.0%	73
美術	5	7.4%	57	83.8%	65	95.6%	63	92.6%	68
2年生									
現代文化学部 言語文化	123	94.6%	96	73.8%	122	93.8%	122	93.8%	130
マスコミュニケーション	59	93.7%	63	100.0%	62	98.4%	51	81.0%	63
社会臨床心理	79	92.9%	79	92.9%	83	97.6%	67	78.8%	85
子ども発達教育	69	98.6%	69	98.6%	70	100.0%	67	95.7%	70
健康栄養学部 管理栄養	53	98.1%	54	100.0%	54	100.0%	53	98.1%	54
短期大学部 幼児教育	31	37.3%	83	100.0%	83	100.0%	77	92.8%	83
総合生活デザイン	47	60.3%	64	82.1%	73	93.6%	76	97.4%	78
美術	5	9.6%	47	90.4%	45	86.5%	45	86.5%	52
3年生									
現代文化学部 言語文化	118	92.9%	71	55.9%	94	74.0%	107	84.3%	127
マスコミュニケーション	45	95.7%	46	97.9%	46	97.9%	44	93.6%	47
社会臨床心理	70	94.6%	62	83.8%	69	93.2%	68	91.9%	74
子ども発達教育	73	93.6%	72	92.3%	75	96.2%	74	94.9%	78
健康栄養学部 管理栄養	78	97.5%	79	98.8%	79	98.8%	78	97.5%	80
4年生									
現代文化学部 言語文化	109	96.5%	93	82.3%	106	93.8%	100	88.5%	113
マスコミュニケーシヨン	43	91.5%	44	93.6%	46	97.9%	37	78.7%	47
社会臨床心理	57	85.1%	50	74.6%	62	92.5%	58	86.6%	67
子ども発達教育	61	76.3%	78	97.5%	79	98.8%	78	97.5%	80
健康栄養学部 管理栄養	66	95.7%	49	71.0%	69	100.0%	68	98.6%	69

3. 「Hi!check」「Hi!step」のフォローアップ

【平成 28(2016)年度以降】

e ポートフォリオとしての「Hi!check」「Hi!step」の運用にあたり、平成 28(2016)年 4 月に「4×3の比治山力　学修の手引き」を改訂し、全学生に配付した。学生に対しては学期毎のオリエンテーション等を利用してガイダンスを行い、利用価値も含めて説明したほか、初年次教育・ゼミナール科目・キャリア関係科目などを通じて活用を促している。また、授業外においても、次のようなことを実施し、普及・定着に努めている。

○ チューターやゼミナール担当教員等が適宜フォローアップし、学生自身による自己分析に対して支援を行っている。

○ 学生に携行を求めている HIJIYAMA 手帳に、学修活動の PDCA の概略、「Hi!step」の使い方、関連するワークシートを掲載して日常的な活用を促している。

○スマートフォン等の端末での利用促進を図るために、学内無線 LAN を充実させるなどの環境整備をしている。

このように、日常的に、学修状況をチューターやゼミナール担当教員等と学生とが共通認識することで、きめ細かなアドバイスを行うことができるようにしている。

しかし、次のような課題が浮かび上がり、継続的に検討することとした。

○ 学生による「Hi!check」への入力状況は学科や学年によってかなりバラツキがある。入力することのメリットを適切に説明する必要がある。

○ 学生が入力した「Hi!check」「Hi!step」の内容は、現在、チューターや役職者（学科主任等）のみが閲覧・コメント入力できる。閲覧やコメント入力を授業担当者、学生、教職員等まで拡大することも考えられるが、個人情報保護との関連もふまえて検討する必要がある。

4. 「Hi!check」「Hi!step」の効果測定

学修成果の可視化を目的とした e ポートフォリオシステム「Hi!check」「Hi!step」の効果測定のため、「Hi!check・Hi!step に関するアンケート」及び「AP 学生モニターに対する聞き取り調査」を実施した。

「Hi!check・Hi!step に関するアンケート」を実施することで、e ポートフォリオシステム「Hi!check」「Hi!step」を用いた学修成果の可視化によって、学生の学修意欲の向上やキャリア意識の形成がどの程度達成されたかについて調査した。

【平成 28(2016)年度】

「Hi!check」では、全体的には学修意欲が高まったようであるが、「4×3の比治山力」の可視化である四つ葉のクローバーに比べて、「成績の推移」の可視化である GPA の折れ線グラフのほうが学修意欲を高める効果が大きいという状況にある。「Hi!step」については、全体的にはこの機能が役立っていると認識している傾向にあるが、まだ「どちらともいえない」という回答が多い。利用価値を適切に伝えることによって、普及・定着を促進する必要がある。

これらが役立ったかどうかについて自由記述を求めたところ、役立っていないとの意見も散見される一方で、「どんなボランティアをしたのかを忘れてしまう前に『Hi!step』のマイアルバムに記録することによって、忘れることを防止することに役立っている」「自分を振り返るいい機会になりました。具体的に何を頑張ればいいか、考えるきっかけになって、とてもよかったです」「自分について説明するときの文章構成が身についた」のように積極的な活用を推察できる意見も多く、学修活動の PDCA サイクルを確立する学生の存在も明確になってきている。

また、平成 28(2016)年度は、「AP 学生モニターに対する聞き取り調査」として、本学の各学科・コースの AP 学生モニターに対して本事業についての聞き取り調査を対面で行った。AP 学生モニターに本事業のねらいが広く周知されているとは言い難いが、なかには「配付される成績表の

GPA よりもわかりやすい」「就職活動等に役立てている」などの意見があった。アンケート形式では得られにくい学生の忌憚のない意見が聴取できたため、今後の改善に活かしていく。

【平成 29(2017)年度】

「Hi!check」では、全体的には学修意欲が高まったようであるが、「４×３の比治山力」の可視化である四つ葉のクローバーに比べて、「成績の推移」の可視化である GPA の折れ線グラフのほうが学修意欲を高める効果がやや大きいという状況にある。「Hi!step」については、全体的にはこの機能が役立っていると認識している傾向にはあるが、平成 28(2016)年度に引き続いて、まだ「どちらともいえない」という回答が多い。ただし、「役に立っていない」との回答者は非常に少ない。利用価値を適切に教示することによって、普及・定着を促進する必要がある。

これらが役立ったかどうかについて自由記述を求めたところ、役立っていないとの意見も散見される一方で、「教職課程を学んでいるが、時々『なぜ教職を学んでいるんだろう』と考えることがある。その際に見返すと目標が再びわかる」「客観的に自分を振り返ることができ、次の意欲につなげていくことができる」「頭にあることを文字に起こして視覚化すると、整理整頓できる。そして自分自身の振り返りに役立っている」のように積極的な活用を推察できる意見も多く、平成 28(2016)年度と同様に、学修活動の PDCA サイクルを確立する学生の存在も明確になってきている。

平成 28(2016)年度に引き続き、「AP 学生モニターに対する聞き取り調査」として、本学の各学科・コースの AP 学生モニターに対して本事業についての聞き取り調査を対面で行った。AP 学生モニターに本事業のねらいが広く周知されているとは言い難いが、「Hi!check」については「成績が出た後か、学期始めに『Hi!check』にはアクセスする。成績が視覚的に見え、今後、力を入れるべき科目が一目で見ることができるのがよい」等の意見が多い。「Hi!step」については「チューターの先生に入力するように言われたとき以外は、ほとんど使っていない。日記のようなものは、自分の手帳に書いており、システムを使うよりは手元で書けるもののほうが使い易い」など、利用頻度が少ない原因がうかがえる。アンケート形式では得られにくい学生の忌憚のない意見が聴取できたため、今後の改善に活かしていく。

また、平成 29(2017)年度は、初めての試みとして、11 月 30 日に「学外関係者を交えた『Hi!step』・『Hi!check』の活用方法に関する検証・協議」を行った。学外関係者として企業 2 社からご参加いただき、「Hi!step」・「Hi!check」の活用について情報交換後、企業の観点からアドバイスをいただいた。

【平成 30(2018)年度】

「Hi!check」の閲覧については、全体的には学修意欲が高まったようであるが、「４×３の比治山力」の可視化である四つ葉のクローバーに比べて、「成績の推移」の可視化である GPA の折れ線グラフのほうが学修意欲を高める効果がやや大きいという状況にある。また、「Hi!step」については、全体的にはこれらの機能が役立っていると認識している傾向にはあるが、平成 29(2017)年度に引き続いて、「どちらともいえない」という回答が多い。ただし、「役に立っていない」との回答者は少ない。利用価値を適切に教示することによって、普及・定着を促進する必要がある。

「Hi!step」が役立ったことについて自由記述を求めたところ、役立っていないとの意見も散見される一方で、

- ○ 自身が書いた『入学時等の思い』を先ほど読んでみたが、入学当時の気持ちを思い出すことができ、初心に返ることが出来たように思う。このように日頃から現在の状況を記録しておくことによって、その当時をよく思い出すことができるので、学習意欲の向上にも非常に役立つのではないかと思う。
- ○ 四年生になったときなど履歴書に書くときにあいまいな記憶をたどらなくていい。確実なことを書くことができる。

のように、積極的な活用を推察できる意見も多く、平成 29(2017)年度と同様に、学修活動の PDCA サイクルを確立する学生の存在も明確になってきている。

また、平成29(2017)年度に引き続き、「AP学生モニターに対する聞き取り調査」として、本学の各学科・コースのAP学生モニターに対して本事業についての聞き取り調査を対面で行った。

「Hi!check」については、

〇成績が出た後か、学期始めに「Hi!check」にはアクセスする。成績が視覚的に見え、中だるみしているなとか、今はいいところに行っているなど、数字だけで見るよりは実感がわく。

等の意見が多い。また、免許・資格系の学科では当然ながら「免許・資格」の履修カルテのような機能が重宝されている。

「Hi!step」については、

〇授業以外で「マイアルバム」を活用している。授業でボランティアに参加したことを記録しておくとよいとアドバイスされ、その後、継続的に活用している。

〇オリエンテーションで教員から入力するように言われても、わざわざインターネット中に書き込まない。大事なことは記憶しておけばいいし、忘れそうだったらメモしたほうがよいと思っている。

など、学生の学修スタイルによって活用はまちまちであり、利用頻度にも偏りがありそうである。

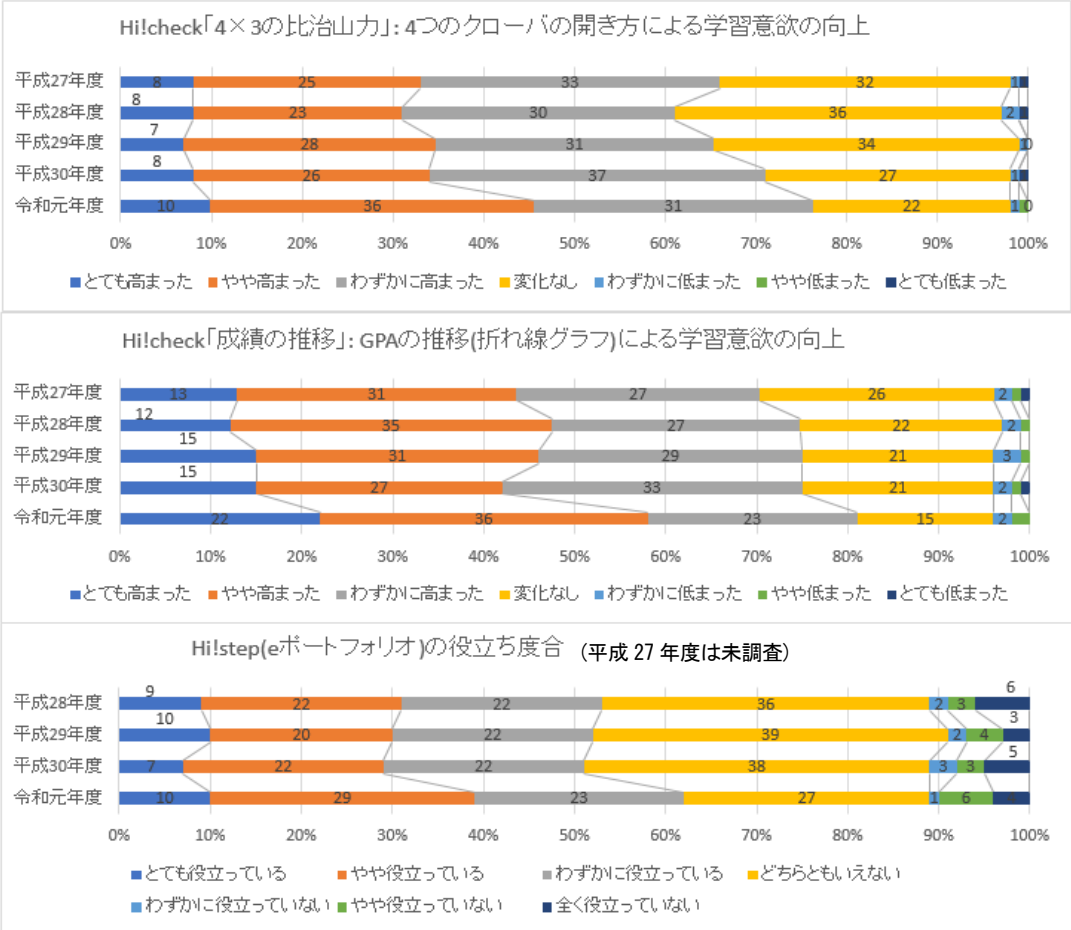
また、テキスト・マイニングの結果では、「成績の推移はわかりやすく、モチベーションにもつながる」「ログインが面倒・やり方が難しい」「入力は教員の指示によって授業内で行われることが多い」等に集約される。アンケート形式では得られにくい学生の忌憚のない意見が聴取できたため、今後の改善に活かしていく。

【平成31・令和元(2019)年度】

回答率はどの年度も30%前後であるが、下のグラフのように、いずれの項目も、過去の年度と比較して、「とても高まった」「やや高まった」割合が増加している。「成績の推移」は6割近くを占めており、おおむね役立っていると言える。また、「eポートフォリオの役立ち度合」も明示的の増加している。

自由意見でも、「役に立っていない」との回答は少なく、「自分がした貴重な経験やボランティアなどを振り返ることができたり、学生時代に何をしたのかを振り返ったりすることができるため、就職活動の際の面談に役立つ」等、多くの自由記述で、役に立つ実感を記入している。

また、「AP学生モニターに対する聞き取り調査」の回答をテキスト・マイニングで分析すると、eポートフォリオについては「ログインが面倒、やり方が難しい。自動ログイン機能がほしい」「授業以外では入力していない、見返していない」という意見が大半だが、「一部しておけばよかった」という意見も見られた。アンケートの回答内容と異なる意見も多い。



「Hi!check・Hi!step に関するアンケート」集計結果

5. 「比治山型ディプロマ・サプリメント」の構築

例えば、「個々の学修成果について、各大学の好事例に照らして、対外的にどのようにわかりやすい形で表示することができるかを検討する必要がある」(中央教育審議会大学分科会教学マネジメント特別委員会(第 2 回資料 3)、平成 31 年 1 月 16 日)というスタンスで、ディプロマ・サプリメントの作成と活用が注目されている。

本学でも、平成 29(2017)年度からの AP 事業について高大接続改革推進事業として計画調書を再提出しており、「比治山型ディプロマ・サプリメント」の構築・運用を新規の事業として加えている。本学の学生情報システム「Hi!way」にその機能を構築し、平成 30(2018)年度に試験的公開・検証を行い、平成 31・令和元(2019)年度卒業生への配付を始点として運用する計画である。

本学では、本事業調書の概要で、「学生に学びの充実感・成就感を実感させる (中略) 自身の強みを意識化させ、自己理解・肯定感を高めて社会に接続させる」と謳っており、卒業時の学修成果を目に見える形で社会に提示するツールとしてこの「比治山型ディプロマ・サプリメント」を構築・運用することが、その目的を達成するための最後の仕上げと考えている。

【平成 29(2017)年度】

ディプロマ・サプリメントとは、EU 統合に伴うボローニャ宣言に端を発しているが、アメリカや日本でもこれを採用する大学が散見されるようになってきており、また AP 事業テーマⅤ「卒業時における質保証の取組の強化」では、これを採用することが必須の条件ともされている。それらは、大学が学位授与する場合の学位記だけではなく、もう少し詳しく説明する補助的な資料として位置付けていると考えることができる。EU の場合には、国家間に共通する物差しとして機能することが期待されているが、一方アメリカの例では、学生個人のパフォーマンスに力点を置いた見せ方もしている。

本学では、学生に学びの充実感・成就感を実感させるとともに、自身の強みを意識化させ、自己理解・肯定感を高めて社会に接続させるために、この「比治山型ディプロマ・サプリメント」によって、その目的を達成するための最後の仕上げとすることができると考えている。「比治山型ディプロマ・サプリメント」では、

(1) 学科・コース毎にディプロマ・ポリシーから導き出された「比治山型ディプロマ・サプリメント項目」（6～15 項目程度）と、それに紐付く専門教育科目の学修達成度を表示する。
(2) 「４×３の比治山力」四つ葉のクローバーにより、汎用的能力の達成度を表示する。
(3) 取得学位、免許・資格・海外留学・ボランティア経験を表示する。
(4) その他、課外活動、ボランティア、検定試験、受賞・入選歴を表示する。

としている。そこで平成 31・令和元(2019)年度から運用するために策定し直したディプロマ・ポリシーに基づき、各学科・コースごとに「比治山型ディプロマ・サプリメント項目」を検討し、その達成に寄与する専門教育科目を協議・整理するとともに、各「比治山型ディプロマ・サプリメント項目」の達成度を「Hi!way」を活用して可視化するためのデザインを行い、「比治山型ディプロマ・サプリメント」を構築する作業を実施した。

【平成 30(2018)年度】

「比治山型ディプロマ・サプリメント」では、最終的に、次のような項目を表示することにした。

○《「ディプロマ・サプリメント項目の達成度》学科・コース毎にディプロマ・ポリシーから導き出された「ディプロマ・サプリメント項目」（6～15 項目程度）と、それに紐付く専門教育科目の学修達成度(平均 GPA)を表示する。
○《「４×３の比治山力」の達成度》「４×３の比治山力」四つ葉のクローバーにより、汎用的能力の達成度（コア AL 科目の平均 GPA）を表示する。
○《本学在学中の学修及びその他の活動の記録》取得学位、免許・資格・海外留学・ボランティア経験を表示する。
○《自身の責任において記載する事項》学生の自己申告によって、課外活動、ボランティア、検定試験、受賞・入選歴等を表示する。

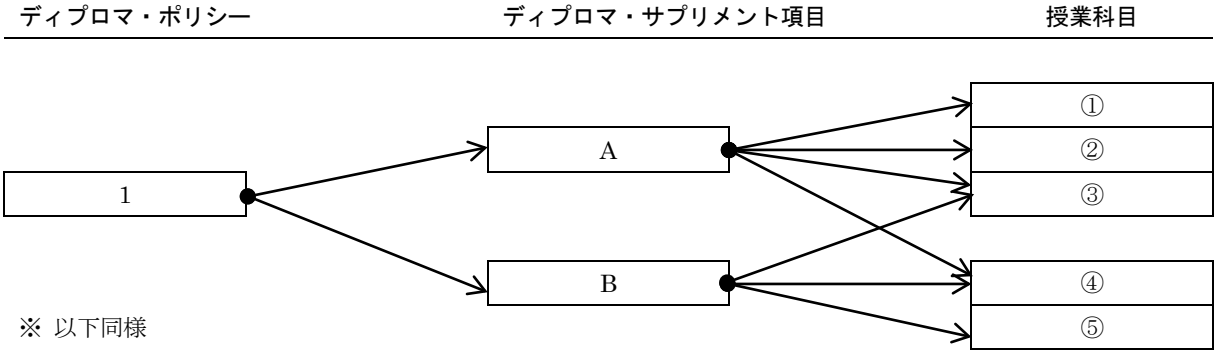
平成 30(2018)年度の作業は次のとおりである。

○ 各学科・コースごとにディプロマ・ポリシーに基づき、より具体的な表現である「ディプロマ・サプリメント項目」を明示し、その達成に寄与する専門教育科目等の紐づけを行った。
○ 各「ディプロマ・サプリメント項目」の達成度のグラフ化を含む上記 4 項目を、本学の学生情報システム「Hi!way」を活用して可視化・帳票化するためにデザイン化し、「比治山型ディプロマ・サプリメント」として構築する作業を進めた。
○「ディプロマ・サプリメント用の入力、出力操作について」という資料を作成し、平成 31・令和元(2019)年 1 月に、本学の各学科・コースの学生によって入力テストを行い、その使用感や改善点を探った。

【平成 31・令和元(2019)年度】

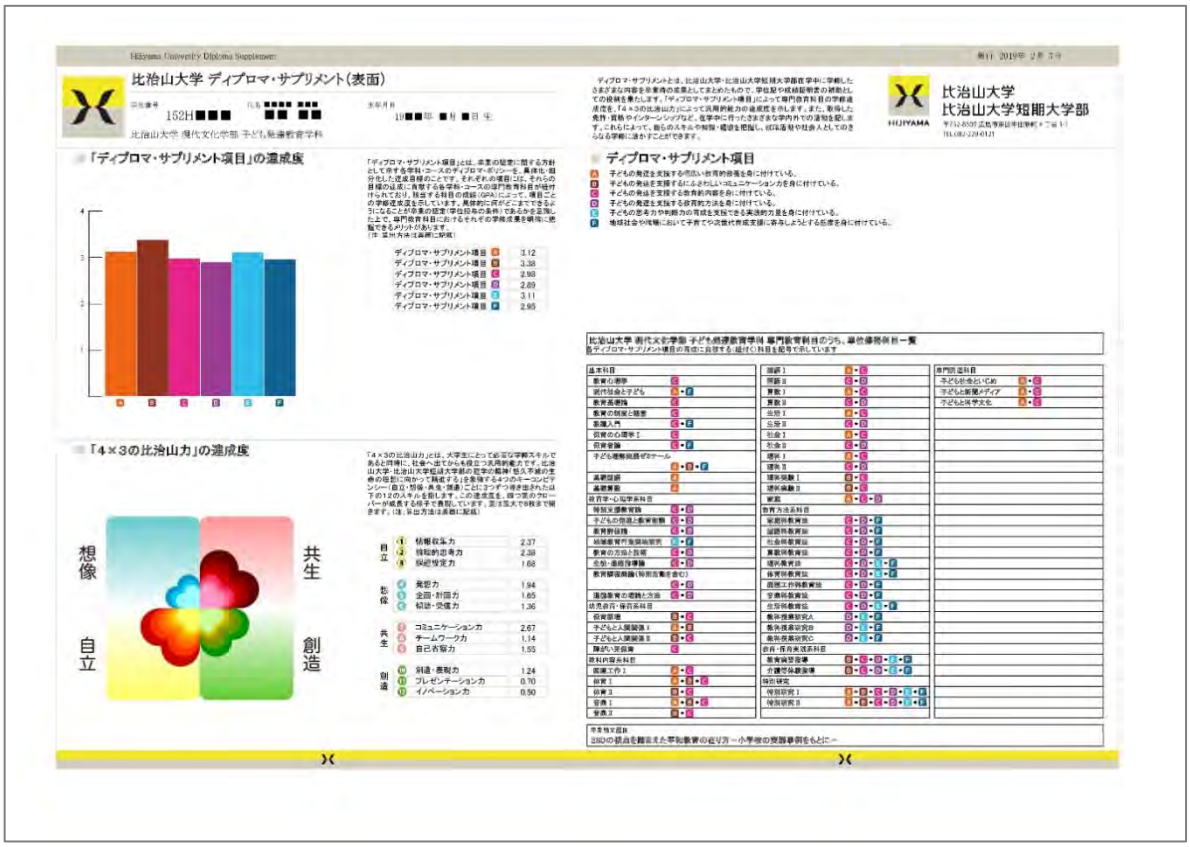
これらの情報をもとにさらに改善し、学内手続きを経て、平成 31・令和元(2019)年度の卒業生に配付する予定である。

《ディプロマ・ポリシー、ディプロマ・サプリメント項目、授業科目の関連(模式図)》



※ 以下同様

《本学が提案するディプロマ・サプリメント(表)》



《本学が提案するディプロマ・サプリメント(裏)》

Hiroyama University Diploma Supplement

比治山大学 ディプロマ・サプリメント(裏面)

152H[redacted] [redacted] 19[redacted]年[redacted]月[redacted]日

比治山大学 現代文化学部 子ども発達教育学科

本学在学中の学修及びその他の活動の記録

総修得単位数 143単位（卒業要件124単位） GPA 3.04（履修登録した全ての科目により算出）

専門教育科目GPA：3.00（単位認定された科目により算出） 共通教育科目GPA：3.30（単位認定された科目により算出）

学校図書館司書教諭 取得見込み、小学校教諭一種免許状 取得見込み

海外留学「Hijiyama Global Studies 海外実習」（インドネシア） 2017年2月10～3月2日

インターンシップ「インターンシップA」（広島市立図書館） 2017年9月1日～9月15日

自身の責任において記載する事項（以下の記載事項は本人の自己申告による）

子ども発達教育学科のカリキュラムにもとづく検定・試験1 発達障害コミュニケーション指導者 初級 取得 平成27年2月
子ども発達教育学科のカリキュラムにもとづく検定・試験2 自然体験活動指導者 取得 平成29年12月
子ども発達教育学科のカリキュラムにもとづく検定・試験3 TOEIC-IP 312点 平成29年12月
子ども発達教育学科のカリキュラムにもとづく検定・試験4 その他 JDSFA認定きっかありょういく 取得 平成29年10月
子ども発達教育学科のカリキュラムにもとづく検定・試験5 その他 普通救命講習 取得 平成29年9月18日

その他特筆すべき事項1 学校支援ボランティア 小学校でのボランティア活動 平成29年3月
その他特筆すべき事項2 ひろしま未来教師セミナー 広島市教育委員会主催の講座に参加。 平成30年2月
その他特筆すべき事項3 インターンシップ 教師力養成するため。 平成30年9月
その他特筆すべき事項4 英語での紙芝居披露 比治山大学付属幼稚園とフレスタ祇川支店での英語の紙芝居の披露
その他特筆すべき事項5 平成27年2月子ども発達教育学科フェロー 下級生への支援 平成29年3月

現代文化学部 子ども発達教育学科

ディプロマポリシー

1 [illegible]
2 [illegible]
3 [illegible]

ディプロマ・サプリメント項目

A 子どもの発達を支援する幅広い教育的教養を身に付けている。
B 子どもの発達を支援するにふさわしいコミュニケーション力を身に付けている。
C 子どもの発達を支援する教育的内容を身に付けている。
D 子どもの発達を支援する教育的方法を身に付けている。
E [illegible]
F [illegible]
（注）[illegible]

ディプロマ・サプリメント項目のポイントの算出方法

本学では、[illegible] GPA(Grade Point Average= 成績平均値) を導入しています。
① [illegible] グレードポイント（GP）は下表のとおりです。

	単位認定				単位不認定
成績	秀	優	良	可	不可または―
GP	4.0	3.0	2.0	1.0	0.0

② [illegible]
③ GPA は、以下の計算式によって算出します。
紐付いた各専門科目の（単位数×GP）の合計 ÷ 紐付いた専門科目の総単位数 （注）[illegible]

「4×3の比治山力」の4つのキーコンピテンシーと12のスキル

自立 [illegible]
想像 [illegible]
共生 [illegible]（7 コミュニケーション力、8 チームワーク力、9 [illegible]）
創造 [illegible]（10 [illegible]、11 プレゼンテーション力、12 イノベーション力）

「4×3の比治山力」12のスキルのポイントの算出方法

紐付いた各コア・アクティブ・ラーニング科目の（単位数×GP×加重値）の合計 ÷ 紐付いた各コア・アクティブ・ラーニング科目の（単位数×加重値）の合計
（注）[illegible]

4つのキーコンピテンシー（自立・想像・共生・創造）のポイントの算出方法

キーコンピテンシーに属する3つのスキルのポイント合計 ÷ 3
（注）[illegible]

コア・アクティブ・ラーニング科目とは？

[illegible]

3-3　評価指標モデルの構築

① 高等教育改革の新たな展開と評価指標モデルのあり方

「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)平成 30(2018)年 11 月 26 日」による「学修の成果を学修者が実感できる教育」の提言により、中央教育審議会大学分科会は「学修者本位の教育の実現」を可能にする教育の質保証のために，全学的な教学マネジメントを重視する必要があるとして，「教学マネジメント指針」(令和 2 年 1 月 22 日)でつぎのような取組を示している。

Ⅰ 「三つの方針」を通じた学修目標の具体化
Ⅱ 授業科目・教育課程の編成・実施
Ⅲ 学修成果・教育成果の把握・可視化
Ⅳ 教学マネジメントを支える基盤
Ⅴ 情報公表

そして、個々の取組が大学・学位プログラム（学科等のカリキュラム)・個別授業科目レベルを有機的に関連付け、有効に機能し、根本的かつ包括的な教育改善につなげることが重要であるとしている。

このように、AP 事業発足当時は、テーマⅠ「アクティブ・ラーニング」に見られるように、アクティブ・ラーニングの充実等、大学教育の質的転換に向けた取組に注目されていたが、今日においては、そのような人材育成に加えて、継続的な自己点検・評価等を通じた教育の質保証を自主的・自律的に行うことが求められている。

ここでは、このような高等教育改革の新たな展開を踏まえ、AP 事業の経験を生かした本学の今後の取組について構想を紹介する。

本学の AP 事業の取組の一つである【「評価指標モデルの構築と学修成果の可視化（テーマⅡ)】の「評価指標モデルの構築」については、教育の質保証を踏まえた、成長過程のデータに基づいた教育評価・指標モデルへと視野を広げて検討している。

② AP 事業の成果を踏まえた質保証の取組～AP 評価指標モデルの構築に代えて

本学は、本学の理念・目的、ミッション、ビジョンの実現に向けて、学部・学科や研究科による三つのポリシーを起点とする教育の質保証について見直しを行い、その基本的な組織体制を【図 1】のように検討中である。

学長のリーダーシップの下に教学マネジメントを確立し、「三つの方針」に基づく体系的で組織的な大学教育を、学位を与える課程（プログラム）共通の考え方や尺度を踏まえた適切な PDCA などによる点検・評価を通じた改善に取り組むこととしている。

また、点検・評価については、つぎのレベルにおいて実施する。

○ 大学全体レベル……学長が主体となり、大学教育における三つの方針について、その妥当性等を検証することを目的とする。
○ 学位プログラムレベル……学部長及び短大部長が主体となり、学部・学科等のディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに対する教育課程について体系性と整合性を測定し、その有効性を検証することを目的とする。
○ 授業科目レベル……授業担当者が主体となり、個々の授業科目について、ディプロマ・ポリシーとの関連を踏まえ、カリキュラム・ポリシーに従い、教育課程全体の中での科目の位置付けに沿った授業実施や、到達目標の設定、到達目標に沿ったシラバス記載内容（授業内容・方法・評価等）の適切性を検証することを目的とする。

これらの評価は下位レベルから上位レベルへ段階的に行い、 下位レベル評価を包括的に活用して上位レベルを評価する。この具体的な例として学位プログラムレベルに注目すると、【図 2】のとおりである。この図では学位プログラムレベルの有効性の検証が大学レベルに実績報告され、さらにその他の必要な検証を踏まえて、大学レベルの有効性が検証される。そして、検証後の改善が指示される。

この学位プログラムレベルの検証には、教学アセスメントとして、つぎの 2 種類の点検・評価がある。

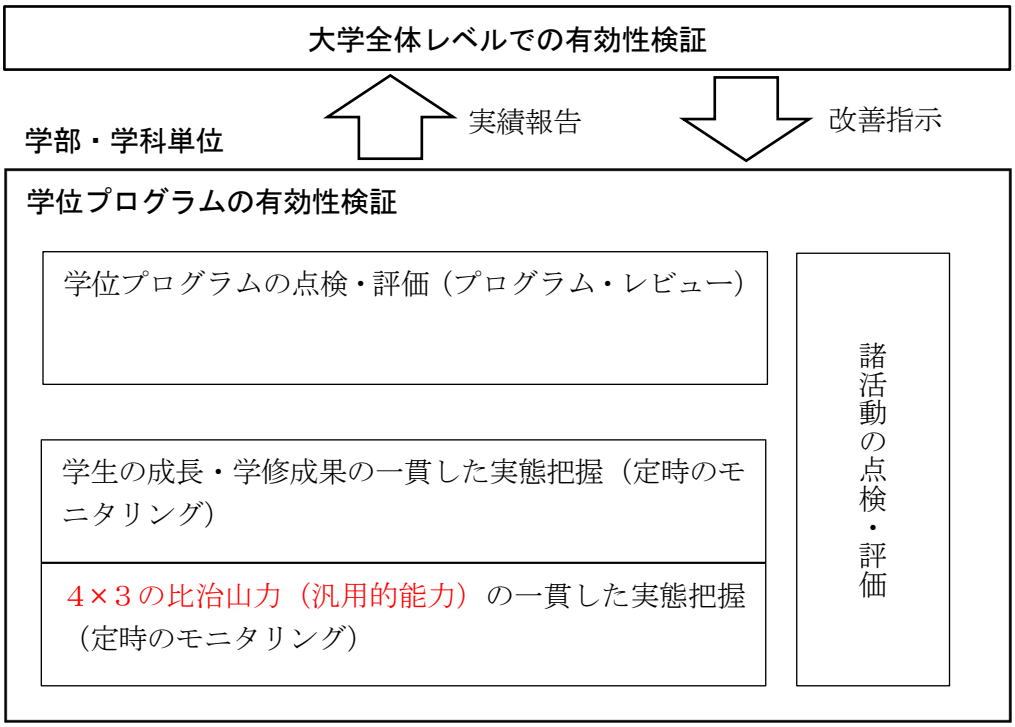
○ 学位プログラムの点検・評価（プログラム・レビュー）では、学位プログラムの 3 つのポリシーに則した点検・評価が行われ、学位プログラムの質の継続的な改善または向上に結びつけるために、できるだけ客観的な根拠に基づいて把握・検証する。本学の案は【図 3】のとおりである。赤字の項目が AP 事業で培ったものであり、特に、ディプロマ・サプリメントについては、ディプロマ・ポリシーを具体化したディプロマ・サプリメント項目と各専門科目の紐付けが利用されている。

○ 学生の成長・学修成果の一貫した実態把握（定時のモニタリング）では、定量的・定性的なデータや情報を定期的かつ体系的に把握・追跡し、継続的に情報共有する。本学の案は【図 4】のとおりである。学生個人の入学時から在学時、卒業時、卒業後と連続した調査を行うことになるが、その中に、赤字で示されるように、「４×３の比治山力」（汎用的能力）の継続的なモニタリングを含めている。

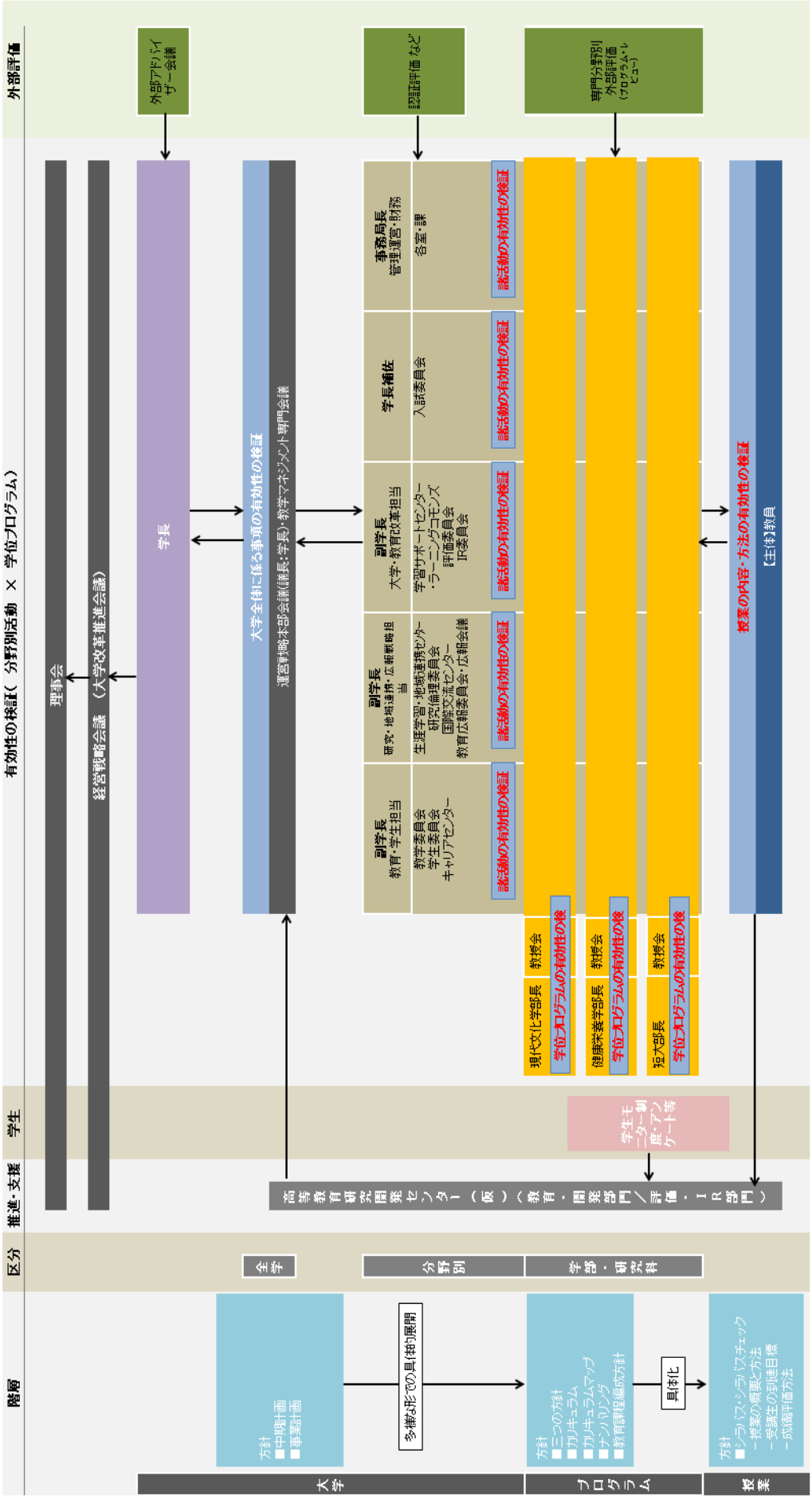
③ 組織体制の変更

以上のような本学における教育の質保証、さらには本学全体の質保証を実現するために、AP 事業の成果を継承・発展させることを含めて、本学の既存の組織（高等教育研究所、学習サポートセンター、評価委員会、IR 委員会）を統合した「高等教育研究開発センター」の設置【図 5】を検討している。

【図 2】質保証をベースとした点検・評価（学位プログラムレベル） （検討中）



【図 1】内部質保証体制図（検討中）



【図3】学位プログラムの点検・評価（プログラム・レビュー）（検討中）

学位プログラム	到達目標	努力指標	学力の3要素	1学内指標							2 客観指標		3 外部指標			
				学科で定めた評価基準							大学生基礎力レポート(ベネッセ等)		成果指標			
	DP(ディプロマポリシー)	ディプロマ・サプリメント項目	(1) (2) (3)	(1)ディプロマ・サプリメント平均 GPA		(2)ルーブリック		(3)その他の指標			指標名	成果	指標名	指定基準値	成果	以降、記述を略す。
				指標基準値	成果	指定基準値	成果	指標名	指標基準値	成果						
A学科	DP1	DS-A														
		DS-B														
		DS-C														
	DP2	DS-D														
		DS-E														
		DS-F														
	DP3	DS-G														
		DS-H														
		DS-I														

※ 赤字の項目は、AP事業で行った課題。

【図4】学生の成長・学修成果の一貫した実態把握（定時のモニタリング）　（検討中）

		新入生アンケート	授業アンケート	在学生実態調査	卒業予定者アンケート	卒業後アンケート	就職先（企業等）アンケート
対象者		大学．短大（1年次）	大学、短大、専攻科、大学院生（全学年）	大学（2～4年次）、短大（2年次）	大学、短大、専攻科、大学院生（卒業・修了年次）	大学、短大（卒業後3年程度）	大学、短大（卒業後3年程度）
実施時期		5月下旬～6月初旬	7月と1月（集中講義は随時）	9月後期オリエンテーション時	1月	11月（予定）	11月（予定）
主な調査内容	対象ポリシー	アドミッション・ポリシー	カリキュラム・ポリシー	カリキュラム・ポリシー	ディプロマ・ポリシー	ディプロマ・ポリシー	ディプロマ・ポリシー
	成長実感（学修成果）	学修への期待	授業実施後の成長実感	学年ごとの成長実感	卒業時の成長実感	振り返りによる成長実感	－
	学修時間／生活時間	高校時・入学時の学修時間／生活時間	授集ごとの学修時間	2～4年次の学修時間／生活時間	－	－	－
	満足度	高校時・入学時の満足度	授集の満足度	2～4年次の満足度	卒業時の満足度度	卒業後の演足度	企業等の満足度
	意欲	高校時・入学時の意欲	授業への意欲	2～4年次の意欲	卒業時の意欲	卒業後の意欲	－
	４×３の比治山力（汎用的能力）	高校時・入学時の比治山力	-	2～4年次の比治山力	卒業時の比治山力	卒業後の比治山力	企業等から見た比治山力

※　４×３の比治山力（汎用的能力）については、到達度の自己評価であり、AP事業で行った課題。

【図 5】高等教育研究開発センター構想（検討中）

比治山大学　高等教育研究開発センター　概要

［比治山大学の内部質保証の強化・充実］

高等教育研究所
所掌
(1) 大学教育に関する基礎的・実践的研究
(2) 教育にかかわる点検評価システムの開発
(3) 教育改善のためのファカルティ・ディベロップメントの開発
(4) 大学教育等に関する情報収集
(5) 高等教育に関する研究論文の公表と研究会の開催
(6) その他研究所の目的達成のために必要な事業

評価委員会
所掌
(1) 第3条第2項の基本方針をもとに、自己評価等に係る業務を統括し、自己点検・評価報告書(この規程において「報告書」という。)案を作成し、本部に提出すること。
(2) 教育研究等の改善を図るため、学生による授業等評価及び教職員研修を企画立案し、実施すること。
(3) その他大学評価に関し、学長が必要と認める事項を処理すること。

IR委員会
所掌
(1) 学生支援に関するデータ収集・分析及び情報提供・助言等
(2) 大学教育に関するデータ収集・分析及び情報提供・助言等
(3) 大学経営に関するデータ収集・分析及び情報提供・助言等
(4) その他、学長が必要と認める事項

学習サポートセンター
所掌
(1) 学生及び保護者に対する学習上の相談、助言及び指導
(2) 資格取得、編入学、大学院進学等に関する相談、助言及び指導
(3) 入学前学生に対する学習上の相談及び助言
(4) リメディアル教育の企画及び実施
(5) チューター、ウェルネスセンター、その他関係機関等との連携
(6) その他センターの目的達成に必要な業務

AP　AL推進室
所掌
(1) アクティブ・ラーニングの推進
(2) 学修成果の可視化

高等教育研究開発センター

HIJIYAMA

設置の趣旨

学園80周年ブランド化事業の一環として設置する高等教育研究開発センターは、本学の内部質保証を支援する中核的機能を担う組織とする。運営戦略本部と緊密に連携しながら、内部質保証の改革エンジンとして位置づける。

具体的には、現行組織のうち左図のとおり、高等教育研究所をはじめとする委員会等業務を見直し統合し、質保証のPDCAのうち、主にCAに関する支援を担当する。

センター長は学長とし高等教育研究所機能を保持し、配下に2つの部門を設置する。部門長には副学長を充て、専任センター員を配置する。

(1)　教育・開発部門
現行の学習サポートセンター及びAP事業で蓄積したアクティブ・ラーニング、リメディアル等の教育方法の開発を中心に担当するとともに、評価・IR部門で得られた課題に対するアクションとしての教育開発を所掌する。

(2)　評価・IR部門
現行の評価委員会、IR委員会の所掌事項を移行し、内部質保証方針に沿った点検、評価を担当する。また、課題を発見し、アクションにつなげるとともに、アクションの妥当性についての検証も担う。

(3)　高等教育研究開発室
センターに関する事務を所掌する新たな室を設置し、専任職員を配置する。

4）事業に関する FD・SD 活動

「比治山型アクティブ・ラーニング」の実践、および学修成果の可視化の実施と効果的な活用のため、全学体制で、また様々な形での日常的な FD・SD 活動を実施した。

4-1　AP セミナー

専門的な知見を有する外部講師等を招聘して、研修会・ワークショップ・セミナー等を原則として年間 2 回開催した。各年度のセミナー内容は次の通りである。

平成 26(2014)年度は、比治山大学高等教育研究所主催、比治山大学「質的転換加速化本部」共催で高等教育研究所第 1 回セミナーとして、11 月 19 日（水）に広島大学の古澤修一氏、隅谷孝洋氏、金井裕美子氏を講師として迎え、「アクティブ・ラーニングと学修ポートフォリオ」を開催した。古澤修一氏は広島大学大学院生物圏科学研究科の教育記録システムとして運用されている「e ラーニングポートフォリオ」について、隅谷孝洋氏は「e ラーニングポートフォリオ」の主な機能について、そして金井裕美子氏は「e ラーニングポートフォリオ」の活用として、「フェニックスリーダー育成プログラム」という分野横断的統合型グローバルリーダー（フェニックスリーダー）の育成を目的とするプログラムへの適用について説明され、本学での学修ポートフォリオの構想に関して大きなヒントを得た。

さらに、AP 第 1 回セミナーとして、3 月 10 日（火）に大阪大学教育学修支援センターの佐藤浩章氏を講師に迎え「アクティブ・ラーニングの基礎知識」を開催した。

「アクティブ・ラーニング」の基本的な考え方についての認識を深め、「教育技法」についての知識を得て、学んだ教育技法やクラスデザイン例を参考にしながら、実際にアクティブ・ラーニングを取り入れた授業計画書を作成し、周囲からフィードバックをもらうワークを行い、授業に活用できるアイディアを生み出し共有した。セミナー後のアンケート回答には、「同じグループディスカッションでも様々な技法があることを学んだので、各講義で少しずつ変化をつけられればと思う」「この授業では無理かなぁという科目でも、少しずつ実際の授業に入れることをチャレンジしてみようと思う」「自分が日々やっていることが何なのかを確認することができた」という意欲的な感想の他に、「学生が参加している授業を参観する授業研究会」や「発展型や応用編と引き続いた研修」、「学生にアクティブ・ラーニングの意義を伝え、主体的に学ぶ意欲を高めるための研修」など、次回へつながるセミナー企画へのアイディアもあった。

AP セミナー「アクティブ・ラーニングの基礎知識」の様子

平成 27(2015)年度は、AP 第 1 回セミナーとして、9 月 9 日（水）に平成 26(2014)年度 AP 第 1 回セミナーに引き続き大阪大学教育学修支援センターの佐藤浩章氏を講師に迎え「アクティブ・ラーニング実践編」を開催した。

本学教員によるアクティブ・ラーニング実践例を材料に、アクティブ・ラーニングを導入する上での課題とその解決方法についてディスカッションし、参加者それぞれの教育実践への応用を図った。セミナー後のアンケート回答には、「深い学びに到達させるためには？」の課題の解決方法として提示された、Deep Learning（深い学び）へと学修者を導く「本質的な問い」の重要性についてのコメントがあった。

AP セミナー「アクティブ・ラーニング実践編」の様子

AP 第 2 回セミナーとして、3 月 3 日（木）に県立広島大学から県立広島大学学長補佐・AP 事業推進部会長の馬本勉氏、県立広島大学 AP 事業推進部会の五條小枝子氏を講師に迎え、「アクティブ・ラーニングの取組と課題―広島地区 AP 採択校　県立広島大学と比治山大学の実践―」を開催した。

アクティブ・ラーニングの効果・必要性の再確認や、導入にあたっての具体的手法、実践上の課題やその対応策などについて共有した。パネルディスカッションでは、本学 AP ワーキンググループのメンバーがコーディネーターを務め討議を行った。時間の都合上、「アクティブ・ラーニング実践をどう評価と結びつけるか」という点に絞った進行により、それぞれの取組の目的に照らしたルーブリックの開発や、学生のパフォーマンスを細かく採点する手法などがパネリストから紹介された。

AP セミナー「アクティブ・ラーニングの取組と課題」の様子

平成 28(2016)年度は、AP 第 1 回セミナーとして、9 月 7 日（水）に年次教育学会会長、日本協同教育学会理事（初代会長）の久留米大学の安永悟氏を講師に迎え、「協同学習による授業づくり―アクティブ・ラーニングを中心に―」を開催した。

学び合える場づくりの基本やアクティブ・ラーニングの定義、協同学習の精神や理論などを解説され、実際に「ラウンド・ロビン」などの技法を用いて参加者が 4 名 1 グループを編成し、「協同学習」を体感しながら学び合いの場づくりの基本について理解を深め、より実践的な授業に活用できるアイディアを生み出し共有した。

セミナー後のアンケート回答には、学び合える場づくりで話し合いの基本となる「傾聴」と「ミラーリング」を授業だけではなく日頃からも心がけたいというコメントや、協同学習から授業運営のヒントをたくさん得ることができた、自分の授業にも早速取り入れたい、「脳にスイッチを入れる」「脳をきもちよく回転させる」というアクティブ・ラーニングの実践的な定義によって、よりアクティブ・ラーニングの理解が深まった、などのコメントがあった。

AP セミナー「協同学習による授業づくり」の様子

AP 第 2 回セミナーとして、3 月 7 日（火）に多数の大学での教育経験を有し、コミュニケーションをテーマとした著作も多い劇作家・演出家の平田オリザ氏を講師に迎え「アクティブ・ラーニングに取り組むために―コミュニケーション能力を引き出す―」を開催した。

前半はアクティブ・ラーニングの手法を用いたワークショップ、後半はワークショップの内容を振り返りながらの講演という構成であった。ワークショップでは、アイスブレイクの実践例に続いて、コミュニケーションを図る上で相手の言葉がどのような「つもり」で発せられているのかを認識することの重要性を実感できるプログラムなど、授業で活用できるさまざまな手法が提示された。講演は、異文化理解能力・合意形成能力が求められる現代において、普遍的な「コミュニケーション能力」など存在せず、生徒・学生が身に付けるべきは他者と共有できる部分を見つけて広げていく社交性であることなどが示された。

セミナー後のアンケート回答には、「ワークショップで実際に活動を通して話を聞くことによって、見ている側も実感をもって聞き入ることができた」「実践と、そこから得られた知見を裏づける理論的な話とのバランスが取れていて、非常に刺激的だった」「イメージの共有、多様性の理解、授業へのモチベーションを高めるためのアクティブ・ラーニングだということを学んだ」「演劇の観点から、コミュニケーション能力とは何か、どのようにそれが社会で求められているかを学ぶことができた」などのコメントがあった。

AP セミナー「アクティブ・ラーニングに取り組むために」の様子

平成 29(2017)年度は、AP 第 1 回セミナーとして、9 月 8 日（金）に関西大学の森 朋子氏を講師に迎え「アクティブ・ラーニングの効果検証」を開催した。

AL 型授業の中でも習得型の授業(知識の定着に主眼を置く授業)における AL に焦点があてられ、深い学びにつながる、より効果的な授業展開への示唆を得るとともに、「なぜ AL が必要なのか」という点の解説により、理論に基づいた AL の意義を再認識した。また、学習者の深い学びを促すには予習が大きな意味を持つということ、そして「わかる」という経験の積み重ねが必要であることが示された。

セミナー後のアンケート回答には、「小さな『わかった』を積み上げることが大事だと理解した」「変わりゆく学力観、次々と提示される能力について、これまで言葉だけの理解でどうも腑に落ちなかったのが、今回の先生のご説明で整理が少しつきました」などのコメントがあった。

平成26年度文部科学省採択事業「大学教育再生加速プログラム(AP)」
比治山大学・比治山大学短期大学部　平成29年度AP第1回セミナー（教職員合同研修）

アクティブ・ラーニングの効果検証

平成26 年度に本学が文部科学省大学教育再生加速プログラム採択を受けて以来，比治山型アクティブ・ラーニングの構築及び実践に始まり，学内情報システムを利用した学修成果の可視化に取り組んで参りました。主体的な学びを促進するアクティブ・ラーニングは，学生の学びにどのような効果をもたらしたのでしょうか。その学修効果を評価するためには，評価システムを構築する必要があります。今回は，自身もアクティブ・ラーニングによる教授法の効果研究を実施されている森　朋子氏を講師としてお招きし，氏のご研究・教育活動をご報告いただきます。ご講演を通じて，本学での教育評価システム開発への示唆を得ることを始め，各講義科目における学習到達度の評価方法や評価を授業に還元する手法を学びます。

講師：森　朋子先生
（関西大学　教授）

日時：平成29年 9 月 8 日（金）
14:00－15:30（受付開始13:30）

会場：比治山大学
6号館1階（06106教室）

参加費：無料
申し込み：平成29年9月1日（金）までに，以下の事項をご明記の上，電子メールにてお申込みください。（当日受付可）
宛先：apollo@hijiyama-u.ac.jp（比治山大学AL推進室）
件名：「(2017.9.8)H29年度AP第1回セミナー申込」
本文：①お名前，②ご所属，③ご職位，④メールアドレス

森　朋子
ケルン大学哲学部Magister課程修了後，大阪大学大学院言語文化研究科で博士（言語文化学）取得，慶應義塾大学外国語教育研究センター・研究員，島根大学教育開発センター・准教授を経て，現職（関西大学教育推進部・教授）。専門は，学習研究・学習科学・教育方法学。大学教育再生加速プログラム委員会委員や神戸大学での外部評価委員を歴任。

主催：比治山大学・比治山大学短期大学部 質的転換加速化本部
共催：比治山大学・比治山大学短期大学部 高等教育研究所，比治山大学・比治山大学短期大学部 生涯学習・地域連携センター
比治山大学・比治山大学短期大学部 評価委員会，一般社団法人 教育ネットワーク中国
後援：広島県教育委員会，広島市教育委員会

比治山大学
比治山大学短期大学部
〒732-8509 広島市東区牛田新町4丁目1-1；TEL 082-229-0121（代表）
アクセス：比治山大学WEBサイトをご覧ください
https://www.hijiyama-u.ac.jp/access.html

AP セミナー「アクティブ・ラーニングの効果検証」の様子

AP 第 2 回セミナーとして、3 月 5 日（月）に創価大学の関田一彦氏を講師に迎え、「ルーブリックの効果的な活用方法」を開催した。ルーブリックは学生の成長を可視化することにも利用でき、学生自身が大学で何を学んだのか、どう成長したのか言語化するためのツールにもなり得ることや、教員と学生とで、ルーブリックを共有したり、目的に応じてルーブリックを使い分けたりすることで、その有用性も高まることがわかった。そして、創価大学の取組も交えての講演により、本学の教育評価システム開発への示唆を得ることをはじめ、各講義科目における学習到達度の評価方法や評価を授業に還元する手法を学んだ。

セミナー後のアンケート回答には、「ルーブリックにも多様性があることをはじめて知った」「評価や点数をつけたり、気付きを共有したりと目的を意識してルーブリックを設定することが大事だと思った」などのコメントがあった。

平成26年度文部科学省採択事業「大学教育再生加速プログラム（AP）」

比治山大学・比治山大学短期大学部
平成29年度AP第2回セミナー（教職員合同研修）

大学教育再生加速プログラム

ルーブリックの効果的な活用方法

平成26 年度に本学が文部科学省大学教育再生加速プログラム採択を受けて以来、比治山型アクティブ・ラーニングの構築及び実践に始まり、学内情報システムを利用した学修成果の可視化に取り組んで参りました。主体的な学びを促進するアクティブ・ラーニングは、学生の学びにどのような効果をもたらしたのでしょうか。その学修効果を評価するためには、評価システムを構築する必要があります。今回は、ご自身もルーブリックによる教授法の効果研究を実施されている関田一彦氏を講師としてお招きし、氏のご研究・教育活動をご報告いただきます。ご講演を通じて、本学での教育評価システム開発への示唆を得ることを始め、各講義科目における学習到達度の評価方法や評価を授業に還元する手法を学びます。

講 師：関田（せきた） 一彦（かずひこ）先生
（創価大学 教授）

日 時：平成30年 3月 5日（月）
15:00－16:15
（受付開始 14:30）

会 場：比治山大学
6号館1階（06106教室）

参加費：無料

関田 一彦

創価大学教育学部教授。ウィスコンシン大学ホワイトウォーター校で教育学修士（M.Ed）課程 修了後、イリノイ大学で教育学博士（Ph.D.）を取得。ミネソタ大学協同学習センター客員研究者。クイーンズランド大学教育学部客員研究者を経験。専門は教育心理学・教育方法。創価大学総合学習支援センター長、初年次教育推進室長、IR室副室長等を兼務。日本協同教育学会前会長、日本初年次教育学会理事。

お申し込み：平成30年2月26日（月）までに以下の事項をご明記の上、電子メールにてお申込みください。（当日受付可）
宛先：apollo@hijiyama-u.ac.jp（比治山大学AL推進室）
件名：「（2018.3.5）H29年度AP第2回セミナー申込」/ 本文：①お名前、②ご所属、③ご職位、④メールアドレス

主催：比治山大学・比治山大学短期大学部 質的転換加速化本部
共催：比治山大学・比治山大学短期大学部 高等教育研究所、比治山大学・比治山大学短期大学部 生涯学習・地域連携センター、比治山大学・比治山大学短期大学部 評価委員会、一般社団法人 教育ネットワーク中国
後援：広島県教育委員会、広島市教育委員会

比治山大学
比治山大学短期大学部
HIJIYAMA

〒732-8509 広島市東区牛田新町4丁目1-1 TEL 082-229-0121（代表）
アクセス：比治山大学WEBサイトをご覧ください。
https://www.hijiyama-u.ac.jp/access.html

AP セミナー「ルーブリックの効果的な活用方法」の様子

平成 30(2018)年度は、 AP 第 1 回セミナーとして、9 月 12 日（水）に追手門学院大学のアサーティブ研究センターセンター長　池田輝政氏を講師に迎え、「高大接続型入学システムの戦略設計」―学びのモチベーション力からみる追手門学院大学の事例― を開催した。

高大接続改革、とりわけ学力の 3 要素を多面的に評価する大学入学者選抜改革が進められる中、本学においても、比治山型アクティブ・ラーニングの構築および実践、学内情報システムを活用した学修成果の可視化に取り組みつつ、入学者選抜改善に向けた検討を行っているが、平成 29(2017)年度の大学教育再生加速プログラム（AP）中間評価では最も高い「S 評価」を受けた追手門学院大学の「アサーティブプログラム」「アサーティブ入試」に関する取組より、「学びのモチベーション」の観点からの講演であった。

セミナー後のアンケート回答には、「理論と経験に裏付けられたプログラムの話であったため、納得することができた」「志願者選抜の概念にこり固まってしまっていたが、志願者育成という概念をお示しいただいたところが最も印象的だった」「入学から卒業までの学生のモチベーションやビジョンを育てていく必要を感じた」などのコメントがあった。

AP セミナー「高大接続型入学システムの戦略設計」の様子

AP 第 2 回セミナーとして、3 月 1 日（金）に本学と同じテーマⅠ・Ⅱ複合型の幹事校である京都光華女子大学短期大学部の小山理子氏を講師に迎え、「アクティブ・ラーニングと学修成果の可視化がもたらしたものとは？」 ―AP テーマⅠ・Ⅱ複合型選定校京都光華女子大学短期大学部の取り組みから― を開催した。

平成26年度文部科学省採択事業「大学教育再生加速プログラム（AP）」
比治山大学・比治山大学短期大学部 平成30年度 AP第2回セミナー
比治山大学・比治山大学短期大学部 教職員合同研修

大学教育再生加速プログラム

アクティブ・ラーニングと学修成果の可視化がもたらしたものとは？

～APテーマⅠ・Ⅱ複合型選定校　京都光華女子大学短期大学部の取り組みから～

平成26年度に、テーマⅠ「アクティブ・ラーニング」・テーマⅡ「学修成果の可視化」複合型として大学教育再生加速プログラム（AP）に選定されてから、5年が経過しようとしています。本学では、比治山型アクティブ・ラーニングの構築と実践、学生情報システムを利活用した学修成果の可視化に取り組むとともに、全国的に進められている各大学等のセミナー・シンポジウムに参加して参考となる情報を集め、学内で共有してきました。

今回は、本学と同じテーマⅠ・Ⅱ複合型の幹事校である京都光華女子大学短期大学部から小山理子氏を講師としてお招きし、先進的に進めてこられた取組のねらい・工夫についてご報告いただきます。平成31年度の補助事業期間終了を見据え、AP事業として進めてきたこれまでの取組の成果と課題を客観視し、今後の方向性を定めていくことを目的とします。

これらを通して「アクティブ・ラーニング」と「学修成果の可視化」がもたらしたものとは何かについて、改めて問い直したいと思います。興味・関心のある教育関係者の皆様のご参加をお待ちしています。

講　師：小山（こやま）　理子（あやこ）　先生
（京都光華女子大学短期大学部 准教授）

日　時：平成31年 3月1日（金）
10:00 ～ 11:30（受付開始 9:30）

会　場：比治山大学 6号館1階(06106教室)

アクセス：比治山大学 WEBサイトをご覧ください
https://www.hijiyama-u.ac.jp/access.html

参加費：無料

小山　理子
京都光華女子大学短期大学部ライフデザイン学科 准教授
修士（政策科学）同志社大学，博士（教育学）京都大学
2003年3月　同志社大学大学院 総合政策科学研究科 博士（前期）課程
2018年3月　京都大学大学院 教育学研究科 博士後期課程
アクティブ・ラーニングを実践し、これに関する論文・著書・講演・AP関連セミナー発表など多数。

平成31年2月22日（金）までに以下の事項をご明記のうえ電子メールにてお申し込みください。当日受付可。
宛　先：apollo@hijiyama-u.ac.jp
件　名：「H30年度AP第2回セミナー申込」
本　文：①氏名　②所属　③職位　④メールアドレス

主催：比治山大学・比治山大学短期大学部 質的転換加速化本部
共催：比治山大学・比治山大学短期大学部 高等教育研究所
比治山大学・比治山大学短期大学部 生涯学習・地域連携センター
比治山大学・比治山大学短期大学部 評価委員会
一般社団法人 教育ネットワーク中国
後援：広島県教育委員会、広島市教育委員会

比治山大学
比治山大学短期大学部
〒732-8509　広島県広島市東区牛田新町4-1-1
TEL 082-229-0121（代表）

京都光華女子大学短期大学部 平成31年度 AP第2回セミナー

京都光華女子大学短期大学部の小山理子氏を講師に迎え、「アクティブ・ラーニングと学修成果の可視化がもたらしたものとは？」 ―AP テーマⅠ・Ⅱ複合型選定校京都光華女子大学短期大学部の取り組みから― を開催した。

京都光華女子大学短期大学部では、アクティブ・ラーニングを活性化するために、汎用的な能力等を測定する外部プログラムを取り入れ、判明した学生の特徴から方針を作成し、他分野へ展開したり、学生提案型授業を取り入れたりしている。 また、ディプロマ・ポリシーを核とした総合的評価提示システムを開発して「何がどれだけできるようになったのか」学生がわかりやすく把握できるようになることを柱として、外部プログラムを導入して客観性を担保しながら、卒業生インタビューと企業インタビューを導入するロングレンジで学修成果を可視化し、評価基準や評価手法の改革・教育改革へ反映させている。さらに、学生の主体的な学びへ活用する方法を構築するために、これまでの取組の中から見えてきた課題から更なる展開や評価の拡大を続けているということであった。京都光華女子大学短期大学部の取組を通して「アクティブ・ラーニング」と「学修成果の可視化」がもたらしたものとは何かについて改めて問い直し、今後の方向性を定めていくための多くの示唆を得た。

セミナー後のアンケート回答には、「目標と課題を意識しながら教員と学生が授業に取り組んでいく意義を再確認させられた」「学生の主体的な学びをその先につなげるための取組が具体的で参考になった」「客観的な分析、実態に基づいたアクティブ・ラーニングとその可視化が重要であることを改めて感じた」などのコメントがあった。

AP セミナー「アクティブ・ラーニングと学修成果の可視化がもたらしたものとは？」の様子

令和元(2019)年度は、AP 第 1 回セミナーとして、9 月 4 日（水）に敬愛大学英語教育開発センター長　国際学部国際学科　向後秀明氏を講師に迎え「高大接続改革で求められる学校の対応－試される教員の本気度（英語を例として）」を開催した。

平成26年度文部科学省採択事業「大学教育再生加速プログラム(AP)」
比治山大学・比治山大学短期大学部 令和元年度 AP第1回セミナー
比治山大学・比治山大学短期大学部 教職員合同研修

高大接続改革で求められる学校の対応

試される教員の本気度（英語を例として）

高等学校教育、大学教育、そして大学入学者選抜が一体となって行われる高大接続改革の中、この度の改革の柱の一つとなっている、入学後の大学教育へ円滑につなげていく入学前教育の充実が急務となっています。今後ますます高等学校と大学が協力して、大学入学後の学修に対する準備を講ずることが求められていきます。今回のAPセミナーでは、向後秀明氏をお招きし、高大接続（大学教育の改革を含む）、入試改革、学習指導要領改訂というキーワードで、高等学校での学びと大学での学びをどうつなげていくか、英語を例にとりご講演いただきます。これまでの高等学校教諭、指導主事、文部科学省での教科調査官、学習指導要領改訂への従事というご経験から、今後の改革に向けた示唆を得ることを目的としています。興味・関心のある教育関係者の皆様のご参加をお待ちしています。

講　師：向後（こうご）　秀明（ひであき）　先生
敬愛大学 英語教育開発センター長
国際学部 国際学科 教授

日　時：令和元年　9月4日（水）
14:30 ～ 16:00（受付開始 14:00）

会　場：比治山大学　6号館1階（06106教室）

アクセス：比治山大学 WEBサイトをご覧ください
https://www.hijiyama-u.ac.jp/access.html

参加費：無料

向後　秀明　先生

昭和61年4月～平成20年3月：千葉県公立高等学校3校で勤務。
※平成11～19年度、千葉県立千葉女子高等学校で主任（スーパーイングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール）研究主任。
平成20年4月～平成22年3月：千葉県教育庁教育振興部指導課指導主事。
平成22年4月～平成29年3月：文部科学省初等中等教育局教育課程課・国際教育課外国語教育推進室教科調査官、国立教育政策研究所教育課程研究センター・教育課程調査官。
平成29年4月～現在：敬愛大学国際学部国際学科教授。
平成30年4月～現在：敬愛大学英語教育開発センター長を併任。

令和元年8月28日（水）までに以下の事項をご明記のうえ電子メールにてお申し込みください。当日受付可。
宛　先：apollo@hijiyama-u.ac.jp
件　名：「R1年度AP第1回セミナー申込」
本　文：①氏名　②所属　③職位　④メールアドレス

主催：比治山大学・比治山大学短期大学部 質的転換加速化本部
共催：比治山大学・比治山大学短期大学部 高等教育研究所
比治山大学・比治山大学短期大学部 生涯学習・地域連携センター
比治山大学・比治山大学短期大学部 評価委員会
一般社団法人 教育ネットワーク中国
後援：広島県教育委員会、広島市教育委員会

HIJIYAMA
比治山大学
比治山大学短期大学部
〒732-8509　広島県広島市東区牛田新町4-1-1
TEL 082-229-0121（代表）

高大接続改革で求められる学校の対応ポスター

高校までで何が行われ、何が課題なのか、一方、高校教員は高校と大学における違い、大学でやってもらえることを、お互いに見合っていかなければならない、さらに、大学は小中高校に授業を公開するなど、オープンにするべきである。高等学校での学びを大学につなげる条件として、①基本的な知識・技能に課題がみられる場合でも知識詰込み型授業にせず、学びへの興味・関心を喚起して深い学びにつなげられるような授業を組む②理解可能かつできるだけ具体的に授業の狙いと目標を学生に提示する③学生に考えさせる"頭を揺さぶる"発問をする④メインテキストだけに頼らず副教材やリサーチといった多様な教材を活用し、学生同士の間で"Information GAP"がある状態にして情報をやり取りする⑤「対話的な学び」を可能にするために、教員は学生と人間的な信頼関係を築き、ペアやグループ活動においてできるだけ異なる相手と協同する気持ちや力を育てる⑥学習の起点を授業にして、家庭学習（予習・復習）にリンクさせる⑦「パフォーマンス評価」「ルーブリック」「ポートフォリオ評価」といった信頼性・妥当性のある評価をさらに進めていく、ことがある。そして、高校・大学では、学校以外でも学生が日常的に学習を継続するようモチベーションを向上させる責務があり、社会で起こっていることを敏感に感じ取って、それに耐えリスクに立ち向かって元気に生きていく"力強い自律型学習者"を育成していく必要がある、など、英語以外の授業においても応用できる多くの気づきを得た。

セミナー後のアンケート回答には、「中等教育における英語教育の現状から、それを受けて高等教育で必要な教育について考えることができた」「中・高生を迎え入れる立場として、早急に教育改革を加速させる必要があると感じた」などのコメントがあった。

AP セミナー「高大接続改革で求められる学校の対応」の様子

4-2　FDer 養成研修会

「比治山型アクティブ・ラーニング」の全学実施と、運営に関わる FD の充実策として、各学部・学科・コースの教学委員各 1 名を FDer に任命し、授業公開やレッスンスタディ、関連フォーラム・セミナーへの参加や先進モデル校視察、成績評価の厳格化・平準化など、日常的な FD 活動の推進を図る役割を付した。

平成 27(2015)年度は、月 1 回開催される AP アクティブ・ラーニング部会において、各学科・コースの初年次教育、専門科目、卒業論文発表会などで取り組んだアクティブ・ラーニングの実践例、学修成果の可視化を目指した「Hi!way」システムへの入力の学生に対する働きかけの事例などを紹介し、それについての討議を行うことで、全学的な情報の共有化を図った。

平成 28(2016)年度からは、教学委員会各専門委員長および大学・短期大学部の各学科・コースの教学委員各 1 名を FDer に任命し、月 1 回開催される AP アクティブ・ラーニング／可視化部会において FDer 養成研修会を行った。

各年度の FDer 養成研修会は、平成 27(2015)年度 6 回、8 テーマ、平成 28(2016)年度 7 回、10 テーマ、平成 29(2017)年度 9 回、9 テーマ、平成 30(2018)年度 5 回、5 テーマ、平成 31・令和元(2019)年度 2 回、2 テーマであった。

《FDer 養成研修会　実施一覧》参照

4-3　レッスンスタディ

各学科・コースにおいて、各学科・コースにそれぞれ任命された FDer が中心となってレッスンスタディを実施した。これは、各学科・コースを単位として、授業その他の取組を参観・共有した上で、その取組の効果・改善点などについて協議を行うことで、FD 活動の推進を図った。各年度のレッスンスタディ授業数は、平成 27(2015)年度 9 授業、平成 28(2016)年度 9 授業、平成 29(2017)年度 11 授業、平成 30(2018)年度 8 授業、平成 31・令和元(2019)年度 7 授業である。

《レッスンスタディ　実施一覧》参照

4-4　他大学への視察及びセミナー・シンポジウムへの参加

平成 26(2014)年度は、アクティブ・ラーニング及び学修成果の可視化に関する先進的な事例の実地調査を行った。他大学の先進的な事例を学ぶことを通して、本学の現状の課題分析を行うとともに、先進事例のノウハウを本学の特性に合わせた授業モデルとして取り入れ、より本学に適合した「比治山型アクティブ・ラーニング」の構築・実践に生かした。

平成 27(2015)年度からは、アクティブ・ラーニング授業モデルの構築と、学修成果の可視化の促進のため、関連テーマを取り上げるフォーラムやセミナーに関する情報を学内全教職員に対して提供・周知した上で、関連フォーラム・セミナーへの参加や、先進モデル校の視察を行った。得られた知見は、参加者から提出された「示唆報告書」としてまとめ、全学的に共有する。また、学科・コース単位で実施するレッスンスタディの際の参考として活用した。

各年度の他大学への視察数及びセミナー・シンポジウムへの年間参加数は、平成 26(2014)年度 12 回、平成 27(2015)年度 12 回、平成 28(2016)年度 16 回、平成 29(2017)年度 18 回、平成 30(2018)年度 23 回、平成 31・令和元(2019)年度 19 回、6 年間では 100 回であった。

《他大学への視察及びセミナー・シンポジウムへの参加状況》参照

4-5　情報の学内向け周知、理解の促進

本事業に関する情報の学内向け周知、理解の促進、検証したデータのフィードバック、年間活動報告等については次の通りである。

平成 26(2014)年度から平成 31・令和元(2019)年度までは、学内向け資料を作成・配付するなどして、本学評価委員会と連携して、月 1 回開催される運営戦略本部会議および各学部教授会や、教職員合同研修会（9 月と 3 月の年 2 回開催）において、本事業の進捗状況や新しい取組について説明した。

平成 28(2016)年度より、日常的な FD・SD として活用するため授業の録画を行い、検証材料とした。さらに、平成 28(2016)年度より、本学学生情報システム「Hi!way」に構築された e-learning システム「Hi!space」（LMS）の機能により、研究室および学内外からログインした PC により授業映像コンテンツを視聴できるようにした。

平成 29(2017)年度からは、さらに入学式直後に新入生および保護者に対して「比治山型アクティブ・ラーニング」と学修成果の可視化を中心とした本学の教育に関する取組の紹介を行った。また、新任教職員研修会・兼任講師連絡会（非常勤講師対象）やスタートアッププログラム（AO 入試合格者対象）においても、AP 事業に関する取組についての説明を行った。

事業に関する FD・SD 活動

FD・SD 活動を行った回数（平成 26(2014)年度から平成 31・令和元(2019)年度）

	平成26 (2014)年度	平成27 (2015)年度	平成28 (2016)年度	平成29 (2017)年度	平成30 (2018)年度	平成31・ 令和元 (2019)年度	計
APセミナー（比治山大学高等教育研究所主催、比治山大学質的転換加速化本部共催セミナー含む）	2	2	2	2	2	1	11
FDer養成研修会	－	6	7	9	5	2	29
レッスンスタディ実施授業	－	9	9	11	8	7	44
他大学への視察及びセミナー・シンポジウムへの参加状況	12	12	16	18	23	19	100
教員研修会	3	2	2	2	2	2*	13*

*令和 2(2020)年 3 月開催予定を含める

《FDer 養成研修会　実施一覧》

平成 27(2015)年度

開催日	担当者		テーマ
6月8日	美術科	斉藤	ヒロシマ平和ポスター学生コンペティション
7月27日	言語文化学科	山崎	日本文学入門
		佐々木	英語リテラシー
8月31日	総合生活デザイン学科	森田	初年次セミナー
10月19日	マスコミュニケーション学科	山本	「Hi!check」と「Hi!step」の活用状況の実践紹介
	子ども発達教育学科	鹿江	
	幼児教育科	久保田	
11月30日	社会臨床心理学科	谷渕	卒業論文中間発表会

平成 28(2016)年度

開催日	担当者		テーマ
5月23日	子ども発達教育学科	鹿江	子ども発達教育学科のルーブリック活用実態について
7月4日	LMS運用準備部会	鹿江	iPadの活用について
8月1日	美術科	斉藤	美術科の初年次セミナーの取組について
10月31日	社会臨床心理学科	塚脇	社会心理学の実践例について
11 月 28 日	言語文化学科 社会臨床心理学科 子ども発達教育学科 美術科	安間 塚脇 鹿江 斉藤	各学科の初年次セミナーの取組について①
12 月 19 日	マスコミュニケーション学科 管理栄養学科 幼児教育科 総合生活デザイン学科	山本 沖本 馬杉 森田	各学科の初年次セミナーの取組について②
2 月 27 日	APWG	斉藤 鹿江 寺田	AL 実践事例集について 「Hi!space」(LMS)及び録画機器について 「Hi!check」、「Hi!step」入力状況について 授業アンケート集計結果報告について

平成 29(2017)年度

開催日	担当者		テーマ
4 月 24 日	APWG	佐々木	FDer の役割について
5 月 29 日	APWG	佐々木	平成 29(2017)年度コア AL 科目一覧表について
8 月 31 日	美術科	斉藤	公立はこだて未来大学視察の報告
9 月 25 日	言語文化学科	佐々木	初年次教育学会ワークショップの報告
10 月 30 日	APWG	佐々木	「4×3の比治山力」ルーブリックについて
11 月 27 日	APWG	斉藤	「比治山型ディプロマ・サプリメント」について①
12 月 25 日	APWG	斉藤	「比治山型ディプロマ・サプリメント」について②
1 月 29 日	APWG	斉藤	「比治山型ディプロマ・サプリメント」について③
2 月 26 日	APWG	斉藤	「比治山型ディプロマ・サプリメント項目」の設定について

平成 30(2018)年度

開催日	担当者		テーマ
10月29日	APWG	斉藤 山崎	大学教育再生加速プログラム(AP)選定校合同FD・SDワークショップ」(「チームAP合宿」)の報告
11月26日	APWG	斉藤	広島市立大学での本学アクティブ・ラーニングの実施事例講演の報告について
12月24日	APWG	斉藤	四国学院大学の視察についての示唆報告
1月28日	子ども発達教育学科	森川	子ども発達教育学科の取組について (学科研修会、教育の方法と技術等)
	総合生活デザイン学科	森田	総合生活デザイン学科の取組について (総合生活デザイン演習Ⅰ)

平成 31・令和元(2019)年度

開催日	担当者		テーマ
5月27日	APWG	佐々木	「4×3の比治山力」ルーブリックの活用について
11月25日	APWG	斉藤	テーマⅠ・Ⅱ複合型採択校合同シンポジウムの報告について

《レッスンスタディ　実施一覧》

平成 27(2015)年度

実施日	学科	授業科目
10月20日	総合生活デザイン学科	総合生活デザイン演習Ⅰ
10月22日	幼児教育科	総合演習
11月18日	管理栄養学科	初年次セミナーⅡ
11月19日、12月10日	マスコミュニケーション学科	初年次セミナーⅡ
11月26日	社会臨床心理学科	特別研究Ⅱ
12月25日	美術科	グラフィックデザインコース 実技授業全般
1月18日、2月4日	子ども発達教育学科	理科Ⅱ
2月9日	言語文化学科 日本語文化コース	日本文学の歴史Ⅰ
2月25日	言語文化学科 国際コミュニケーションコース	言語文化学科公開セミナー

平成 28(2016)年度

実施日	学科	授業科目
10月	幼児教育科	総合演習
11月4日	言語文化学科 国際コミュニケーションコース	Computer Mediated CommunicationⅡ
11月9日	管理栄養学科	初年次セミナーⅡ
11月14日	美術科	造形表現・造形演習Ⅰ・デザイン
12月8日、12月22日	マスコミュニケーション学科	初年次セミナーⅡ
12月16日、2月2日	子ども発達教育学科	子どもと環境Ⅱ
1月10日	総合生活デザイン学科	総合生活デザイン演習Ⅰ
1月23日	社会臨床心理学科	特別研究Ⅱ
3月	言語文化学科 日本語文化コース	特別研究Ⅰ

平成 29(2017)年度

実施日	学科	授業科目
5月16日	美術科	特別講義
7月18日 1月23日	言語文化学科 国際コミュニケーションコース	基礎ゼミナールⅠ 英語学概論 Critical Thinking and Discussion 異文化理解実践研究
7月19日	幼児教育科	保育内容(音楽表現Ⅰ)
11月～3月(計5回)	子ども発達教育学科	初年次セミナー、専門科目
12月7日～1月18日	マスコミュニケーション学科	初年次セミナーⅡ
12月20日 1月16日	総合生活デザイン学科	公衆衛生学 総合生活デザイン演習Ⅰ
3月5日	言語文化学科 日本語文化コース	FD学科別研修
3月5日	社会臨床心理学科	FD学科別研修
3月5日	管理栄養学科	FD学科別研修

平成 30(2018)年度

実施日	学科	授業科目
5月24日～6月8日	マスコミュニケーション学科	初年次セミナーⅠ
6月11日	美術科	特別講座
7月28日	言語文化学科	学科研修会
8月～1月(計8回)	子ども発達教育学科	学科研修会、教育の方法と技術等
9月～11月(計7回)	幼児教育科	総合演習
10月～3月(計5回)	管理栄養学科	初年次セミナーⅡ
1月8日	総合生活デザイン学科	総合生活デザイン演習Ⅰ
2月21日	社会臨床心理学科	心理演習A、心理学実験 他

平成 31・令和元(2019)年度

実施日	学科	授業科目
5月13日	美術科	美術基礎論
5月～1月(計3回)	子ども発達教育学科	学科研修会
8月3日～12月19日(計6回)	管理栄養学科	初年次セミナーⅠ・Ⅱ
9月23日～12月1日	総合生活デザイン学科	生活達人チャレンジプログラムⅠ
9月～12月(計7回)	幼児教育科	領域健康の指導法
1月15日	言語文化学科	初年次セミナーⅡ
1月27日	社会臨床心理学科	特別研究Ⅱ

《他大学への視察及びセミナー・シンポジウムへの参加状況》

平成 26(2014)年度

	開催日 (視察日)	内　容	主　催(視察先)
1	9月16日	「アクティブラーニングの魅力と難しさ」	桜美林大学
2	10月18日	大学教育再生加速プログラム(AP)採択事業キックオフシンポジウム 「少人数アクティブ・ラーニング(AL)による国際的リベラル・アーツ教育の展開」	宮崎国際大学
3	10月29日	アクティブ・ラーニング「学びの場」セミナー	理研産業株式会社
4	11月14日	可視化実地調査	関西大学・甲南大学
5	11月17日	アクティブ・ラーニング実地調査	京都光華女子大学・同志社大学・京都精華大学
6	11月22日	「主体的な学びのための教学マネジメントシステムの構築」シンポジウム 『教学マネジメント』の改善と学修成果』～学生支援型IRの可能性～	関西国際大学・淑徳大学・ 北陸学院大学・くらしき作陽大学
7	11月29日	女性の社会進出が求められる時代のアクティブ・ラーニング ～アクティブラーナー育成のための学修支援体制づくり～	京都光華女子大学・ 京都光華女子大学短期大学部
8	12月13日	平成26年度私立大学フォーラム 「教わる」から「学ぶ」へ　アクティブ・ラーニング	一般社団法人日本私立大学連盟
9	12月15日	アクティブラーニング「主体的学びにつなげる」評価と学習方法 ―カナダのICEモデルより―	広島文化学園大学
10	1月31日	佐賀県武雄市　授業内でのICT活用教育	理研産業株式会社
11	2月21日～22日	大学教育再生加速プログラム(AP)推進フォーラム 「学生のための、学生を成長させる「学修成果の見える化」とは」	横浜国立大学
12	3月7日	平成26年度県立広島大学教育改革フォーラム 学生の主体的な学びを引き出す教育を目指して ―アクティブ・ラーニング実践事例―	県立広島大学

平成 27(2015)年度

	開催日 （視察日）	内　容	主　催（視察先）
1	8月26日～28日	SPODフォーラム2015 学びの成果をどう可視化するのか？	四国地区大学教職員能力開発ネット ワーク（SPOD）
2	10月29日～30日	第21回GAKUEN全国ユーザー研修会	日本システム技術株式会社 （JAST）
3	11月24日	2015年度第2回MILAiSフォーラム 「パフォーマンス評価とルーブリックの基礎と最前線」	九州工業大学
4	1月20日	安芸太田町立加計中学校協調学習研究会(第2回)	安芸太田町立加計中学校
5	2月10日	第3回教学IR研修会 「茨城大学のIR～組織立ち上げから現在の運営に至るまで～」	金沢大学
6	2月12日	第1回 公開FD研修会 「アクティブラーニングと学修成果の可視化について」	産業能率大学
7	2月18日～19日	「教職協働で育てる学修支援アドバイザー」 「アクティブ・ラーニングを促す30の技法」	県立広島大学
8	2月22日	「共通の学生調査を用いた学修成果の可視化への取組 ―データに基づくFaculty Developmentの展開」	玉川大学
9	2月27日	第14回FDセミナー 「授業のアクティブ・ラーニング化に向けた実践報告」	東京理科大学
10	3月4日	平成27年度　県立広島大学教育改革フォーラム 「アクティブ・　ラーニングの導入と評価」	県立広島大学
11	3月12日	「アクティブ・ラーナー育成のための学修支援体制づくり」	京都光華女子大学・ 京都光華女子大学短期大学部
12	3月14日	AP事業成果発表　ジョイントフォーラム2016	山口大学

平成 28(2016)年度

	開催日 （視察日）	内　容	主　催（視察先）
1	5月21日	第2回高大接続改革シンポジウム	河合塾
2	6月17日～18日	NEW　EDUCATION　EXPO大阪	New Education Expo実行委員会
3	7月8日	アクティブ・ラーニング授業開発ワークショップPart1 ―PBL授業設計のツボを学ぶ―	山口大学
4	7月9日	朝日新聞　教育セミナー＆ワークショップ2016	朝日新聞
5	7月10日	第11回神奈川大学メディア教育シンポジウム	神奈川大学
6	7月22日	広島県教育委員会　広島版「学びの改革」講演会	広島県PTA連絡協議会
7	8月4日	関西教育ICT展	一般社団法人日本教育情報化振興会／一般財団法人大阪国際経済振興センター／テレビ大阪株式会社／株式会社テレビ大阪エクスプロ
8	11月11日	第7回FD講演会　デジタルネイティブ世代への教育方法を考える―様々なツール活用したアクティブ・ラーニング―	関西学院大学
9	11月18日	第13回日常的FD懇話会 ルーブリック評価とレポート課題の提示方法	関西大学
10	11月22日	APテーマⅣ長期学外学修プログラム（ギャップイヤー）採択校 クォーター制の導入について	長崎短期大学
11	12月3日～4日	大学教育学会2016年度課題研究集会　統一テーマ：『学生はいかに学んでいるのか』	大学教育学会

12	1月8日	平成28(2016)年度研究教育事業部全国リーダー研修会 テーマ「教育力向上を考える」	日本栄養士会
13	3月4日	平成28(2016)年度AP成果報告会 初年次教育のアクティブ化と学習態度・行動のアセスメント ―アクティブ・ラーナーの育成に向けて―	京都光華女子大学
14	3月9日	第1回短大フォーラム～蕾～	愛知文教女子短期大学／ 京都光華女子大学短期大学部／ 香蘭女子短期大学／ 松本大学松商短期大学部
15	3月14日	山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）国際シンポジウム 2017	山口大学
16	3月15日	短期大学教育課程における教育成果の検証 ～学外学修体験を通して～	長崎短期大学

平成 29（2017）年度

	開催日 （視察日）	内　容	主　催（視察先）
1	5月1日	「LMSを活用した授業時間外学習のための実践的研究 ～初年次教育での試み～」（共同研究）にかかる先進校への視察	金沢工業大学
2	5月19日	第8回　教育ITソリューション　EXPO	リード　エグジビジョン　ジャパン株式会社
3	6月2日	NEW　Education Expo　2017　広島サテライトセミナー	NEWEducation Expo　実行委員会
4	6月30日～7月1日	「LMSを活用した授業時間外学習促進のための実践的研究 ～初年次教育での試み～」（共同研究）にかかる先進校への視察 LMS利用における著作権の考え方 朝日新聞　教育セミナー＆ワークショップ2017	大阪女学院大学 関西学院大学 朝日新聞
5	7月14日	公立はこだて未来大学「プロジェクト学習中間発表」の視察	公立はこだて未来大学
6	7月29日	第1回APフォーラム	松本大学松商短期大学部
7	8月9日	第142回招聘セミナー 「学生の深い学びを促す発問とは」（ワークショップ）	名古屋大学
8	9月2日	シンポジウム「アクティブ・・ラーニングは日本の教育を変えるのか」	北海道大学高等教育推進機構
9	9月6日	初年次教育学会第10回大会 ―初年次教育と学生コミュニティ：授業内外で育む学生の成長―	初年次教育学会（中部大学）
10	10月28日	シンポジウム「卒業時における質保証の取組の強化」	高知大学
11	11月17日	第1回関西教育ITソリューションEXPO	リード　エグジビジョン　ジャパン株式会社
12	11月21日	高知大学　プレ・ディプロマ・サプリメントに関する　視察	高知大学
13	2月10日	第7回アクティブ・ラーニング勉強会 ～アクティブ・ラーニングと高大接続改革～	徳山大学
14	2月16日	公立はこだて未来大学「プロジェクト学習成果発表会&企業交流会in東京」 内田洋行「未来の学習空間、フューチャークラスルーム」	公立はこだて未来大学（秋葉原UDX） 内田洋行株式会社
15	2月20日	AP全テーマ　報告会	京都光華女子大学
16	3月3日～4日	第23回FDフォーラム	公益財団法人大学コンソーシアム京都
17	3月8日	平成29(2017)年度　県立広島大学教育改革フォーラム 「アクティブ・ラーナー育成の課題と展望～高大接続時代を迎えて～」	県立広島大学
18	3月10日～11日	協同学習法ワークショップ（ベーシックコース）	日本協同教育学会 （鳥取看護大学）

平成 30(2018)年度

	開催日 （視察日）	内　容	主　催（視察先）
1	5月9日～10日	アクティブ・ラーニング＆カリキュラム・マネジメントSUMMIT2018　～ ″新学習指導要領″を考える～	文部科学省
2	6月25日	「大学入試改革を見据えた大学英語教育セミナー」 ～学生の4技能英語力育成の向けた大学英語教育の在り方とは～	株式会社ベネッセコーポレーション 一般財団法人進学基準研究機構
3	6月30日	文科系大学におけるICT教育を再考する ―アクティブ・ラーニングの視点から―	成城大学
4	6月30日	第13回メディア教育シンポジウム 「ICTを利用した教育改革」	神奈川大学
5	8月9日～10日	未来のマナビフェス　―2030年の学びをデザインする―	「未来のマナビフェス」実行委員会 学校法人河合塾
6	8月23日～24日	第8回FD・SDフォーラム 「教育の質保証」の実質化に向けて ―社会の要請に大学はどう応えるか―	大学コンソーシアム八王子
7	9月10日～11日	大学教育再生加速プログラム（AP） 選定校合同FD・SDワークショップ　―チームAP合宿―	AP幹事校会議 チームAP合宿準備委員会
8	10月6日	第4回APフォーラム	松本大学松商短期大学
9	11月2日	平成30(2018)年度APシンポジウム 「アクティブ・ラーニング教育の推進と学修成果の可視化」	福岡医療短期大学
10	11月8日～9日	第2回関西教育ITソリューションEXPO	リード　エグジビジョン　ジャパン 株式会社
11	11月13日～14日	大学・高校実践ソリューションセミナー2018	株式会社内田洋行
12	11月24日	「テーマⅠ・Ⅱ複合型」選定校意見交換会 テーマⅠ及びテーマⅠ・Ⅱ複合型共同開催シンポジウム	徳島大学 京都光華女子大学短期大学部
13	11月28日	演劇を初年次教育に取り入れている実践例視察	四国学院大学
14	12月8日	経営学・経済学・会計学・心理学・数学グループ 分野連携アクティブ・ラーニング対話集会	公益社団法人私立大学情報教育 協会
15	12月22日	英語教育・法律学・国際関係学・コミュニケーション関係学グループ 分野連携アクティブ・ラーニング対話集会	公益社団法人私立大学情報教育 協会
16	1月26日	栄養学・薬学・医学・歯学・看護学グループ 分野連携アクティブ・ラーニング対話集会	公益社団法人私立大学情報教育 協会
17	2月16日	第2回　東北アクティブラーニングフォーラム	石巻専修大学
18	2月20日	社会が求める高等教育の質保証を考える 学修成果の可視化・卒業時の質保証	APテーマⅡ・テーマⅤ採択校
19	2月23日	2018年度第9回学士課程教育機構FD・SDセミナー 「大学教育再生加速プログラム（AP）」事業報告会	創価大学
20	3月2日～3日	2018年度第24回FDフォーラム　大学におけるダイバーシティ	公益財団法人大学コンソーシアム 京都
21	3月8日	平成30(2018)年度　県立広島大学教育改革フォーラム アクティブ・ラーナー育成に向けた「教・職・学」の協働	県立広島大学
22	3月13日	APフォーラム2018 「学修成果の可視化　何を、何によって、どのように測定するか」	玉川大学
23	3月14日	第2回「テーマⅠ・Ⅱ複合型」選定校意見交換会 山口大学・共育ワークショップ2019 多様化社会において必要とされるコンピテンシーとは	山口大学 京都光華女子大学短期大学部

平成 31・令和元(2019)年度

	開催日 （視察日）	内　容	主　催（視察先）
1	6月18日～19日	第10回教育ITソリューションEXPO	東京ビッグサイト　青海展示棟
2	6月22日	神奈川大学　第14回メディア教育シンポジウム	神奈川大学
3	6月28日	梅光学院大学　ラーニング・コモンズ視察	梅光学院大学
4	7月27日	追手門学院大学　アサーティブシンポジウム	追手門学院大学
5	8月22日～23日	第9回大学コンソーシアム八王子FD・SDフォーラム	八王子市学園都市センター
6	8月28日～29日	SPODフォーラム2019　大学教育の組織力	愛媛大学
7	9月6日～7日	北海道FDSDフォーラム2019	北海道大学高等教育推進機構
8	9月6日～7日	第4回　短大フォーラム「ミライ」	香蘭女子短期大学
9	10月5日	大学コンソーシアム京都　2019年度FD合同研修プログラム テーマ別研修	キャンパスプラザ京都
10	10月5日～6日	第3回「テーマⅠ・Ⅱ複合型」選定校意見交換会 APテーマⅠ・Ⅱ複合型採択校合同シンポジウム	宇都宮大学
11	11月1日	大学コンソーシアム京都　2019年度FD合同研修プログラム テーマ別研修　「学習者中心の授業ワークショップ」	キャンパスプラザ京都
12	11月2日	アセスメント活用研究会 ～学生成長に寄与する学修成果の可視化をめざして～	武蔵野大学
13	11月23日	学校と社会をつなぐ調査　第4回調査　分析結果報告会 「高校2年生から大学4年生まで　生徒はどう変わったか？」	AP日本橋
14	11月29日	令和元(2019)年度　高知大学・大阪工業大学AP事業シンポジウム 学びの質保証に向けた教学マネジメント	大阪工業大学
15	11月30日	アクティブ・ラーニングシンポジウム	立正大学
16	12月22日	APテーマⅤ　高等教育改革と卒業時の質保証	日本福祉大学
17	12月26日	大学教育の持続的な質向上とアクティブ・ラーニング ～県立広島大学AP事業の成果検証と教育改革の可能性～	県立広島大学
18	2月10日	AP総括シンポジウム 「アクティブ・ラーニング、学修成果の可視化のこれまでとこれから」	大阪府立大学
19	3月5日～6日 （予定）	大学教育再生加速プログラム（AP)全体報告会－大学教育の未来－	武蔵野大学

5）事業に関する自己点検評価と外部評価の実施

本事業をより良く誠実に推進するため毎年度、本学高等教育研究所の研究員による自己点検評価を実施し、また外部評価委員会による客観的な視点からの評価を受ける。これらにより本事業の実施状況や成果と課題をより客観的・相対的に検証し、堅実なPDCAサイクルに基づいた効果的な推進を可能にする。特に外部評価委員会では、学識経験者に加えて地域の教育・産業を代表する外部評価委員からの忌憚のない意見を採り入れることによって、人材育成、研究成果の還元の両面から地域社会の要望に応えて連携を強化していく。さらに自己点検評価および外部評価を受けた翌年度始めに、本事業実施に向けた改善案を作成し、前年度の問題点を改善しながら事業を推進するために役立てるよう取り組んだ。

5-1　自己点検評価委員の指名

自己点検評価は学内の高等教育研究所の研究員のうち、学長・副学長・学部長・短大部長・事務局長らがその任にあたることを原則とし、毎年度末に実施する高等教育研究所運営委員会議で審議事項として諮り正式に指名する。指名された自己点検委員は、別途配付された実施報告書および実施報告書エビデンス集に基づき、期日までに評価を提出する。なお、APWG のメンバーが上記いずれかの役職にある場合は、自己点検委員から除外する。

5-2　外部評価委員会の設置

外部評価委員は、学識経験者・広島県教育委員会・広島経済界・本学保護者から選出することを原則とし、毎年度末に実施する質的転換加速化本部会議で審議事項として諮り正式に任命する。なお、外部評価委員会当日に出席できない委員については、事前に送付する実施報告書および実施報告書エビデンス集に基づき、書面にて評価していただくか、またはその人物のみを対象として別途外部評価委員会を開催する。

5-3　自己点検および外部評価の評価項目

自己点検および外部評価の評価項目を統一した。平成 26(2014)年度の評価項目は、①実施体制の構築、②学修評価指標の分析・検証、③先進事例の実地調査・研修、④AL 部会の編成と活動、⑤可視化部会の編成と活動、⑥コア AL 科目の選定、⑦学生情報システムの再構築・拡充、⑧FD・SD の開催、⑨評価体制（自己点検評価等）、⑩プログラム全体の総合評価、⑪その他、次年度への指導・助言、の 11 項目とした。

平成27(2015)年度以降は事業の基本的な実施体制が整ったことから、①実施体制及び各組織等の活動報告、②「比治山型アクティブ・ラーニング」の構築と実践（テーマⅠ）、③評価指標モデルの構築と学修成果の可視化の実施（テーマⅡ）、④事業に関するFD・SD活動、⑤本事業に関する自己点検評価と外部評価の実施、⑥事業に関する情報発信と提供、他大学等との連携、⑦プログラム全体の総合評価、⑧その他、次年度への指導助言の8項目とした。

また評価は、「A：十分適切といえる」、「B：おおむね適切といえる」、「C：どちらでもない」、「D：あまり適切とはいえない」、「E：まったく適切といえない」の 5 段階および「N：判定できない」で評価し、理由・意見を記述する。

5-4　実施報告書の作成

毎年度末に、その年度の事業内容をまとめ実施報告書として作成し、これに基づいて自己点検および外部評価を実施する。なお、実施報告書とは別に実施報告書エビデンス集も合わせて作成している。

平成 26(2014)年度の実施報告書は、Ⅰ総論、Ⅱ具体的な事業内容と実施状況報告、1）実施体制の構築―「質的転換加速化本部」の設置、2）「比治山型アクティブ・ラーニング」スタッフの配置、3）IR を用いた学修評価指標の分析・検証、4）外部評価委員会の設置、5）先進的な事例の実地調査・研修等への参加、6）「AP アクティブ・ラーニング部会」の編成と活動、7）「AP 指標開発可視化部会」の編成と活動、8）「コア AL 科目」の選定、9）学生情報システム「Hi!way」の再構築と拡充、10）全学 FD・SD の開催、11）自己点検評価・年次報告及び外部評価委員会の開催、について記載している。

平成 27(2015)年度以降は事業の基本的な実施体制が整ったことから、Ⅰ事業の概要、Ⅱ取組報告、1）実施体制及び各組織等の活動報告、2）「比治山型アクティブ・ラーニング」の実践（テーマⅠ）、3）評価指標モデルの構築と学修成果の可視化の実施（テーマⅡ）、4）事業に関する FD・SD 活動、5）本事業に関する自己点検評価と外部評価の実施、6）事業に関する情報発信と提供、他大学等との連携、Ⅲ取組の成果と課題、について記載している。

5-5　外部評価委員会の実施

外部評価委員会を毎年度末に実施している。出席者は外部評価委員に加え、質的転換加速化本部委員から学長、副学長、事務局長、事務局次長（学長室長）、総務室長、図書館長、APWG のメンバーが参加する。また記録は学長室職員が行う。

式次第は、平成 26(2014)年度は、1：開会のあいさつ、2：出席者紹介、3：本事業の全体像、＊事業の概要、＊平成 26(2014)年度における全体的な進捗状況、4：各テーマからの報告、（1）「比治山型アクティブ・ラーニング」の構築と実践、(2) 指標開発モデルの構築、(3) 学修成果の可視化、5：次年度実施計画、6：質疑応答、7：指導助言、8：閉会のあいさつ、とした。

平成 27(2015)年度以降は、1：開会のあいさつ、2：出席者紹介、3：今年度事業報告、Ⅰ事業の概要、Ⅱ取組報告、Ⅲ取組の成果と課題、4：次年度実施計画、5：質疑応答、6 指導助言、7：閉会のあいさつ、とした。なお平成 26(2014)年度から 30(2018)年度までは、比治山大学 7 号館図書館ラーニングコモンズ「Me＋Library（みらいぶらりい）」を会場とした。

平成 26(2014)年度 AP 外部評価委員会

実施日時は、平成 27(2015)年 3 月 14 日（土）14:00～16:00。外部評価委員は以下のとおりである。

梶 田　叡 一　氏	奈良学園大学　学長
西 本　誠 喜　氏	比治山大学後援会　会長
細 川　喜 一 郎　氏	三次商工会議所　会頭
森 信　秀 樹　氏	広島経済同友会　代表幹事
吉 村　薫　氏	広島県教育委員会事務局　教育部　高等教育指導課長

（各評価委員の所属・職位は当時）

評価

全体としての評価結果は概ね A または B であるが、一部の評価委員からいくつかの項目に C または N の評価を受けた。C または N の評価を受けた項目と意見は以下のとおりである。

②学修評価指標の分析・検証については、1 名の委員から C（N）の評価を受けた。意見は、「まだ分析・検証までは至っていない。」というものであるが、この時点では分析すべきデータが揃っていないことを指しており、次年度以降に結果が現れてくる。

③先進事例の実地調査・研修については、1名の委員からCの評価を受けた。意見は、「今、全国で類似の取り組みがなされている。精力的に他大学の例の情報収集を。」というものであるが、次年度以降そのための予算を増額して先進校視察を行い、その都度「AP関係出張報告書（本学AP事業に対する示唆）」を提出し、その一部はAPAL/可視化部会でレッスンスタディとして報告した。
⑥コアAL科目の選定については、1名の委員からCの評価を受けた。意見は、「各学科のALに対する捉え方に幅があるのでは。（科目一覧の観点の数や種類など）」というものであるが、学科の特性を尊重した結果である。なおコアAL科目は、教育課程の修正・変更に伴い、毎年見直しを行っている。
⑧FD・SDの開催については、1名の委員からCの評価を受けた。意見は、「ここが一番、力を入れるべきところ。未だいろいろ工夫していくべき点が残るのでは。」というものである。本学では、年に2回、教職員合同研修会を実施しているが、その全てにAPの議題を加えている。またAPセミナーも、これまで年に2回実施している。
⑪その他、次年度への指導・助言について改善を求められた点は、「ALが目的となり内容（学生に身に付けさせたい力、資質は何か）が形骸化しないように常に修正が必要になると思います。是非、取り組みの状況を外部（高校現場等）にも発信していただきたいと思います。今回いただいた資料について、前日、当日とあり、又インデックスも分かりにくく若干手間取りました。整理いただければありがたいです。」というものである。ALを目的化しないことは、APAL部会でも当初から訴え続けてきたことである。実施報告書のインデックスは次年度から改善した。

平成27(2015)年度AP外部評価委員会

実施日時は、平成28(2016)年3月19日（土）13:30～15:30。外部評価委員は以下のとおりである。なお、梶田叡一氏に対しては、平成28(2016)年3月23日（水）11:00～12:00に奈良学園大学に赴き別途実施した。

梶田　叡一　氏（当日欠席）	奈良学園大学　学長
土居　裕美子　氏	鳥取看護大学　教授
西本　誠喜　氏	比治山大学後援会　会長
細川　喜一郎　氏	三次商工会議所　会頭
森信　秀樹　氏	広島経済同友会　代表幹事
吉村　薫　氏	広島県教育委員会事務局　教育部　高等教育指導課長

（各評価委員の所属・職位は当時）

評価

全体としての評価結果は概ねAまたはBであるが、一部の評価委員からいくつかの項目にCの評価を受けた。Cの評価を受けた項目と意見は以下のとおりである。
③評価指標モデルの構築と学修成果の可視化の実施（テーマⅡ）については、1名の委員からCの評価を受けた。意見は、「内定者の多い就職先を対象に、スキルに関するアンケート調査を実施しているが、その結果を学生達にも周知し意識の改善まで行ってほしい。」というものである。キャリアセンターでは、学内合同企業説明会の際に実施しているアンケート（新規採用者に求めるスキル）をキャリアセンターの会議で情報共有しているが、上記調査結果は本学教職員合同研修会で発表するにとどまっている。
④事業に関するFD・SD活動については、1名の委員からCの評価を受けた。意見は、「学科によってデコボコがあるのではないか。より一層の活動を、と思います。」というものである。これは事業開始直後であるため、ある程度のばらつきは致し方ないと思われる。以降、全学科でレッスンスタディを実施し、継続的なFD・SD活動やAPセミナーの実施により学内全体の意識の底上げに務めた。

⑤本事業に関する自己点検評価と外部評価の実施については、1名の委員からCの評価を受けた。意見は、「自己点検の中に、教員と学生それぞれの評価を取り入れてはどうか。」というものであるが、この意見を受け、平成28(2016)年度から「AP学生モニターに対する聞き取り調査」を実施している。
⑥事業に関する情報発信と提供、他大学等との連携については、2名の委員からCの評価を受けた。その意見のうち一つは、「他大学や高等学校等との連携に関して、視察対応や発表、合同シンポジウム等が実施されている。ただし、より効果的・計画的な学内外への情報発信、他組織との戦略的な連携が必要と感じる。特に、事業の最終目的に掲げている『地方の四・短併設型小規模大学のモデル』の提供、『他大学への波及効果』を実現するという点から、ビジョンをもった連携・情報発信を、計画的、効果的（効率的）に継続されたい。」というものである。他大学や高等学校等との連携は、継続的に行っているが、指摘されたような規模の取組にまでは至っていない。
⑧その他、次年度への指導助言で改善を求められた点の一つは、「学生の『Hi!step』入力は必ずしも万全とは言えない。学生の視点に立って、入力したくなるような工夫（SNS同様の簡便性の確保等）が一層必要と思われる。一定の数値目標を各学科、ゼミごとに積み上げて、全学で普及・運用されることを期待したい。」であるが、キャリア科目との連携などによって、入力率は徐々に向上している。

平成28(2016)年度AP外部評価委員会

実施日時は、平成29(2017)年3月20日(月)13:30～15:30。外部評価委員は以下のとおりである。なお、梶田叡一氏には実施報告書およびエビデンス集を送付し、文書にて評価していただいた。吉村薫氏に対しては、平成29(2017)年3月23日（木）9:00～11:00に本学にて外部評価委員会を別途、実施した。

梶田　叡一　氏（当日欠席）	奈良学園大学　学長
土居　裕美子　氏	鳥取看護大学　教授
西本　誠喜　氏	比治山大学後援会　会長
細川　喜一郎　氏	三次商工会議所　会頭
森信　秀樹　氏	広島経済同友会　代表幹事
吉村　薫　氏（当日欠席）	広島県教育委員会事務局　教育部　高等教育指導課長

（各評価委員の所属・職位は当時）

評価

全体としての評価結果は概ねAまたはBであるが、一部の評価委員からいくつかの項目にCまたはDの評価を受けた。CまたはDの評価を受けた項目と意見は以下のとおりである。
①実施体制及び各組織等の活動報告については、1名の委員からCの評価を受けた。意見は、「APワーキングは教学部門が重要な機動力となり効果的な運営が行われている。一方で、本事業の重要な要素である、入試・キャリア支援・広報・IR部門との連携の有無が不明瞭である。」というものである。キャリアセンターとは、企業に対するアンケートやインターンシップに関する部分で連携している。広報委員会には、本学入試広報研修会でAPについて説明した。IR委員会は、教職員合同研修会でAP報告をする際に連携している。なお、入試委員会については令和2年度からの連携を計画中である。
②「比治山型アクティブ・ラーニング」の構築と実践（テーマⅠ）については、1名の委員からCの評価を受けた。意見は、「e-learningシステムの活用方法、目的があまり伝わってこなかったと思う。」というものであったが、予習・復習への活用や反転授業の積極的な実施などが今後の課題である。

③評価指標モデルの構築と学修成果の可視化の実施（テーマⅡ）については、1名の委員からCの評価を受けた。意見は、「AP学生モニターに対する聞き取り調査によると、『Hi!check』、『Hi!step』はあまり学生達に浸透していない。」というものであるが、キャリア形成科目と連携するなどして、入力率は徐々に向上している。
④事業に関するFD・SD活動については、1名の委員からCの評価を受けた。意見は、「FDer養成講座、レッスンスタディなどは積極的に行われているが、参加者数や具体的な内容や成果が不明瞭である。また、他大学視察やシンポジウムへの参加により、教職員や本事業にどのように還元されているのかが明確になるとよい。」というものであった。FDer養成研修、レッスンスタディともに実施内容や参加人数が記録されているが、成果についてまでは追跡していない。他大学視察やシンポジウムへの参加結果は全て示唆報告書に記載しまとめ公開し、そのいくつかはFDer養成研修の一環としてAPAL可視化部会で説明しているが、それらを、より積極的に閲覧させる取組はしていない。
⑤本事業に関する自己点検評価と外部評価の実施については、3名の委員からCの評価を受けた。そのうちの意見の一つは、「事業を通した学生の変容等について十分なデータのもと協議ができていない。」というものであった。この点は、外部評価指標として実施しているベネッセi-キャリアの大学生基礎力レポートの結果を組み合わせて分析していく必要があるが、今後の課題である。
⑥事業に関する情報発信と提供、他大学等との連携については、1名の委員からDを、また1名の委員からCの評価を受けた。Dの評価をした委員の意見は、「『他大学との連携一覧』を見る限り、講師派遣は業者主催のセミナーに限られており、『他大学等への講師派遣』には該当しないのではないか。高等学校との連携も1校のみであり（参加者人数不明）、『情報発信』『連携』という点では不十分である。HPの【AP関連】の更新も少ないため、情報発信の進め方を整理し（何を、いつ、どのように、どこに向けて、なんのために）、無理なく継続的に実施できる工夫が必要である。」というものであった。単年度だけを捉えると少ない印象を受けるが、6年間の事業全体を通じて判断すれば決して少なくない。しかし情報発信は十分とは言えない。なおCの評価をした委員の意見も同様である。
⑦プログラム全体の総合評価については、1名の委員からCの評価を受けた。意見は、「事業の見直しや新しい取り組みをしている一方、去年からの進化があまり感じられない部分もありました。」というものであった。
⑧その他、次年度への指導助言で改善を求められた点の一つは、「成果の出ない、出せない学生へのフォロー、アプローチをどうするのか、どこまでをもって、何をもってOKとするのかを明確にする必要がある。『就職したい企業』へもアプローチをしたり、県内の新規事業などに積極的に関わってみてはどうか（三次の”もののけ”など）。」というものであった。例えば健康栄養学部管理栄養学科では、カンボジアでの食育プログラムに関する短期研修で、現地の小学生に食育すごろくを活用し、食や衛生に関する知識を遊びの中に取り入れて周知する取組を行っているが、こういった取組を全学的に広げていくのが今後の課題である。

平成29(2017)年度AP外部評価委員会

実施日時は、平成30(2018)年3月25日（日）10:00～12:00。外部評価委員は以下のとおりである。なお、土居裕美子氏には、平成30(2018)年3月23日（金）11:00～12:00に本学にて外部評価委員会を別途、実施した。

阿部　由貴子　氏	広島県教育委員会事務局　教育部　高校教育指導課長
佐々木　茂喜　氏	広島経済同友会　代表幹事
神出　亨　氏	広島商工会議所　常議員　人材育成委員会　委員長
土居　裕美子　氏（当日欠席）	鳥取看護大学　教授
西本　誠喜　氏	比治山大学後援会　会長
西本　寮子　氏	県立広島大学　理事・副学長・教授

（各評価委員の所属・職位は当時）

評価

全体としての評価結果は概ねAまたはBであるが、一部の評価委員からいくつかの項目にCの評価を受けた。Cの評価を受けた項目と意見は以下のとおりである。

③評価指標モデルの構築と学修成果の可視化の実施（テーマⅡ）については、1名の委員からCの評価を受けた。意見は、「AP学生モニターに対する聞き取り調査の意見等をみると、昨年と同じような改善点が多数みうけられる。」というものであった。実際、「AP学生モニターに対する聞き取り調査」では、アクティブ・ラーニングについては肯定的な意見が多いが、学修成果の可視化については、充分に活用されていない実態が浮き彫りになってくる。そのため、オリエンテーションで働きかけたり、キャリア形成科目と連携したりしたことから徐々に入力率は向上している。

⑤本事業に関する自己点検評価と外部評価の実施については2名の委員からCの評価を受けた。そのうちの意見の一つは、「学内・学外からの点検評価を実施している。(評価を、具体的にどのように活用しているかが見えない)」というものであった。自己点検評価および外部評価を受けた結果は、毎年度、一覧表として作成し、APWGで審議事項の議題にあげ、改善に役立てるよう取り組んでいる。

⑥事業に関する情報発信と提供、他大学等との連携については2名の委員からCの評価を受けた。そのうちの意見の一つは、「現在、情報発信には様々なツールがあり、相手に応じたメニューの多様化や継続的な発信が必要。高校生へのPRに加え、特に、企業等へのPRとともに、企業等との意見交換・情報交換を行うことも効果的。」というものであった。APWGでは、平成30(2018)年度から新たにAP広報部会を設け、特に高校生向けに分かりやすく説明したチラシを作成し、オープンキャンパスで配布するなどした。また、もう一つの意見は、「事業の最終目的に掲げている『地方の四・短併設型小規模大学のモデル』の提供、『他大学への波及効果』を実現するという点から、ビジョンをもった連携・情報発信を、計画的、効果的（効率的）に継続されたい。」というものだが、6年間の事業全体を通じて見れば、地域における小・中・高・大との連携が一定程度は行われたものと考える。

⑧その他、次年度への指導助言で改善を求められた点の一つは、「多くの企業は、自ら考え自ら行動できる人材を求めている。学生には個人差もあり、『１２のスキル』の中で、その人によって、どこかに重点を置いた育成も必要。特に、小さな成功体験の積み重ねは大きな自信につながる。本補助事業の終了後も、持続していけるような仕組みを確立していただきたい。」、もう一つは、「『４×３の比治山力』は、これからの社会において本当に大切な力だと実感している。ルーブリックも活用しながら、学生たちが自身の強みとしてこれらの力（のどれかだけでも）が伸びたと実感できる教育環境作りを目指してほしい。そのためにも、APWGの先生方が疲弊することなく、楽しんで（？）教職員も『４×３の比治山力』をのばしている姿を学生さんに見せてあげられるよう願っている。」というものであった。

平成30(2018)年度AP外部評価委員会

実施日時は、平成31(2019)年3月16日（土）13:30～15:30。外部評価委員は以下のとおりである。

阿部　由貴子　氏	広島県教育委員会事務局　教育部　高校教育指導課長
石田　高嗣　氏	比治山大学後援会　副会長
佐々木　茂喜　氏	広島経済同友会　代表幹事
土居　裕美子　氏	鳥取看護大学　教授
西本　寮子　氏	県立広島大学　理事・副学長・教授
藤原　輝　氏	株式会社ワーキンエージェント取締役　キャリアコンサルタント

（各評価委員の所属・職位は当時）

評価

全体としての評価結果は概ねAまたはBであるが、一部の評価委員からいくつかの項目にCの評価を受けた。Cの評価を受けた項目と意見は以下のとおりである。

③評価指標モデルの構築と学修成果の可視化の実施（テーマⅡ）については、2名の委員からCの評価を受けた。意見は、「フォーマットは多岐にわたり詳細に作られているが学生の理解と活用には疑問が残る。」というものであるが、学生に対して丁寧なガイダンスを継続的に行う必要がある。AP学生モニターでも同様の意見があるが昨年度から入力率が向上している。AP 選定他大学の可視化と比べても、本学のものは分かりやすいと思われる。もう一つの意見は、「本事業の効果を測定するため様々な調査を実施し、個々の結果はまとめられているが、それらを統合してどのように効果測定をしていこうとしているかが見えにくい。とくに、『Hi!check』、『Hi!step』に関しては、学生への利用促進に工夫が必要である『比治山型ディプロマ・サプリメント』が、学生にとってどのようなメリットがあるか、(学生がどのように感じているか）を検証されたい。」というものであるが、ディプロマ・サプリメントについては、実際に運用をはじめて以降の課題であるが、学生に向けた充分なガイダンスが必要である。

⑥事業に関する情報発信と提供、他大学等との連携については、1名の委員からCの評価を受けた。意見は、「事業の最終目的に掲げている『地方の四・短併設型小規模大学のモデル』の提供、『他大学への波及効果』を実現するという点から、ビジョンをもった連携・情報発信を、計画的、効果的（効率的）に継続されたい。」というものである。

⑧その他、次年度への指導助言で改善を求められた点の一つは、「まとめの年度に入りますが、次の教育改革につながるよう、より多くの教員が主役となれるよう、APWGの先生方（だけ）が加速化し、疲弊することなく、教職員全員が『４×３の比治山力』をのばしている姿を学生さんに示してあげてください。」というものである。また、もう一つの意見は、「授業外学修時間についてはグーグルクラスルームの活用促進をはかると同時にシラバス記載を工夫することで伸びが期待できる。Ex.『ダウンロードして課題に取り組んでおくこと』などの記述が増えればよいと思う。」というものである。

平成31・令和元(2019)年度AP外部評価委員会

実施日時は、令和2(2020)年2月21日（金）10:00～12:00。外部評価委員は以下のとおりである。

竹志　幸洋　氏	広島県教育委員会事務局　教育部　高校教育指導課長
石田　高嗣　氏	比治山大学後援会　会長
佐々木　茂喜　氏	広島経済同友会　代表幹事
土居　裕美子　氏	鳥取看護大学　教授
西本　寮子　氏	県立広島大学　理事・副学長・教授
藤原　輝　氏	株式会社ワーキンエージェント取締役　キャリアコンサルタント

6）事業に関する情報発信と提供、他大学・他教育機関等との連携

6-1　本事業の進捗状況や関連事業の発信

本学のホームページ上において、本事業に関する取組概要と進捗状況、セミナー開催（フライヤー）などの情報を随時公開し、情報発信を行った。また AP ワーキンググループにて、必要に応じて情報公開に関して審議・報告等を行うことにより、自己点検を行った。また 9 月と 3 月の教職員合同研修会にて、学内教職員へ向けて、本事業の活動報告と今後の展開などについての情報提供を行い、学内での共有を図った。

平成 29(2017)年度からは、本事業の情報発信に関して、高校教員対象進学説明会において高校教員に向けて、オープンキャンパスにおいて高校生やその保護者に対して、本事業での成果物の配付や説明を行った。

また平成 30(2018)年度から、オープンキャンパスや高校進学ガイダンスなどに向けて、本学の学びのポイントをワークフロー化した AP チラシを作成し、高校生やその保護者に対して「４×３の比治山力」を分かり易く説明できるようにした。

平成 31・令和元(2019)年度には、高校教員対象進学説明会において高校教員に向けて本事業での成果について報告した。

6-2　他大学等からの視察・他大学等への講師派遣依頼への対応、他大学等との連携

平成 26(2014)年度は、3 月に外部講師を招いた AP セミナーを実施した。これ以降実施した AP セミナーは、すべて学外にも無料で公開している。

平成 27(2015)年度は、9 月と 3 月の二度、外部講師を招いて AP セミナーを実施した。なお、3 月に実施したセミナーでは、本学同様広島県内で AP に採択された県立広島大学から講師を招いて実施した。また、8 月には、四国地区大学教職員能力開発ネットワーク主催の「SPOD フォーラム 2015」にポスター発表にて参加、10 月には、「GAKUEN 全国ユーザ研修会」の分科会で発表、12 月には賀茂北高等学校長が来校され、2 月に本学教員がアクティブ・ラーニング研修会講師として招聘され賀茂北高等学校にて体験授業等を実施、3 月には「AP 事業成果発表ジョイントフォーラム 2016～山口・広島地区大学教育再生加速プログラム（AP）採択校の成果発信～」にて発表するなど、本学の AP の取組について多様な手段で情報発信した。さらに、他大学等からの多数の視察にその都度対応し、情報発信を行った。

平成 28(2016)年度は、9 月と 3 月の二度、外部講師を招いた AP セミナー、および 12 月に外部講師を招いたアクティブ・ラーニング関連研究会ワークショップを実施した。また、本学教員が、7 月と 9 月に「GAKUEN 事例セミナー」に講師として招聘され導入事例を講演、8 月には理研産業株式会社主催の「アクティブ・ラーニングと ICT 体験型研修会」に講師として招聘され「アクティブ・ラーニングと ICT 実践活用」と題した講演を行うなど、本学の AP の取組について全国に向けて情報発信した。さらに、7 月には、広島県立広島井口高等学校の校外研修に対応し、高校生に向けての情報発信も行った。

平成 29(2017)年度は、9 月と 3 月に外部講師を招いた AP セミナーを実施した。また、本学教員が松本大学松商短期大学部で開催された第 2 回 AP フォーラム（平成 29(2017)年 9 月 12 日開催）に講師として招聘され実践事例を紹介するなど、本学の AP の取組について全国に向けて情報発信した。さらに平成 29(2017)年度以降継続して、地域の小学校、中学校、高等学校での研修会などで AP 成果物の配付や活用、また中学生や高校生の校外研修と連携して情報発信を行った。

平成 30(2018)年度は、9 月と 3 月に外部講師を招いた AP セミナーを実施した。また、本学教員が福岡医療短期大学で開催された平成 30(2018)年度 AP シンポジウム「アクティブ・ラーニング教育の推進と学修成果の可視化」に講師として招聘され実践事例を紹介し、また、広島市立大学での FD・SD 研修会において「比治山大学・比治山大学短期大学部のアクティブ・ラーニングの取り組みと実践事例」を発表するなど、本学の AP の取組について全国に向けて情報発信した。

平成 31・令和元(2019)年度は、9 月に外部講師を招いた AP セミナーを実施した。

【平成 27(2015)年度　他大学・他教育機関等との連携一覧】

日 程	内 容	対 応 先
5月26日	視察への対応	私学事業団
8月26日	「SPODフォーラム2015」（愛媛大学）にてポスター発表	四国地区大学教職員能力開発ネットワーク主催
9月18日	視察への対応	高千穂大学・山口大学
10月30日	「第21回GAKUEN 全国ユーザ研修会 In HIROSHIMA」分科会にて発表	日本システム株式会社主催
11月12日	視察への対応	日本高等教育評価機構認証評価
12月11日	視察への対応	広島県立賀茂北高等学校
2月9日	視察への対応	青森中央短期大学
2月16日	派遣講師として体験授業を実施	広島県立賀茂北高等学校
3月14日	「AP事業成果発表ジョイントフォーラム2016」にて発表	山口大学主催、本学他3大学共催
3月25日	AP事業の外部評価委員として派遣	京都光華女子大学

【平成 28(2016)年度　他大学・他教育機関等との連携一覧】

日 程	内 容	対 応 先
7月8日	学生自身による学修活動のPDCAサイクルの確立を支援するシステムの構築	「GAKUEN事例セミナー in OSAKA」講演
7月20日	高校生の校外研修への対応	広島県立広島井口高等学校
8月22日	アクティブ・ラーニングとICT実践活用	理研産業株式会社主催セミナー講演
9月9日	学生自身による学修活動のPDCAサイクルの確立を支援するシステムの構築	「GAKUEN事例セミナー in 福岡」講演
12月24日	「看図アプローチ」による授業づくり 福岡女学院大学 鹿内信善氏(北海道教育大学名誉教授)	アクティブ・ラーニング関連研究会ワークショップ

【平成 29(2017)年度　他大学・他教育機関等との連携一覧】

日 程	内 容	対 応 先
4月11日	アクティブ・ラーニングの方法　マインドマップの活用	広島県立賀茂高等学校
7月6日	学校で学ぶ意味を感じる授業づくり ～授業力向上を目指して～	広島市立牛田小学校 校内研修会
7月12日	「主体的で対話的な深い学び」が求められる理論的背景	広島市立安佐北高等学校 校内研修会
7月25日	「小学校におけるタブレットの活用」について	広島市立牛田新町小学校 校内研修会
7月26日	「小学校におけるタブレットの活用」について	広島市立戸坂小学校 校内研修会
8月9日	「取り組みの評価と授業改善」について	広島市立古田中学校 校内研修会
9月7日	タブレットを活用した模擬授業	廿日市市立野坂中学校 校外研修

9月12日	比治山大学・比治山大学短期大学部のアクティブ・ラーニングの意義とその効果及び学修成果の可視化について	「地域が求める人材育成を目指して」～第2回APフォーラム「教育手法の改善とその評価（松本大学松商短期大学部）
10月2日	「主体的な学び」につながる授業について	平成29年度庄原市学力向上検証改善委員会 第1回全体研修会
10月3日	平成29(2017)年度学力向上推進事業 「授業改善推進校」における研究授業	広島市立古田中学校 校内研修会
10月24日	主体的・対話的で深い学びを引き出す指導法 および評価の工夫～アクティブ・ラーニング型授業	広島市立安佐北高等学校 公開研究授業
11月24日	アクティブ・ラーニングの方法　マインドマップの活用	広島県立賀茂高等学校 （定時制）
12月6日	アクティブ・ラーナーを育てる授業改善① ～対話力とリフレクション（内省）を育む学びの場の構築	広島市立安佐北高等学校 公開研究授業
1月24日	建学の精神基盤とした「比治山型アクティブ・ラーニング」	教育学術新聞（第2715号） 「キャンパス万華鏡」
2月22日	アクティブ・ラーニング型の模擬授業	広島県立大柿高等学校 校外研修

【平成 30（2018）年度　他大学・他教育機関等との連携一覧】

日　程	内　容	対　応　先
4月11日	総合的な時間における能動的・主体的な学び（授業講師）	広島県立賀茂高等学校
7月25日	教科における学びあいの授業づくりと課題設定の方法 （指導講師）	広島市立井口台小学校
7月31日	生徒が主体的に取り組みたいと感じる課題設定の工夫（講演）	香川県中学校教育研究会夏期研修会
8月1日	科学的な思考力・判断力・表現力をはぐくむ授業づくり （指導講師）	広島市立広瀬小学校
8月2日	主体的に思考力・判断力・表現力を高める授業（指導講師）	広島市立古田中学校
8月7日	資質・能力の育成を目指した「主体的な学び」の充実に向けて（指導講師）	庄原市立西城中学校
9月22日 ～23日	日本協同教育学会認定ワークショップ	日本協同教育学会
9月26日	深い学びを促す授業の創造　～学力を向上させる対話的な授業のあり方～ （講演）	庄原市立西城中学校公開授業研究会
10月2日	ICTを活用した授業のあり方（講演）	宇和島市第65回理科教育実践研修会
10月25日	主体的・対話的で深い学びを育てる授業の工夫（指導講師）	広島市立高南小学校
11月2日	比治山大学・比治山大学短期大学部AP事業報告 ―「比治山型ディプロマ・サプリメント」構築に向けて―	平成30(2018)年度APシンポジウム「アクティブ・ラーニング教育の推進と学修成果の可視化」（福岡医療短期大学）
11月21日	深い学びにつながる授業実践の構築（指導講師）	比治山女子高等学校
11月22日	「比治山大学・比治山大学短期大学部のアクティブ・ラーニングの取り組みと実践事例」発表	広島市立大学 FD・SD研修会
11月22日	主体的・対話的で深い学び（講演）	広島市立五日市南中学校
12月18日	アクティブ・ラーニングの方法　マインドマップの活用（授業講師）	広島県立賀茂高等学校（定時制）
1月25日	主体的に思考力・判断力・表現力を高める授業（指導講師）	広島市立古田中学校
1月29日	主体的・対話的で深い学びを育てる授業の工夫（指導講師）	広島市立高南小学校

【平成 31・令和元(2019)年度　他大学・他教育機関等との連携一覧】

日 程	内 容	対 応 先
4月11日	アクティブ・ラーニングの方法　マインドマップの活用(授業講師)	広島県立賀茂高等学校
7月31日	思考力・判断力・表現力をはぐくむ授業づくり(講演)	広島市立広瀬小学校校内研修会
8月1日	主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の推進 ～次の学びにつながる「振り返り」を目指して～(講演)	白木中学校区学力推進事業小・中合同研究会
8月8日	授業の改善と評価(指導講師)	広島市立古田中学校校内研修会
8月17日 ～18日	日本協同教育学会認定ワークショップ	日本協同教育学会
9月30日	今からの教育　―ICT活用による令和時代の授業―(講演)	宇和島市第66回理科教育実践研修会
11月12日	アクティブ・ラーニングの方法　マインドマップの活用(授業講師)	広島県立賀茂高等学校(定時制)
11月16日	公開授業研究会(指導講師)	比治山女子高等学校
11月19日	新たな知識を生み出す授業の工夫(指導講師)	広島市立高南小学校校内研修会
12月3日	主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の推進 ～次の学びにつながる「振り返り」を目指して～(指導講師)	白木中学校区学力推進事業小・中合同研究会
12月4日	「4×3の比治山力」ルーブリックの作成および活用・ 比治山型アクティブ・ラーニングの実践例についての紹介	島根県立益田高等学校
1月22日	新たな知識を生み出す授業の工夫(指導講師)	広島市立高南小学校公開研究会
2月14日	主体的な学びを導くカリキュラム・マネジメント(指導講師)	和歌山県有田郡湯浅町立田村小学校教育研修会
2月27日	主体的・対話的な授業を促す教科の指導(指導講師)	庄原市立永末小学校校内研修会

Ⅲ 取組の成果と課題

1）成果

本事業は平成 26(2014)年度に選定され、平成 31・令和元(2019)年度まで 6 年間の補助金事業として、学生の生涯学び続ける学修意欲の向上と知識・技能の定着、及び地域社会に貢献する力を育むことを目的に、「比治山型アクティブ・ラーニング」の構築と実践（テーマⅠ）と、評価指標モデルの構築と学修成果の可視化（テーマⅡ）を複合的に行った。そのねらいは、学生に学びの充実感・成就感を実感させることにある。可視化された学修成果を学生自身が活用することによって、自分は何を学び、何を身につけ、どのような力を持つのかという自身の強みを意識化し、自己理解・肯定感を高めて社会に接続することである。また本学にとっては、さらなる教育改善の一階梯と位置づけ、今まで積み重ねてきた教育改革の経験と実績を、教職員・学生・地域が一体となった連携の中で再編・再構築し、地方の私立大学・短期大学併設型の小規模学園の教育システムの最適モデルとして実践・提供することを目指して実施した。

それらの取組は下図で表している通り、まず実施体制を整え、質的転換加速化本部と AP ワーキンググループが中心となり全学的に事業を推進した。比治山型アクティブ・ラーニングでは、アクティブ・ラーニング授業の実践とそれを支援する体制や仕組みを構築し、繰り返し教職員合同研修会にて理解を深めるよう取り組んだ。学修成果の可視化では、本学学生情報システム「Hi!way」を活用し、学修成果の可視化として「Hi!check」を、e ポートフォリオ機能として「Hi!step」を、また e-learning システムとして「Hi!space」(LMS) の仕組みを構築した。さらに本事業の成果を検証するためいくつかの調査を実施した。

平成 31・令和元(2019)年発行の AP パンフレットに掲載した本学 AP 事業概念図

1-1　「比治山型アクティブ・ラーニング」の構築と実践（テーマⅠ）

「比治山型アクティブ・ラーニング」とは、学生の学ぶ意欲を引き出すため体験や参加によって主体的に考えるきっかけをつくる授業展開であり、一方的な知識伝達型の授業による、ただ聞くだけで終わるような受動的な学修を乗り越え、学生自身による主体的・能動的で対話的な学修を通して「深い学び（ディープ・ラーニング)」へ導くものと定義して、アクティブ・ラーニング型授業の全学的な推進を図ってきた。また、学生の“learning by doing”推進を通して育成したい力を、本学の建学の精神「悠久不滅の生命の理想に向かって精進する」から導き出された、「自立」「想像」「共生」「創造」という４つのキーコンピテンシーごとに３つずつのスキルに編成・具現化した。これが本学が全学的に取り組んで育成する汎用的能力であり、「４×３の比治山力」と呼んで

いる。また教職員が協力して「４×３の比治山力」ルーブリックを作成し、教職員と学生がこれを共有することで、到達目標を明確にするところまで漕ぎ着けた。

当初、本学の多くの教職員にとって、アクティブ・ラーニングは初めて耳にする言葉であったため、これを理解するところから始めた。そのために初期のAPセミナーは「アクティブ・ラーニングの基礎知識」と題して実施し、教職員合同研修会では「アクティブ・ラーニング技法集」を発行するなどした。また一度に全ての科目をアクティブ・ラーニングとして実施するのは無理があるため、まずは一部の共通教育科目と、各学科専門科目の中でも必修科目や、または選択科目であっても学科の専門教育の中の柱となる科目を選定し「コアAL科目群」と定め、これらの科目から取り組んでいくことにした。本事業以前にも、一部の教員はそれぞれに学修支援的な「アクティブ・ラーニング」を実践してきた経緯はあるが、それらは個別の実践であり組織的な取組ではなかった。そこで本事業をきっかけに、それら個別の取組も含め「４×３の比治山力」を到達目標とする「比治山型アクティブ・ラーニング」として再編成し、FDerの任命、授業公開・参観、レッスンスタディ、ワークショップ、APセミナー、他大学等の視察と示唆報告書の作成と公開といった、全学的なFD・SD活動による授業改善を行うことにより、本学のさらなる教育改善・改革に資するよう取り組んだ。

「比治山型アクティブ・ラーニング」の特徴は、「学びの主体者としての自分の実感」を重視し、学生を一人ひとり丁寧に学びに誘うところにある。また「４×３の比治山力」は大学での学修に必要なスキルであるとともに社会へ出てからも大いに役立つ。例えば「チームワーク力」は、組織の中で積極的に活動することの重要性を教えている。

なお、本学におけるアクティブ・ラーニング実施率は100%を目標としているが、現在ではほぼそれに近い値を実現している。まさに全学的に「４×３の比治山力」の育成に取り組んでいると言える。「AP学生モニターに対する聞き取り調査」によれば、学生はアクティブ・ラーニングについて入学当初は面倒に思うが、やがてその意義や効果を理解し、理解してからは、より積極的に取り組む意思を持っていることが判明している。

1-2　評価指標モデルの構築と学修成果の可視化（テーマⅡ）

本学の「学修成果の可視化」は、可視化によって、学生の能動的・自主的な学びへの意欲の向上を図っている。そのために「Hi!check」では、「コアAL科目群」のGPAを活用し、四葉のクローバーが開花する仕組みで「４×３の比治山力」の達成度と、学期毎のGPAの推移と、免許・資格に関わる科目の一覧を可視化した。また「Hi!step」にはeポートフォリオの機能を持たせ、学修のPDCAサイクルを、学生自身が意識することができるように仕組みを作った。これによって、学生が常にweb上で自身の成果と課題を把握し、次の学びを計画していく力を育みつつ、自身の強みをより意識した自作ポートフォリオ(eポートフォリオ)として可視化し、自らの学びに支えられた自己肯定感を育むことができる。また、教職員はこれらの可視化される情報を活用した学生ガイダンスを充実させ、丁寧に学生に向き合っていくことができる。また「比治山型ディプロマ・サプリメント」を卒業式に学生に配付し、これによって学修成果の可視化の総仕上げとした。これら学修成果の可視化は、AP選定他大学のものと比べても、充分分かりやすいものとなっている。

「評価指標モデルの構築」については、「比治山型アクティブ・ラーニング」の効果の検証のため、本学独自指標として「比治山力レポート」(学生対象)、「４×３の比治山力　リフレクションシート」(教員対象)、「新規採用者のスキルに関する調査」(卒業生就職先対象)の開発を行い、従来からの「学生による授業に関するアンケート調査」(学生対象)等とともに毎年度実施している。これらの指標を組み合わせモデル化することで、学生の学修状況や意欲を含めた包括的な学生の学びや、大学生活を通じていかに成長し、どのような能力やスキルを身につけたかという成長過程を数値化・グラフ化して全学的に検証・改善につなげるよう取り組んできた。しかし同時に本学が外部指標として位置付けた、ベネッセi-キャリアの大学生基礎力レポートとの相関関係の分析などは、今後の課題である。

2）課題

本事業は日本学術振興会大学教育再生加速プログラム委員会によって、定期的に事業内容の進捗状況や成果及び課題について指導助言を受けている。これまで平成28(2016)年度フォローアップ、平成29(2017)年度中間評価、平成30(2018)年度フォローアップ、平成31(2019)年度フォローアップと、合計4回にわたって報告書または調書を提出し以下のとおりの評価を受けた。フォローアップ及び中間評価では、事業に問題や瑕疵等があった場合は、日本学術振興会大学教育再生加速プログラム委員会に出向き事情を説明するか現地視察を受けることとなっているが、本学は合計4回いずれも「訪問調査の必要無し」と判断されている。以下に、合計4回のフォローアップ及び中間評価の課題または改善を要する点として指摘された事項と対応策等について記載する。なお令和2(2020)年度には事後評価が予定されている。

2-1　平成 28(2016)年度フォローアップ結果

平成 27(2015)年度の本事業を対象としたフォローアップが平成 28(2016)年度に実施され、その結果「訪問調査の必要無し」と判断された。なお以下のような課題が指摘された。これらの課題については、平成 29(2017)年度中間評価調書の中で回答している。

「具体的なアクティブ・ラーニングの実践方法に関する選定時の意見 5 については、『４×３の比治山力』として設定された 汎用的能力が実際にどのように向上しているのか、汎用的能力以外の各分野・科目固有の能力や知識といった学修成果はどのように可視化されているのか、もう少し具体化する必要がある。」という指摘については次のように回答した。

「比治山力レポート」(学生の認識)および「４×３の比治山力　リフレクションシート」(教員の認識)の経年変化を分析することにより、汎用的能力が実際にどのように向上しているのかを把握している。汎用的能力以外の各分野・科目固有の能力や知識といった学修成果については、上述した「Hi!check」の「成績の推移」機能に加えて、平成 29(2017)年度以降に構築する「比治山型ディプロマ・サプリメント」により可視化する。

「『アクティブ・ラーニングを導入した授業科目数の割合』が平成 31(2019)年度目標では大学・短期大学部とも 100%となっているが、平成 27(2015)年度実績ではいずれも 3〜4 割に留まっている。目標達成に向けてどのような手立てがとられているのか、また、その際のアクティブ・ラーニングの定義はどのようなものかについて明らかにする必要がある。」という指摘については次のように回答した。

「比治山型アクティブ・ラーニング」とは、学生の学ぶ意欲を引き出すため、体験や参加によって主体的に考えるきっかけをつくる授業展開であり、一方的な知識伝達型の授業を聴くような受動的な学習を乗り越え、学生自身による主体的・能動的で対話的な学修を通して「深い学び（ディープ・ラーニング)」へと導くものと定義している。AP セミナーや授業公開・参観、レッスンスタディなどによる FD・SD を継続的に行うとともに、「コア AL 科目」を中心にこれらのアクティブ・ラーニングの形態を導入し、それ以外の科目にも波及させるという手立てをとっている。「アクティブ・ラーニングを導入した授業科目数の割合」が、平成 28(2016)年度実績では大学 88%・短大 90%となった。

「アクティブ・ラーニング科目が 100%になった時点(平成 31(2019)年度目標)でも、『学生 1 人当たりのアクティブ・ラーニング科目に関する授業外学修時間』は 3 時間/週であるのに対し、『学生の授業外学修時間』は 24 時間である。なぜこのようなギャップが生じるのかについて明らかにする必要がある。また、『学生の授業外学修時間』は平成 27(2015)年度実績で 10.2 時間であるが、これを 24 時間まで伸ばすのにどのような手立てがとられているのか明らかにする必要がある。」という指摘については次のように回答した。

「学生の授業外学修時間」を伸ばす手立てとしては、「比治山型アクティブ・ラーニング」として効果的な課題設定を行う取組を継続するとともに、平成28(2016)年度に学生情報システム「Hi!way」に構築したe-learningシステム「Hi!space」(LMS)の利用を促進することを想定している。

「学内の実施体制について、実施状況報告書に組織名と人数しか書かれていないため、各組織がどのように連携して事業を行っているか明らかにする必要がある。」という指摘については次のように回答した。

既に構築している学内の各委員会・センター・事務局との連携を図る体制について詳述している。

「iPad50台が学生にどう使用されているか、今後、どう活用していくかについて明らかにする必要がある。」という指摘については次のように回答した。

インターネット環境でのクリッカーアプリの利用があげられる(ソフトウェア仕様の変更で認証に問題が生じ、今後はやや限定的な利用となる見込み)。これに加えて、「みらいスクールステーションスクールパック」の利用においては、独自ポータブルサーバにより、インターネット環境がないところで30台程度までのiPad活用型双方向授業を行っている。今後活用できる用途例として、昨年度購入済みの電子黒板との連携利用を予定している。ネットワーク接続により、50台程度までのiPadを接続し、双方向授業が可能である。また、平成29(2017)年度後期からのクラウドシステム「G Suite」の導入により、HangoutsなどのGoogleアプリを利用する予定である。

「『コアAL科目』『４×３の比治山力』『比治山型アクティブ・ラーニング』といった独自の概念が繰り返し使われているが、その具体像が掴みにくい。実際に『比治山型アクティブ・ラーニング』によって、『４×３の比治山力』がどのように育成されているのか、その学修成果の可視化を行う必要がある。また、『コアAL科目』の設定が授業科目全体にアクティブ・ラーニングを広げていく上で有効であったかも検討する必要がある。」という指摘については次のように回答した。

アクティブ・ラーニングの典型である「卒業論文」「卒業研究」等に直結し、また学生のほとんどが受講する必修科目のような学びの根幹をなす科目を「コアAL科目」として選定した。「比治山型アクティブ･ラーニング」は、「コアAL科目」を中心として展開される。

「比治山型アクティブ・ラーニング」によって、「４×３の比治山力」がどのように育成されているのか、その学修成果の可視化については、「Hi!check」の「４×３の比治山力(自分の成長)」によって行っている。「コアAL科目」設定の有効性については、「コアAL科目」のみを対象とした「４×３の比治山力　リフレクションシート」による調査の実施、「アクティブ・ラーニング実践事例集」の作成・配付などにより、アクティブ・ラーニングの形態に関する教職員の理解が深まったことで、その他の授業科目全体への波及効果があったといえる。

2-2　平成29(2017)年度中間評価結果

平成28年(2016)度の本事業を対象とした大学教育再生加速プログラム(AP)中間評価が、平成29(2017)年度に実施された。その総括評価はA(計画どおりの取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる。)と判断された。なお以下のような改善を要する点が指摘された。これらの課題については、平成30(2018)年度フォローアップ報告書の中で回答している。

「『４×３の比治山力』育成を目指した『比治山型アクティブ・ラーニング』をどう成長させ差別化を図るのか、また、学生情報システムを定着させた上で、入学から卒業までの間において学生がどう変化していったのか、時系列的なフォローを行うこと。その際には、本事業への取組が学生の変化にどう繋がっているのか、できるだけ具体的な事例を収集し、フォローすること。」という指摘については次のように回答した。

現在は、コア AL 科目を中心に「４×３の比治山力」の育成を行っているが、今後はすべての授業科目に波及させることにより、建学の精神をふまえた本学独自の汎用的能力を備えた人材を育成し、社会と接続させる。特に、学生が「強み」だと自己評価しており、社会でのニーズも高い「コミュニケーション力」を中心に、すべての授業科目において重点的な指導を行うことでさらなる強化・差別化を図る。

「大学生基礎力レポート」「比治山力レポート」（学生対象）、「４×３の比治山力　リフレクションシート」（教員対象）、「新規採用者のスキルに関する調査」（卒業生の就職先対象）によって、経年変化を捉えている。

「各取組の PDCA が、大学・短期大学部全体の内部質保証の中核に位置付けられることが重要であり、学修成果の可視化がアクションにつながる部分の強化を検討する必要がある。」という指摘については次のように回答した。

比治山大学・比治山大学短期大学部合同の全学的組織である「質的転換加速化本部」（本部長：学長）において重要事項を審議する体制を取ることで、教学委員会・IR 委員会等の学内組織と連携しながら、学修成果の可視化等の本事業の取組によって得られた知見を、成績評価基準の厳格化・平準化など大学全体の教育改革に結びつけている。

「外部評価委員会については、保護者代表や産業界の人材も加えていることは評価するが、今後は、組織のトップに加え、実務担当者クラスも加えることで、目指す学生の主体性をよりきめ細かくアセスメントできると考える。また、アクティブ・ラーニング推進室の機能強化や、学生にとってのメリット等をより明確にしていくこと。」という指摘については次のように回答した。

平成 30 年(2018)度より、人事採用実務に詳しいキャリアコンサルタント 1 名を新たに AP 外部評価委員として委嘱した。また、アクティブ・ラーニング推進室の機能強化として、教員に対するアクティブ・ラーニング実践の支援のみならず、学生への学習サポート機能に関しても検討を進めている。

2-3　平成 30(2018)年度フォローアップ結果

平成 29(2017)年度の本事業を対象としたフォローアップが平成 30(2018)年度に実施され、その結果「訪問調査の必要無し」と判断された。なお以下のような課題が指摘された。これらの課題については、平成 30(2018)年度フォローアップ報告書及び平成 30(2018)年度実施報告書の中で回答している。

「学生 1 人当たりのアクティブ・ラーニング科目に関する授業外学修時間について、より一層の取組が求められる。」という指摘については次のように回答した。

授業外学修時間が伸び悩んでいることは、我々も自覚しており、簡単に改善できない課題として捉えている。一つには調査方法の問題もあると思われる。また、「3.達成目標と事業内容が順調に進捗している点」でも指摘されている通り、学部学科学年の違い、学生によるばらつきが大きいかもしれないとも考えており、今後、詳細な分析・調査を実施する。

「外部評価委員会の機能強化を図ることで、取組を広く産業界にアピールし、産学の連携強化を図ることが望まれる。」という指摘については次のように回答した。

これについては中間評価でも指摘されており、今回の外部評価員には、キャリアコンサルタントの藤原氏を新たにお願いしている。

「授業外学修時間の達成状況が不十分であるが、全体としての傾向なのか、学生によってばらつきが大きいのかなどを精査の上で今後の取組を強化していくことが望まれる。」という指摘については次のように回答した。

「学生1人当たりのアクティブ・ラーニング科目に関する授業外学修時間」および「学生の授業外学修時間」については、平成29(2017)年度実績値に比してやや増加が認められるが、目標値にはまだ開きがある。平成30(2018)年度フォローアップ報告書において「授業外学修時間の達成状況が不十分であるが、全体としての傾向なのか、学生によってばらつきが大きいのかなどを精査の上で今後の取組を強化していくことが望まれる」という指摘を受けたことに対応して、共通教育科目・専門教育科目それぞれ学科ごとに集計を行うなどの分析を進めている。今後は、シラバス作成時や授業時における課題設定等の状況を見直すとともに、「授業に関するアンケート」調査時における「授業外学修」に該当する内容に関する説明を徹底する必要がある。

2-4　平成 31・令和元(2019)年度フォローアップ結果

平成 30(2018)年度の本事業を対象としたフォローアップが平成 31・令和元(2019)年度に実施され、その結果「訪問調査の必要無し」と判断された。なお以下のような課題が指摘された。

「『AP 学生モニター』について、全学生に対する比率、調査内容、今後の継続的な実施計画などを明らかにし、学生への更なる浸透度合いを高めるための施策展開について確認する必要がある。」という指摘を受けたが、学生の成長・学修成果の一貫した実施把握（定時のモニタリング）を継続的に行っていく。

「五つの部会、『アクティブ・ラーニング推進室』『高等教育研究所』『AP 外部評価委員会』など、組織の充実が認められるが、それぞれの組織への教職員の関わり方、重複の有無など、組織の有機的な機能発揮の現状を確認する必要がある。」という指摘を受けたが、令和 2(2020)年度から内部質保証体制を統合し、高等教育研究開発センターを設置する予定である。

「新しく設置が検討されている『教育開発センター(仮称)』の学内における位置付け、人員体制など、中長期的視点からの計画等について特に確認する必要がある。また、補助期間終了後の資金の確保についても併せて確認する必要がある。」という指摘を受けたが、補助期間終了後の資金については、令和 2(2020)年度の AP に関する予算のうち、ランニングコストにかかるもの等を予算申請している。

「外部評価委員であるキャリアコンサルタントについて、今後の配置計画や評価項目、評価内容のフォロー等、外部の視点を生かす仕組みを更に確認する必要がある。」という指摘を受けたが、当該人物は以前から本学のキャリアセンターと連携し、キャリアカウンセリング及び就職相談の業務委託を結んでおり、今後も継続の予定である。

「『“大学内外との連携体制の仕組みづくり”を実施している』との記載があるが、今後の具体的な計画について確認する必要がある。」という指摘を受けたが、令和 2(2020)年度から内部質保証体制を刷新する予定である。

「人事採用者に対する『４×３の比治山力』に関するアンケートを実施するなど、外部、とりわけ産業界との連結強化に向けた取組が行われているが、これらの取組の継続・発展が期待される。」という指摘を受けたが、令和 2(2020)年度から内部質保証体制を刷新するのに伴い、別途対応する予定である。

「コア AL 科目以外への『４×３の比治山力』育成の波及について、今後の取組を確認する必要がある。」という指摘を受けたが、既に本学では、コア AL 科目だけではなく、開講している科目の 100%近くがアクティブ・ラーニングとなっている。

「本事業の取組によって得られた知見を大学全体の教育改革に結び付けているとあるが、成績評価基準の厳格化・平準化に向けた具体的な取組について確認する必要がある。」という指摘を受けたが、これまでも教職員合同研修会で繰り返し説明している。また教学委員会でも具体的な取組を始めている。

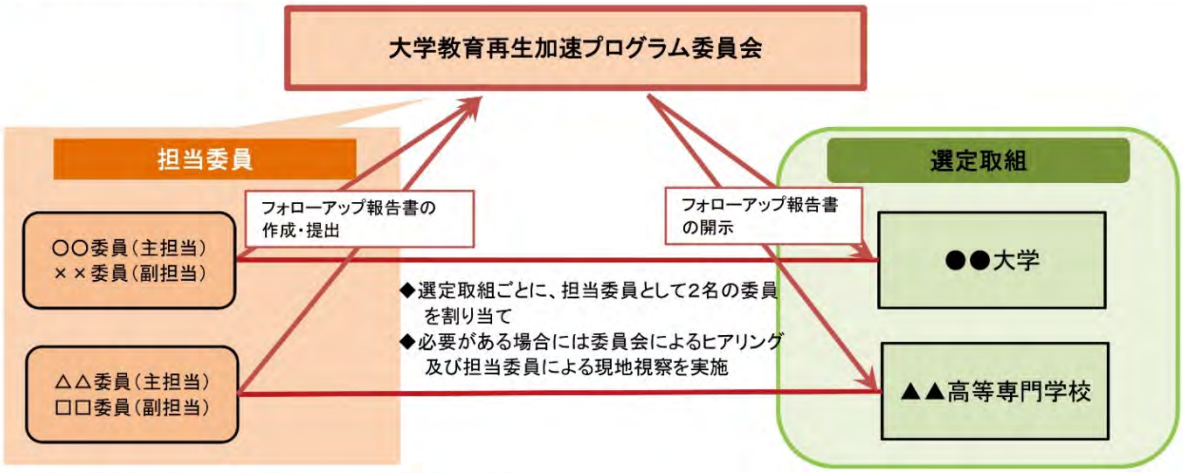
「『アクティブ・ラーニングを導入した授業科目数の割合』『アクティブ・ラーニングを受講する学生の割合』については、高い数値で推移しているものの目標値には未達であることから、最終年度に向けての取組の強化が期待される。」という指摘を受けたが、目標値 100%に達していないのは、算定するにあたって休学者を除いているためである。
「平成 30(2018)年度フォローアップにおいても指摘した、授業外学修時間に関する実績値が伸び悩んでいることに対する取組について、具体的な進捗状況を確認する必要がある。」という指摘を受けたが、授業外学修時間については、これまでも繰り返し同様の指摘を受けており、今後の課題である。
「本事業の取組が企業内の人材評価や人事評価として参考になる点を有するという記載について、産業界からどのような点で注目されているのかを明らかにするという観点からも、より具体的な内容を確認する必要がある。」という指摘を受けたが、経営コンサルタント取締役で中小企業の経営や人事や人材育成に詳しい本学キャリアコンサルタントの情報によれば、企業でも「４×３の比治山力」に似た汎用的な力について調査する取組が既になされており、その意味からも本事業のなかでも「４×３の比治山力」が有用であることを確認している。

3) 高大接続・入試改革

「比治山型アクティブ・ラーニング」により伸長が期待される汎用的能力として定義した「４×３の比治山力」の１２のスキル（情報収集力、論理的思考力、課題設定力／発想力、企画・計画力、傾聴・受信力／コミュニケーション力、チームワーク力、自己省察力／創造・表現力、プレゼンテーション力、イノベーション力）は、これまで入学後の学生の主体的・能動的な学修の実現に向けて取り組んできており、学生自身の自己評価とコア AL 科目の授業担当者の評価とを合わせて、学生の到達度を測ってきた。この「４×３の比治山力」の１２のスキルを拡大活用する取組として、令和 2(2020)年度から始める高大接続改革の一部に取り入れる予定である。オープンキャンパス、進学説明会等の入学前段階で高校生や高校教員へ幅広く示し、入学者選抜の一部（志願者の自己評価）として取り入れる。「４×３の比治山力」の１２のスキルは、学修者の強みをさらに伸ばす目的で導入したが、今後、全ての入学者選抜の中で汎用的能力として示すことで、入学前に志願者自身の強み、または伸ばしたい力を「４×３の比治山力」１２のスキルの中から考え、大学入学後の学びへとスムーズにつなげるようなシステムを構築する。
また、学生自身が学修成果の可視化を行うことにより、自らの学修活動の PDCA サイクルの確立を支援することを目的として、学生情報システム「Hi!way」の再構築を行った。その一つとして入学時の思いや将来の自分を思い描き記録する「マイストーリー」について、そのシステムを高大接続改革の一部に活用する予定である。入学者選抜（総合型選抜、学校推薦型選抜）において志願者は志望理由書を作成するが、この理由書の項目を「マイストーリー」の項目と連動させ、入学前と入学後を接続させるシステムを構築する。

大学教育再生加速プログラム（AP）
フォローアップの概要

【フォローアップのイメージ】

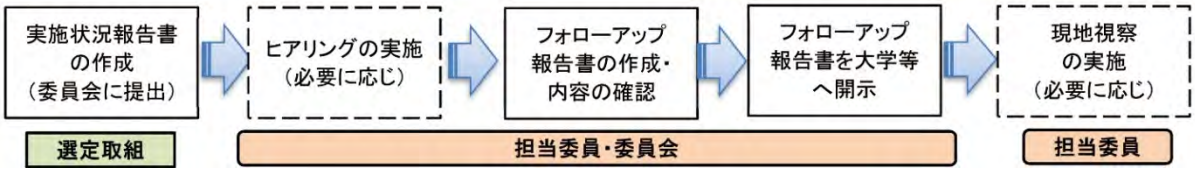


【補助期間を通じた全体の流れ】

	H26	H27	H28	H29	H30	H31	H32
平成26年度選定　46件	選定		フォローアップ	中間評価	フォローアップ	フォローアップ	事後評価
平成27年度選定　12件		選定					
平成28年度選定　19件			選定				

※　…補助期間
※　…補助期間終了後

【フォローアップの実施方法・手順】



「フォローアップの概要」日本学術振興会 WEB サイトから引用　https://www.jsps.go.jp/j-ap/data/followup/r1_ap_gaiyou.pdf

大学教育再生加速プログラム（AP）
平成28年度フォローアップ報告書

大学教育再生加速プログラム委員会
フォローアップ部会

大学等名	比治山大学・比治山大学短期大学部	整理番号	34
テーマ	テーマⅠ・Ⅱ複合型		
取組学部等名	現代文化学部、健康栄養学部（比治山大学） 幼児教育科、総合生活デザイン学科、美術科（比治山大学短期大学部）		

■順調に進捗している点

・FDerを教学委員から計画的に養成しようとしている点に小規模大学の工夫がうかがわれる。

・小規模大学ながら大半の教員が関わって本事業が進められている。

・いずれの費目も適切に使用されている。

・下記「課題」にあげた点以外は順調に進捗している。

■課題（今後対応状況の確認を必要とする点）

・具体的なアクティブ・ラーニングの実践方法に関する選定時の意見⑤については、「4×3の比治山力」として設定された汎用的能力が実際にどのように向上しているのか、汎用的能力以外の各分野・科目固有の能力や知識といった学修成果はどのように可視化されているのか、もう少し具体化する必要がある。

・「アクティブ・ラーニングを導入した授業科目数の割合」が平成31年度目標では大学・短期大学部とも100%となっているが、平成27年度実績ではいずれも3～4割に留まっている。目標達成に向けてどのような手立てがとられているのか、また、その際のアクティブ・ラーニングの定義はどのようなものかについて明らかにする必要がある。

・アクティブ・ラーニング科目が100%になった時点（平成31年度目標）でも、「学生1人当たりのアクティブ・ラーニング科目に関する授業外学修時間」は3時間/週であるのに対し、「学生の授業外学修時間」は24時間である。なぜこのようなギャップが生じるのかについて明らかにする必要がある。また、「学生の授業外学修時間」は平成27年度実績で10.2時間であるが、これを24時間まで伸ばすのにどのような手立てがとられているのか明らかにする必要がある。

・学内の実施体制について、実施状況報告書に組織名と人数しか書かれていないため、各組織がどのように連携して事業を行っているか明らかにする必要がある。

・iPad50台が学生にどう使用されているか、今後、どう活用していくかについて明らかにする必要がある。

・「コア・アクティブ・ラーニング科目」「4×3の比治山力」「比治山型アクティブ・ラーニング」といった独自の概念が繰り返し使われているが、その具体像が掴みにくい。実際に「比治山型アクティブ・ラーニング」によって、「4×3の比治山力」がどのように育成されているのか、その学修成果の可視化を行う必要がある。また、「コア・アクティブ・ラーニング科目」の設定が授業科目全体にアクティブ・ラーニングを広げていく上で有効であったかも検討する必要がある。

■特筆すべき成果

■現地視察での指導・助言 （現地視察を行った場合のみ記載）

平成 28（2016）年度フォローアップ結果

大学教育再生加速プログラム(AP) 中間評価結果

整理番号	34	大学等名	比治山大学、 比治山大学短期大学部
テーマ	テーマⅠ・Ⅱ複合型		

【総括評価】

A：計画どおりの取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる。

【コメント】

＜優れている点＞

・地方の私立大学・短期大学併設型の小規模学園の教育システムの最適モデルを目指し、平成 23 年度に策定された「比治山大学・比治山大学短期大学部 中期総合プラン 2010（平成 22 年）-2016（平成 28 年）」をベースに、既に教育の質的転換に着手しており、本事業においてアクティブ・ラーニングの視点を強化し、更なる進化に向けて取り組んでいることは評価できる。また、とかく教員個別の対応となっている改善を、全学的な取組へと進化されていることも評価できる。

・AP セミナーからコア・アクティブ・ラーニング科目への組み立て、アクティブ・ラーニング導入教員 100%達成など、小規模大学としての強みを生かした取組は評価できる。

・学長のリーダーシップの下、質的転換加速化本部を立ち上げ、多くの関係者を巻き込みながら事業を推進していることは評価できる。

＜改善を要する点＞

・「４×３の比治山力」育成を目指した「比治山型アクティブ・ラーニング」をどう成長させ差別化を図るのか、また、学生情報システムを定着させた上で、入学から卒業までの間において学生がどう変化していったのか、時系列的なフォローが必要である。

・各取組の PDCA が、大学・短期大学部全体の内部質保証の中核に位置付けられることが重要であり、学修成果の可視化がアクションにつながる部分の強化を検討する必要がある。

・外部評価委員会については、保護者代表や産業界の人材も加えていることは評価するが、今後は、組織のトップに加え、実務担当者クラスも加えることで、目指す学生の主体性をよりきめ細かくアセスメントできると考える。また、アクティブ・ラーニング推進室の機能強化や、学生にとってのメリット等をより明確にしていくことが必要である。

平成 29(2017)年度中間評価結果

大学教育再生加速プログラム（AP）
平成30年度フォローアップ報告書

大学教育再生加速プログラム委員会

大学等名	比治山大学、比治山大学短期大学部	整理番号	34
テーマ	テーマⅠ・Ⅱ複合型		
取組学部等名	現代文化学部、健康栄養学部（比治山大学） 幼児教育科、総合生活デザイン学科、美術科（比治山大学短期大学部）		

1．進捗状況の概要

■順調に進捗している点
・学長のリーダーシップの下、質的転換加速化本部を中心に的確な組織体制が整備されている。
・積極的な活動の結果、アクティブ・ラーニング導入した授業科目数の割合、アクティブ・ラーニングを行う専任教員数は、概ね目標を達成している。
・比治山型ディプロマサプリメントの構築がなされており、テーマⅤの取組と情報交換・連携しつつ、今後の更なる充実が期待される。

■課題（今後対応状況の確認を必要とする点）
・学生1人当たりのアクティブ・ラーニング科目に関する授業外学修時間について、より一層の取組が求められる。

2．中間評価時に付された留意事項への対応

■順調に進捗している点
・比治山型アクティブ・ラーニングをどう成長させ、差別化を図るかという中間評価時の留意事項に関しては、実践事例集の発行など、日常的なFD・SD活動への落とし込みがなされている。成長に向けては更なる強化が期待される。
・重要事項を「質的転換加速化本部」にて審議することで、学内組織との連携が図られていることから、今後も本体制により内部質保証の充実につなげていくことが期待される。

■課題（今後対応状況の確認を必要とする点）
・外部評価委員会の機能強化を図ることで、取組を広く産業界にアピールし、産学の連携強化を図ることが望まれる。

3．達成目標と事業内容

■順調に進捗している点
・アクティブ・ラーニングを行う専任教員数が100%に達しており、アクティブ・ラーニングを導入した授業科目数の割合についても概ね目標を達成している。

■課題（今後対応状況の確認を必要とする点）
・授業外学修時間の達成状況が不十分であるが、全体としての傾向なのか、学生によってばらつきが大きいのかなどを精査の上で今後の取組を強化していくことが望まれる。

4．事業経費その他特筆すべき事項

■順調に進捗している点
・特になし。

■課題（今後対応状況の確認を必要とする点）
・特になし。

大学教育再生加速プログラム（AP）
令和元年度フォローアップ報告書

大学教育再生加速プログラム委員会

大学等名	比治山大学・比治山大学短期大学部	整理番号	34
テーマ	テーマⅠ・Ⅱ複合型		
取組学部等名	現代文化学部、健康栄養学部（比治山大学） 幼児教育科、総合生活デザイン学科、美術科（比治山大学短期大学部）		

1．進捗状況の概要

※観点は、①大学改革の加速、②事業の実施体制、③事業の実施計画・継続性、④事業成果の普及、⑤選定されたテーマの取組を中核にした総合的な大学教育改革の取組、⑥テーマ別幹事校の取組（テーマ別幹事校のみ）

■順調に進捗している点

①「比治山型」と銘打ったアクティブ・ラーニングが順調に進捗しており、ほぼ全ての科目でアクティブ・ラーニングが導入され、目標の達成に近づいている。また、「AP学生モニターに対する聞き取り調査」も実施されており、学生への浸透のプロセスも整備されている。

②「質的転換加速化本部」を軸に、五つの部会や「アクティブ・ラーニング推進室」などを設置しており、学内の体制整備も進んでいる。加えて、「AP学生モニターに対する聞き取り調査」による学生からのモニタリングやAP外部評価委員会での評価も推進しており、本事業における成果の定着に向けた環境が整備されている。

③補助期間終了後は、「アクティブ・ラーニング推進室」や「高等教育研究所」等を統合した「教育開発センター（仮称）」の設置を検討していることに加え、「比治山型ディプロマ・サプリメント」の令和元年度からの本格運用を予定しているなど、事業の継続に向けた環境が整備されている。

④「比治山型ディプロマ・サプリメント」については、今後、社会との円滑な接続に向けて、先駆的なものになることが期待される。また、「学修成果の可視化」に関する機能は、学生情報システムへの構築が完了しており、今後の活用が期待される。

⑤入口から出口という視点は、エンロールメント・マネジメントの観点から今後の取組強化が期待される。

■課題（今後対応状況の確認を必要とする点）

①「AP学生モニター」について、全学生に対する比率、調査内容、今後の継続的な実施計画などを明らかにし、学生への更なる浸透度合いを高めるための施策展開について確認する必要がある。

②五つの部会、「アクティブラーニング推進室」「高等教育研究所」「AP外部評価委員会」など、組織の充実が認められるが、それぞれの組織への教職員の関わり方、重複の有無など、組織の有機的な機能発揮の現状を確認する必要がある。

③新しく設置が検討されている「教育開発センター（仮称）」の学内における位置付け、人員体制など、中長期的視点からの計画等について特に確認する必要がある。また、補助期間終了後の資金の確保についても併せて確認する必要がある。

④外部評価委員であるキャリアコンサルタントについて、今後の配置計画や評価項目、評価内容のフォロー等、外部の視点を生かす仕組みを更に確認する必要がある。

⑤「『大学内外との連携体制の仕組みづくり』を実施している」との記載があるが、今後の具体的な計画について確認する必要がある。

2．中間評価時に付された留意事項への対応

■順調に進捗している点

・エンロールメント・マネジメントの視点から、事例集の発行、学生の変化に対する時系列的な把握に向けた取組の強化、キャリアアドバイザーとの連携など、きめ細かい取組が行われている。

■課題（今後対応状況の確認を必要とする点）
・人事採用者に対する「４×３の比治山力」に関するアンケートを実施するなど、外部、とりわけ産業界との連結強化に向けた取組が行われているが、これらの取組の継続・発展が期待される。
・コア・アクティブ・ラーニング科目以外への「４×３の比治山力」育成の波及について、今後の取組を確認する必要がある。
・本事業の取組によって得られた知見を大学全体の教育改革に結び付けているとあるが、成績評価基準の厳格化・平準化に向けた具体的な取組について確認する必要がある。

3．達成目標と事業内容

■順調に進捗している点
・「アクティブ・ラーニングにルーブリックを導入している科目数」については、昨年度から大きく伸長していることに加え、既に最終年度の目標値を達成している。
・全学的な組織体制の整備を行うと同時に、学生のモニタリングを進めるなど、本事業の進捗に即した取組が実施されており、それらの取組の実効性が更に期待される。

■課題（今後対応状況の確認を必要とする点）
・「アクティブ・ラーニングを導入した授業科目数の割合」「アクティブ・ラーニングを受講する学生の割合」については、高い数値で推移しているものの目標値には未達であることから、最終年度に向けての取組の強化が期待される。
・平成30年度フォローアップにおいても指摘した、授業外学修時間に関する実績値が伸び悩んでいることに対する取組について、具体的な進捗状況を確認する必要がある。

4．本取組による成果・波及効果等

■順調に進捗している点
・「４×３の比治山力」が学内に浸透するとともに、広く学外にも発信され、評価を得ていることについては、本事業の全体としての目標を上回っていると考える。

■課題（今後対応状況の確認を必要とする点）
・本事業の取組が企業内の人材評価や人事評価として参考になる点を有するという記載について、産業界からどのような点で注目されているのかを明らかにするという観点からも、より具体的な内容を確認する必要がある。

5．事業経費その他特筆すべき事項

■順調に進捗している点
・事業経費については適切に執行されているものと認められる。

■課題（今後対応状況の確認を必要とする点）
・特になし。

エビデンス一覧

	エビデンス	本文挿入	別冊エビデンス集	外部評価委員会当日会場設置 令和2(2020)年2月21日実施
Ⅰ	**事業の概要**			
	平成26年度 「大学教育再生加速プログラム」申請書・平成26年度 「大学教育再生加速プログラム」計画調書			○
	大学改革推進等補助金（大学改革推進事業）調書			○
Ⅱ	**AP事業取組報告**			
1）	**実施体制及び各組織等の活動報告**			
	実施体制	○		
	各組織の活動	○		
	APWG資料（議事録含む）			○
	APAL部会・AP可視化部会・APAL/可視化部会資料（議事録含む）			○
	LMS運用準備部会資料・LMS運用部会資料（議事録含む）			○
	AP指標開発可視化部会・AP指標開発評価部会・AP評価指標部会資料（議事録含む）			○
	大学改革推進等補助金（大学改革推進事業）調書			○
	平成28年度大学教育再生戦略推進費　大学教育再生加速プログラム（AP）「高大接続改革推進事業」計画調書			○
	APチラシ			○
	大学教育再生加速プログラム（AP）パンフレット			○
2）	**「比治山型アクティブ・ラーニング」の構築と実践（テーマⅠ）**			
2-1	シラバス			iPad
〃	借り上げバス　利用実績一覧		○	
〃	「4×3の比治山力　学修の手引き」		○	
〃	HIJIYAMA手帳			○
〃	「アクティブ・ラーニングの技法集」・「アクティブ・ラーニング実践事例集」		○	
〃	「4×3の比治山力　リフレクションシート」調査票及び集計結果		○	
〃	「比治山力レポート」調査票及び集計結果		○	
〃	アクティブ・ラーニング推進室　用具利用実績			iPad
〃	アクティブ・ラーニング活用教室　活用実績			iPad
〃	みらいぷらりぃ活用実績			iPad
2-2	LMS運用準備部会資料・LMS運用部会資料（議事録含む）			○
〃	学内ワークショップ配布資料			○
〃	「アクティブ・ラーニング実践事例集」		○	
〃	iPad利用状況			iPad
〃	「Hi!space(LMS)機能紹介マニュアル」		○	
〃	Hi!space「公開講座」　開講リスト			iPad
〃	授業や予習・復習時における映像等のコンテンツ利用・視聴に関する調査			iPad
3）	**評価指標モデルの構築と学修成果の可視化の実施（テーマⅡ）**			
3-1	「授業改善学生モニター意見交換会」まとめ			○
〃	「比治山力レポート」調査票及び集計結果		○	
〃	「4×3の比治山力　リフレクションシート」調査票及び集計結果		○	
〃	AP事業開始前後における授業アンケートの回答結果(抜粋)の比較調査		○	
〃	「AP学生モニターに対する聞き取り調査」まとめ		○	
〃	「新規採用者のスキルに関する調査」調査票及び集計結果		○	
〃	「4×3の比治山力」ルーブリック検証結果		○	
〃	「4×3の比治山力」ルーブリック		○	
〃	成績評価基準の厳格化・平準化について		○	
〃	学生便覧			○
3-2	新Hi!way構想の紹介：学習活動のPDCAサイクルの確立		○	
〃	「4×3の比治山力　学修の手引き」		○	
〃	「Hi!wayシステム新機能の手引き 2015」（学生用、教員用）		○	
〃	「Hi!check」「Hi!step」への入力状況		○	
〃	「Hi!space(LMS)機能紹介マニュアル」		○	
〃	「Hi!check・Hi!step(に関するアンケート」集計結果		○	
〃	「AP学生モニターに対する聞き取り調査」まとめ		○	
	平成28年度大学教育再生戦略推進費　大学教育再生加速プログラム（AP）「高大接続改革推進事業」計画調書			○
〃	「比治山型ディプロマ・サプリメント」		○	

4)	事業に関するFD・SD活動			
4-1	高等教育研究所第1回セミナー			○
〃	AP第1回セミナー資料(チラシ、配付資料、参加者アンケート集計結果)		○	
〃	AP第2回セミナー資料(チラシ、配付資料、参加者アンケート集計結果)		○	
4-2	FDer養成研修会　実施一覧	○		
〃	授業公開　報告書、授業参観コメントペーパー			iPad
4-3	レッスンスタディ　実施一覧	○		
〃	レッスンスタディ報告書			○
4-4	他大学への視察及びセミナー・シンポジウムへの参加状況	○		
〃	出張示唆報告			○
4-5	第1回比治山大学・比治山大学短期大学部教員研修会　実施要領		○	
〃	第1回比治山大学・比治山大学短期大学部教員研修会　資料(AP(大学教育再生加速プログラム)報告)			○
〃	第2回比治山大学・比治山大学短期大学部教員研修会　実施要領		○	
〃	第2回比治山大学・比治山大学短期大学部教員研修会　資料(AP(大学教育再生加速プログラム)報告)			○
5)	本事業に関する自己点検評価と外部評価の実施			
5-1	高等教育研究所運営委員会議議事録			○
5-2	質的転換加速化本部会議議事録			○
5-4	実施報告書			○
〃	実施報告書エビデンス集			○
5-5	大学教育再生加速プログラム(AP)外部評価委員会実施要項			○
〃	AP外部評価委員会議事録			○
〃	比治山大学・比治山大学短期大学部　平成26 年度AP外部評価委員会集計結果			iPad
〃	改善案			iPad
〃	第1回比治山大学・比治山大学短期大学部教員研修会　実施要領		○	
〃	第2回比治山大学・比治山大学短期大学部教員研修会　実施要領		○	
〃	AP第1回セミナー資料(チラシ、配付資料、参加者アンケート集計結果)		○	
〃	AP第2回セミナー資料(チラシ、配付資料、参加者アンケート集計結果)		○	
〃	レッスンスタディ報告書			○
〃	出張示唆報告			○
〃	インターンシップ実績			iPad
6)	事業に関する情報発信と提供,他大学・他教育機関等との連携			
6-1	APチラシ			○
6-1,2	AP第1回セミナー資料(チラシ、配付資料、参加者アンケート集計結果)		○	
〃	AP第2回セミナー資料(チラシ、配付資料、参加者アンケート集計結果)		○	
6-2	他大学・他教育機関等との連携一覧	○		
Ⅲ	取組の成果と課題			
1)	成果			
2)	課題			
2-1	フォローアップの概要、平成28年度フォローアップ実施状況報告書、平成28年度フォローアップ報告書			○
2-2	中間評価の概要、中間評価結果の総括、中間評価結果一覧、中間評価調書、本学中間評価結果			○
2-3	フォローアップの概要、平成29年度フォローアップ実施状況報告書、平成30年度フォローアップ報告書			○
2-4	フォローアップの概要、平成30年度フォローアップ実施状況報告書、令和元年度フォローアップ報告書			○
3)	高大接続・入試改革			

事業成果報告書　用語解説

1. アクティブ・ラーニング：能動的学修。一方向による知識伝達型の学修方法ではなく、学修者が能動的に学修する方法やそのプロセス。

2. e ポートフォリオ：評価対象の活動及びその活動や業績に対する自己省察などの記述を、一定の期間にわたり収集・蓄積した電子的記録で、業績を裏付けるもの。

3. コンピテンシー：単なる知識や技能だけでなく、様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求（課題）に対応する力。

4. ディプロマ・サプリメント：卒業時の学修成果を補助的・客観的に提示する資料

5. ファカルティ・ディベロッパー：教員が授業内容・方法を改善し、教育力を向上させるための組織的な取組を行う実践者。本学では教学委員・教学専門委員長。

6. プラットフォーム：教育のための基盤となる部分

7. ラーニング・コモンズ：自主学習やグループ学習などの様々な学習に活用するための場所

8. リフレクションシート：授業の振り返りのために、教員が学期末に行うもの

9. ルーブリック：評価水準を示す「尺度」と、各段階の尺度を満たした場合の「特徴の記述」で構成される、学習を評価する際の基準の様式

10. レッスンスタディ：授業研究

11. e-learning：情報技術を用いて行う学習

12. FD：ファカルティー・ディベロップメント。教員が授業内容・方法を改善し、教育力を向上させるための組織的な取組の総称。

13. G Suite：Google が提供するもので、企業や学校などの組織内のコンピューターネットワークを活用した情報共有のためのシステムソフトウェアサービス

14. Google Forms：アンケート機能やテスト機能を持つ Google のツール

15. Google Classroom：学校現場で教員と生徒間、生徒間などでデータの送受信ができるツール

16. learning by doing：実践的学習

17. LMS：学習管理システム

18. ICT：情報通信技術

19. SD：スタッフ・ディベロップメント。大学等の管理運営組織が、目的・目標の達成に向けて十分機能するよう、管理運営や教育・研究支援に関わる事務職員・技術職員又はその支援組織の資質向上のために実施される研修などの取組の総称。

比治山大学・比治山大学短期大学部 大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅠ・Ⅱ複合型 事業成果報告書

初版発行　令和2(2020)年2月12日

第2版発行　令和2(2020)年2月21日

発行者　比治山大学・比治山大学短期大学部 質的転換加速化本部

執筆　比治山大学・比治山大学短期大学部 質的転換加速化本部APワーキンググループ

編集　比治山大学・比治山大学短期大学部 AL推進室